

水の声

ダムが脅かす
村びとのいのちと暮らし



特定非営利活動法人
メコン・ウォッチ

水の声

ダムが脅かす村びとのいのちと暮らし

特定非営利活動法人メコン・ウォッチ

執筆 杉田玲奈
監修 松本悟
編集・校正 土井利幸
校正協力 木口由香、東智美
発行 特定非営利活動法人メコン・ウォッチ
〒110-0015 東京都台東区東上野 1-20-6 丸幸ビル 2階
電話 03-3832-5034
Eメール info@mekongwatch.org
ホームページ <http://www.mekongwatch.org>
協力 エミ・トランデム、3SPN
写真 杉田玲奈
レイアウト・
デザイン 杉田玲奈
印刷・製本 ソーゴグラフィックス
発行日 2008年9月30日

本文の表記について

原語による地名・人名などのカタカナ表記は、一般に広く使われているものを参考にしつつ、参考とする先例が見あたらない場合は、現地で行われている発音をもとに表記を試みた。一部は英語表記から発音を類推してカタカナ表記にしたものもある。日本語で慣例化している団体・企業名に関しては日本語で表記し、その際に、英語名や略称を併記したものもあるが、慣例化していない団体・企業名については原語・英語のままとした。度量衡・現地通貨もほぼすべてカタカナ表記としたが、百分率（パーセント）と電力の単位である「メガワット」は、それぞれ「%」と「MW」を用いた。「ドル」は、特に断りのない限り「米ドル」を指す。

02 はじめに



04

第1部

セサン・スレポック・セコン

今昔物語 ダムが変えた
村びとたちの
暮らし

22 第2部

水の声が聞こえますか？

村びとへのインタビュー

45

第3部

もっと知るための9章

もっと知りたい!!

カンボジアの地勢
P.45

もっと知りたい!!

メコンの魚の回遊
P.48

もっと知りたい!!

三河川のダム開発
P.50

もっと知りたい!!

カンボジアへの影響
とセサン川の場合
P.59

もっと知りたい!!

カンボジアへの影響
とスレポック川の場合
P.68

もっと知りたい!!

越境する環境被害を
防ぐための枠組み
P.70

もっと知りたい!!

環境影響評価は問題回避に
貢献しているのか？
P.72

もっと知りたい!!

村人の要望、関係者の対応
P.76

もっと知りたい!!

おわりに
と日本とのかかわり
P.85

セサンの村から
〜ラタナキリ州〜

P.23

スレポックの村から
〜ラタナキリ州〜

P.29

セサン・スレポックの
移転対象村から
〜ストウントレン州〜

P.34

セコンの村から
〜ストウントレン州〜

P.41

88 参考文献

91 第4部 資料

年表
村びとが発した
主な声明・宣言・要請文

本書は、セサン・スレポック・セコン川とともに暮らす、カンボジア北東部の村びとたちの声を集めたものである。3つの河川は、メコン河の支流であると同時に、ベトナムやラオスに水源を持つ国際河川でもある。1993年11月、セコン川の上流でベトナム政府がヤリ滝ダムの建設を開始して以来、三河川流域でのダム開発が加速し、下流のカンボジアに住む人びとの生命と生活が脅かされてきた。カンボジア側の村びとたちは、カンボジア・ベトナム両国政府、メコン河委員会、ダム開発を支える援助国・援助機関にダムの被害を訴え、問題解決を求めつつづけている。しかし、今日に至るまで、ダムのもたらす悪影響を緩和する有効策や、住民が受けた損害に対する補償は実施されていない。一方でダム開発は、ベトナムやラオスばかりか、カンボジア領内でも勢いを増している。その大半は、ベトナムを筆頭とするカンボジア外の国や企業が主導する事業である。事業実施主体、建設資金、事業を大きく左右する意思決定、自然環境や住民生活への悪影響が国境をまたぐことで、問題がいつそう複雑になり、解決がいちじるしく困難になっている。

わたしたちメコン・ウオッチは、本書で村びとたちが語るさまざまな問題について、村びと自身や「セサン・スレポック・セコン保全ネットワーク」(3S Protection Network = 3SPN)をはじめとするカンボジア内外のNGOとも協力しながら、現地での調査研究、日本政府や関連機関への情報提供や政策提言、一般市民への問題提起を行ってきた。本書もそうした活動の一環であり、セサン・スレポック・セコン川流域に住む村びとたちの現状を、より多くの人びとに知っていただくことが目的である。力不足を痛感しつつも、それが村びとたちの直面する問題を解決する一歩であると信じていた。

本書を制作するにあたっては、カンボジア、メコン河流域、ダム開発などの話題にあまりなじみのない方がたにも読んでいただけるよう心がけた。第一部「セサン・スレポック・セコン今昔物語」ダムが変えた村びとたちの暮らし」では、本書が対象とするカンボジア北東部での出来事の概要を物語仕立てで再現した。村の暮らしにあるとき起こったことを読者に追体験していただけるよう、イメージを多用し、文章は簡潔にとどめた。

第二部「水の声が聞こえますか? 村人へのインタビュー」には、セサン・スレポック・セコン川流域の村々に住む人びとからの聞き取りをおさめた。現地を訪ねて、川とともに存在する日々の営みを連綿とくりかえしてきた村びとたちのことばに耳を傾けるたびに、心を突きうごかされる。現代史のうねりに翻弄されながら、伝統・文化・家族をいづくしみつつ自然を恐れうやまいつけ、問題に立ち向かおうとする個々の村びとたちの表情と、しばしば逆説的に軽妙でユーモアにあふれた語り口を再現することで、「かわいそうな被害者たち」といった類型化をさけることができばと思う。

なお、第二部のロング・インタビューはすべて、2008年6月、執筆者自身がカンボジア北東部の現地で、英語の通訳を介して実施した。村びとはクメール語あるいはラオ語で応じたが、日本語にまとめる際には、聞き取り時の雰囲気や村びとの口調が伝わるよう配慮して書きおこした。シヨート・インタビューはすべて、2007年10月から11月にかけて、

現地 NGO である 3SPN の助けをかりた村びとが自分たちで集めた証言をもとにしている。聞き取りは現地語で実施され、クメール語の記録を 3SPN が編集・英訳を行った。その後、ロング・インタビュ同様、証言時の条件・雰囲気 を考慮しつつ英訳から日本語にまとめた。

第3部「もつと知るための9章」では、カンボジアの地勢、メコン河の魚の回遊現象、セサン・スレポック・セコン川流域のダム開発の現状と弊害、問題解決に向けたこれまでの取組みなど、村びとたちが直面する問題を読者により深く、より体系的に理解していただくために必要なテーマを9項目に分けて詳述した。第4部「資料」では、本書で取り上げた出来事を年表として整理するとともに、被害住民らが発した主な声明文や要請書の和訳を時系列に並べた。声明文などの原文はすべてクメール語であるが、本書では、英訳から本文のみ日本語に翻訳した。読みやすくするために意訳をほどこした部分もある。

本書で取り上げた問題を、途上国の開発や経済援助にまつわる負の側面、とりわけ途上国で周縁化されている人びとに襲いかかる環境被害や生活破壊として一般化することはきわめて容易である。実際のところ、経済開発事業の計画・実施における説明責任（アカウンタビリティー）の欠如、情報公開や住民参加の不徹底、環境影響評価（EIA）実施時の影響の軽視や矮小化、女性・先住少数民族・高齢者・子どもといった社会的「弱者」への無関心・無見識、被害住民の貧困化や救済の遅れ、といった問題は、メコン河流域は言うにおよばず、世界の至るところでくりかえし確認されている。しかも、こうした問題は、日本に住むわたたち一般市民とも決して無縁ではない。日本政府や日本企業から、今この一瞬も途切れることなく、多額の政府開発援助（ODA）、企業支援を目的とした公的資金、基盤整備のための民間投融資が途上国に流れ込み、人びとのいのちと生活を脅かしている。これは、目をそらしてはいけない現実である。

本書の発行は、多くの人びとの協力によって実現した。特に、現地での聞き取り実施や草稿へのご意見などで協力していただいた次の方がたに感謝の意を表したい。ラタナキリ・ストウントレン両州の村びとのみなさん。3SPN の元アドバイザー、エミ・トランデム氏。Culture and Environment Preservation Association (CEPA) の職員、テク・バナラー氏とピアーク・サバン氏、元職員のウン・バナーク氏。3SPN 代表のキム・サンハー氏。元日本国際ボランティアセンター (JVC) カンボジア事務所代表の米倉雪子氏。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フェローでメコン・ウオッチの理事でもある新江利彦氏。メコン・ウオッチのボランティアの大格登氏と林亜紀子氏、インターンの大垣俊朗氏。最後に、本書の制作にあたっては、高木仁三郎市民科学基金および Oxfam Australia から助成をいただいた。この場をおかりしてお礼を申し上げます。

第1部

セサン スレポック セコン

今昔物語

ダムが変えた村びとたちの暮らし

セサン・スレポック・ セコン川

東南アジアの一国、カンボジアの中心には、大河メコンが流れています。メコン河は中国、ビルマ（ミャンマー）、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムの6か国を順に流れ、南シナ海に注ぎます。

セサン・スレポック・セコン川は、メコン河の支流です。「支流」と言っても長大な川で、しかもそれぞれ二つの国をまたぐ国際河川です。セサン川とスレポック川はベトナム、セコン川はラオスに源を発し、カンボジア北東部へと流れ、メコン河に合流します。



もっと知りたい!

カンボジアの地勢

P.45



3SPN 提供

写真見開き 5. 水の声 / 左上・スレポック川/右上・セサン川

カンボジア北東部の漁業資源

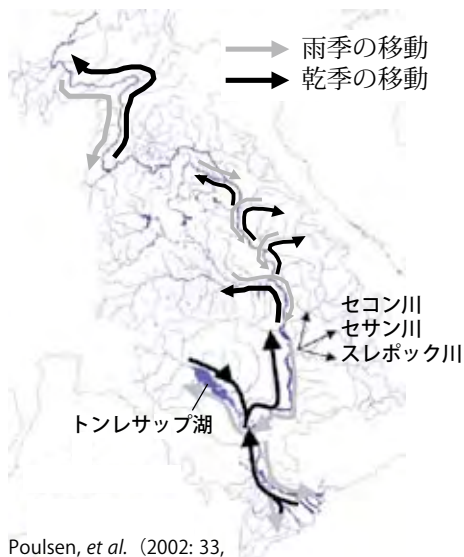


メコンの魚の回遊

P.48



TERRA 提供



Poulsen, et al. (2002: 33, 36, 39) をもとに作成。

セサン・スレポック・セコン川があるメコン河下流部は漁業資源が豊かなことで知られています。この地域では、たくさんの魚が国境を越えて、周期的に行き来しています。

例えば、ほとんど雨が降らない乾季になると、カンボジアの中央にあるトンレサップ湖を出て、メコン河本流に向かう魚がいます。これらの魚は、水位が低い時期はカンボジアのメコン河本流で過ごします。そして雨季に入ると雨が降り、水位が上昇しはじめるとセサン・スレポック・セコン川へ移動し卵を産むといわれています。

ここから先は、三河川より下流に位置するメコン河の支流や、メコン河中流部のタイやラオスなどへ移動して、最終的にはトンレサップ湖に戻っていきます。こうして通年枯れない湖や淵、早瀬などで乾季の乾燥を避けたり、雨季に川の水量が増すことによりできる氾濫原で、餌を得て成長したり、産卵したりしているのです。

このような魚の回遊は、メコン河下流部のみでなく、メコン河流域全体で見られます。重要な生息地を保全し、また魚の移動ルートをふさがずにおくことは、メコン河流域の豊かな漁業資源を維持し、流域に住む人びとの食糧安全を保障するために非常に重要であると考えられています。



TERRA 提供





TERRA 提供

川に生きる

先住・少数民族

セサン・スレポック・セ
コン川が流れるカンボジア
北東部は、ラタナキリ州、モ
ンドルキリ州、ストウント
レン州からなります。

三河川の川沿いには、約6万人の人びとが暮らして
います。カンボジアの人口の約90%はクメール民族ですが、
三河川の流域に住む村びとたちの多くは、むかしから川
とともに生きてきた先住民族、少数民族の人びとです。

ラオ族、ジャライ族、カチヨーク族、タムプアン族、
ブロー族、クルン族、カベット族、華人、ラオデウム族、
プノン族といった人びとが暮らしています。それぞれ独
自の生活様式と文化、言語を持っています。

もっと
知って
ほしい!!

カンボジアの地勢

P.45



川のほとりの暮らし

川沿いで生きる人びとにとって、川と川周辺に生い茂る森は、生活に必要なものすべてを手に入れることができる特別な場所です。

川で豊富に捕れる魚は、村びとにとって重要な食糧であり、また収入源でもあります。魚は、水位が低い乾季には「淵」と呼ばれる川の深みでじっとしています。水位が上がると淵から出て移動しはじめます。村の漁師たちは淵に名前を付け、その位置や大きさ、季節ごとの魚の動きを熟知しています。

捕った魚は煮てスープにしたり、焼いたりして食べます。また細かく刻んで塩漬けにし、発酵させて、「プラホック」を作ります。プラホックは料理の味付けやソースなどなんにでも使います。

Oxfam America 提供



3SPN 提供



上・籠いっぱいの小魚でプラホックを作る。
下・さまざまな種類のプラホック。



さまざまな種類の漁具が使われる（左・中、3SPN 提供）。



3SPN 提供



3SPN 提供



TERRA 提供



Cyndy Godden 提供

1. セサン川／2. 野生の植物。ブラホックをつけて食べる。／3. みんなで筍(たけのこ)の皮をむく。／4. 薬草を摘む。／5. 森で採れた果物。

森や川辺からは、貝やきのこ、野生の野菜や薬草を、籠いっぱい集めることができます。家や道具の材料も得ることが出来ます。

川の資源は村びとみんなにとってたいせつな共有物です。なくなってしまうほど、とりつくすことはありません。

上・左下・河岸
で野菜を育てる。
右下・田んぼ

乾季に川の水が減ることによって現れる川辺の土地は、村びとのたいせつな農地です。雨季の間は、田んぼでお米を作ります。お米は村の人びとの主食です。チャムカ(焼畑)では豆やトウガラシ、トウモロコシなど、さまざまな野菜を作ります。お米も育てます。

できたお米や野菜はおもに家族で食べますが、あまった分は物々交換に使ったり、市場に売ったりもします。





川は人びとの伝統的な交通手段でもあります。住民は、漁業、村と田畑の往復、村と村との行き来など、日常的に川を使って移動します。村びとの多くは、一本の丸太をくりぬいてできる丸木舟を使います。

水汲みや料理、洗濯は女性の仕事です。

人びとは川で泳ぎ、洗濯をし、水浴びをします。川は飲み水や料理に使うこともあります。市場で売するために飼っている牛やにわとり、豚にも川の水をやりませう。



村びとたちの文化や伝統は、地域の自然に根ざしています。川や森には精霊が住むと古くから信じられてきました。人びとは精霊を恐れ、感謝し、それを祀りなだめる儀式や言い伝えをたいせつに守ってきました。



上・生贄の水牛を捧げる場所。
中・精霊に水牛を捧げる儀式。
下・祭りの祝い酒（すべて3SPN提供）。

しかしこのような村びとの暮らしは、今、危機に面しています。



セサン川の異変

もっと知りたい!!
カンボジアへの影響
〜セサン川の場合〜
P.59

最初が変わったのはセサン川でした。

セサン川沿いに住む人びとは、川の水の増減、そして洪水は、川の自然な周期の一部であると考えてきました。つまり、乾季の間は川の水は少なく、雨季に雨が降れば水位が上がリ、雨が止めば次第に下がったのです。

しかし1996年、住民の伝統的な知恵をくつがえすような不思議な大洪水が起こりました。その年の9月に上流部で大雨が降ったにもかかわらず、洪水は約1か月遅れてやってきました。しかも数時間で急激に水位が上昇し洪水になったのです。

これ以降、激しい洪水や高波は頻繁に起こるようになりました。洪水は人や家



Cyndy Godden 提供



3SPN 提供



3SPN 提供

畜を溺死させ、農作物や住民の資産を破壊しました。チャン村では、3才の女の子と母親が川で洗濯していると、急に高波が押し寄せ、女の子をさらって行ってしまいました。女の子はいまだに行方不明のままです。

川の水位はおかしな動きをするようになりました。1日の間に数10センチも上下することもあれば、数日安定したあと、突然数メートル上昇することもあります。漁の名人でも「川が読めなく」なってしまうました。漁具を水の中に仕掛けて朝見に行くと、水位が大きく下がっていて、何もかかっていない漁具が水の上にゆれていることがあります。舟や網が激しい急な流れに押し流されることもあります。漁や舟での移動は難しくなりました。

乾季の間も水位の異常な変動は続きました。また、川の水の量は増えました。そして砂州や水辺に巣を作る鳥や、卵を産むトカゲなどの野生動物が消えてゆきました。その一方で、川が完全に干上がったときもありました。川底があらわになり、まるで砂漠のようでした。



3SPN 提供

頻繁に起こる水位の変動が河岸の下の部分を洗い流し、畑だった河岸は脆くなり、崩れ落ちてゆきました。人びとは川辺で農業を行うことが難しくなりました。

川底や淵が砂で埋まり、豊かな流れだったところに砂州ができました。魚が消え、以前は籠にいっぱい採れた野生の野菜や貝、きのこも少なくなりました。

川の水は濁り、乾季には悪臭がすることもあります。飲むとぐあいが悪くなりました。変な泡が流れてくるようになり、川に入った子どもが激しいかゆみに泣き叫ぶこともありました。村びとは、下痢、腹痛、のどや鼻の痛みやかゆみ、めまい、吐き気、咳、発疹などの問題を抱えるようになり



3SPN 提供



3SPN 提供

ました。家畜にも同様の被害が広がりました。

川のほとりの人びとは生計手段を失い、食べものを町の市場で求めるようになりました。そして借金を背負う人びとが増えていきました。

すべては変わってしまったように見えました。

「川が怖い」と人びとははじめて思いました。

「川は貧しくなった」と人びとは言いました。

問題が起こりはじめた当初、川沿いの人びとは精霊の怒りが川の異常を引き起こしていると考えました。しかし川の異変は人工的なものだったのです。



セサン川は、堰き止められています。

ヤリ滝ダム

はるか上流のベトナムで、水力発電ダムが建設されていたのです。

雨季の間も、乾季の間も、川の水は堰き止められては放水されました。ベトナムの電力需要に応じて、水流でタービンを回して電気を作るために利用されているのです。

下流カンボジアへの影響はまったく考えられませんでした。

1993年に建設されたこのダムは、「ヤリ滝ダム」と呼ばれています。さまざまな援助国・機関の支援によって、ベトナム政府が建設したのです。

もっと
知りたい!

ヤリ滝ダム事業

P.51



セサン保全ネットワークの誕生

ヤリ滝ダムの影響を受けた村びとたちは NGO の支援を受けて、2001年、問題を解決するために立ち上がりました。「セサン保全ネットワーク」の誕生です。ネットワークに参加する村は増えつづけ、数年後にはラタナキリ州の川沿いの全村が集結し、ネットワークは地域住民の声を代表する組織へと発展しました。村びとを支援する国内外の NGO も増えはじめました。

さらにその数年後には、スレポック川とセコン川流域の人びとも住民ネットワークの活動に加わり、団体の名前も地域の3つの川を守る「セサン・スレポック・セコン保全ネットワーク」に変わることとなります。

村びとたちの要望は一貫しています。川の自然な流れを回復させること、これ以上ダムを造らせないこと、村びとの生計や農作物、家畜などが被った損害を補償してもらうことです。



村びとの会合の様子 (右列も、すべて 3SPN 提供)。

村びとたちはカンボジア政府に、状況改善のためにベトナム政府と交渉するよう求めました。メコン河委員会には、国境を越えたダムの問題を解決するように求めました。メコン河委員会とは、メコン河流域の川の利用や保全について、流域の国々が協力するために作られた国際機関です。ベトナムとカンボジアはメコン河委員会の加盟国です。また、ベトナムのダム開発を支援する援助国や世界銀行などの国際機関にも、ダムによる環境と生活への影響、そして不安を訴えました。世界銀行は「世界の貧困削減」をその活動目的に掲げる国際金融機関です。

訴えを受けてメコン河委員会は、カンボジアとベトナム政府に働きかけました。この結果、2つの国がセサン川の問題を話し合う委員会が設立されました。住民たちは、ダム開発の関係者を、国レベル、地域レベルの対話に巻き込みはじめたのです。

もっと知りたい!

セサン・スレポック・セコン保全ネットワーク

P.79



Oxfam America 提供

もっと知りたい!

村人の要望、関係者の対応

P.76

政府・国際機関の対応



村人の要望、関係者の対応

P.76

2001年から2003年の間に、ベトナムとカンボジア政府の委員会は会合を3回持ちました。しかしベトナムは自国に有利な形でダム開発を進める意思が固く、一方カンボジアは、政治的にも経済的にも強い立場にいるこの隣人と対決することに消極的でした。メコン河委員会は、この2か国の間の力関係を調整し、河川管理を行うという役割を果たしませんでした。住民からの苦情に直接対応することもありませんでした。



越境する環境被害を防ぐための枠組み

P.70

また、日本をはじめとする援助国や国際機関は、ダム開発の計画作りや、個別ダム事業を準備する際の調査、送電線の整備などを通じて、ベトナムのダム開発を長年にわたって支援してきました。しかし世界銀行や北欧の援助機関は、村びとの抗議や懸念の声に対して、「私たちはダムを造ったわけではなく、直接の責任はない」と述べています。

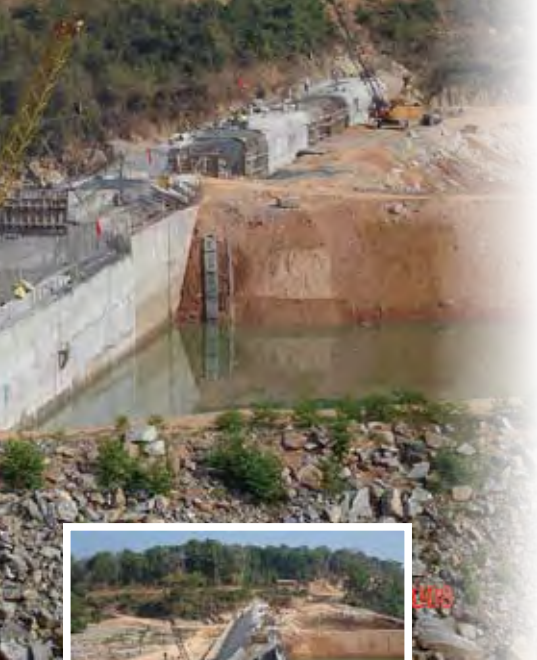
加速するダム開発



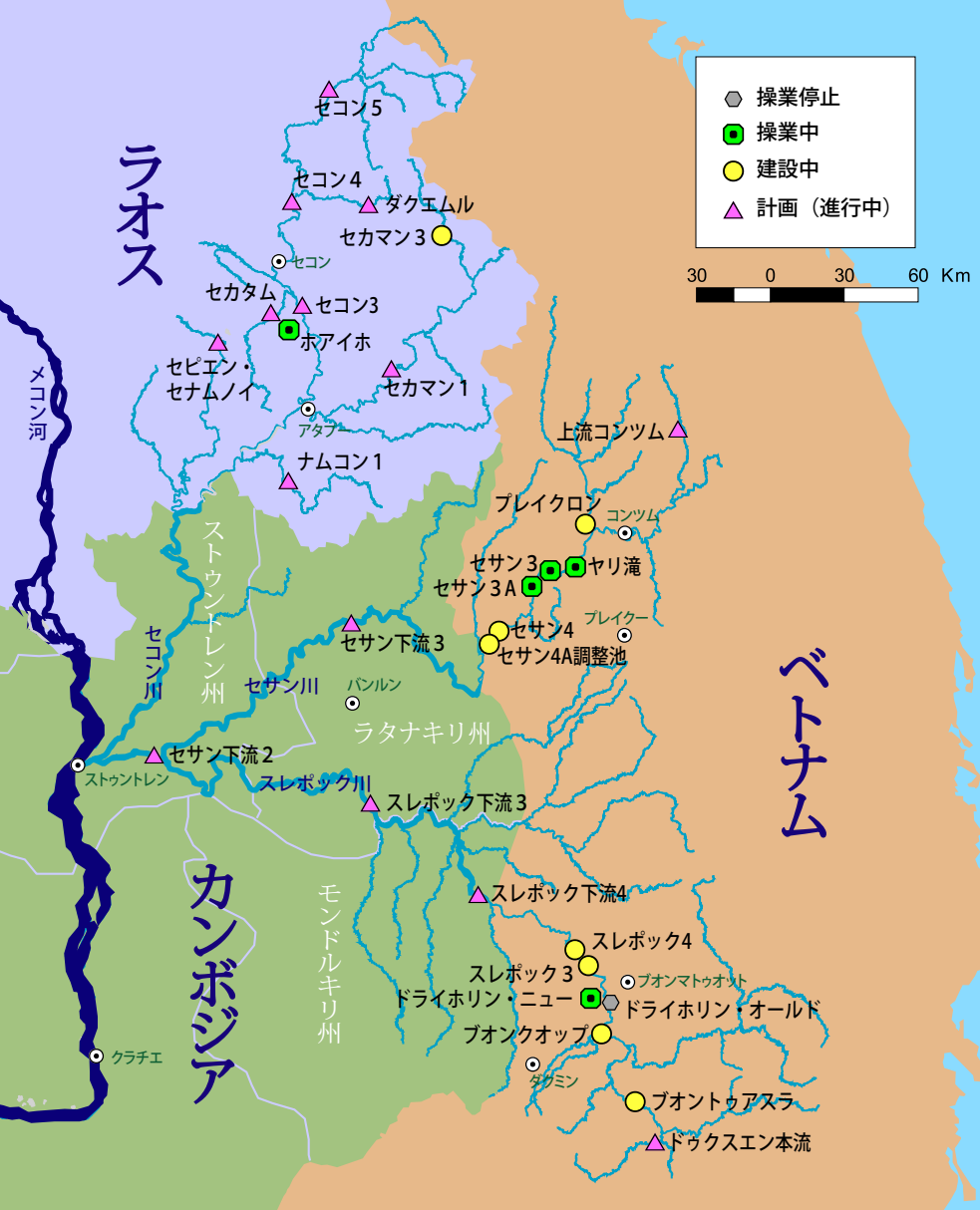
三河川のダム開発

P.50

セサン川ではダム開発が着々と進みました。現在ベトナム側のセサン川では、ヤリ滝ダムをふくむ3つのダムが操業中、2つが建設中、さらにもう1つのダム計画が進行しています。



セサン4A調整池(3SPN)



Oxfam America East Asia Regional Office (2005)、SWECO Grøner (2006a、2006b)、PECC-1 & KCC (2008) をもとに作成。セサン下流1、プレクレアン1A、プレクレアン1、プレクレアン2 (セサン川流域)、セカマン4、ナムコン2、ナムコン3、ホアイラムパンヤイ、セコン (セコン川流域) の位置は未確認。

地図1 三河川のダム開発

もっと知りたい!
環境影響評価は問題回避に貢献しているのか?
P.72

これらのダム事業には、環境への影響を少なくするためとして、援助国の支援によって「環境影響評価」と呼ばれる調査が行われたものがいくつもあります。しかしこれらの調査は、ダムによる下流カンボジアへの越境影響を完全に無視するか、あるいは適切に検討していませんでした。

ダム開発の波はスレポック川とセコン川にもおよんでいます。ベトナム側のスレポック川には操業中または建設中のダムが5つもあり、ラオス側のセコン川では操業中、建設中のダムが1つずつ、進行しているダム計画が少なくとも12もあるのです。



左・中・浸水した建物／右・洪水で大打撃を受けた稲（すべて 3SPN 提供）。

長引く苦しみと

出口の見えない不安

2004年からはスレポック川でも、セサン川のような被害が起こりはじめました。

もっと知りたい！！

カンボジアへの影響
～スレポック川の場合～

P.68

2005年から2006年にかけて、とうとうベトナムは、村びとが長年求めてきたカンボジアのセサン川とスレポック川の調査を行いました。この調査では、上流ベトナムのダムが引き起こした数々の問題が確認されました。そして村びとが待ち望んでいた緩和策と補償への道のりが提案されたのです。

しかしこの提案は、2008年に開かれたカンボジア・ベトナム両政府委員会の第4回会合の場で、十分話し合われることはありませんでした。次の会合は1年後です。緩和策や補償はほんとうに実施されるのでしょうか？

もっと知りたい！！

村人の要望、関係者の対応

P.76

一方で、こんどは住民の足もと、カンボジア側のセサン川に2つのダムを造る計画が進んでいます。カンボジア政府がベトナム政府の提案を受け入れ、ダム事業を合同で行うことになったのです。ダムが建設されることになれば、その電力はカンボジアとベトナムの両方で使われる約束になりました。そしてセサン川とスレポック川沿いに住む数千人の人びとは立ち退かされ、またこのダムから上流に住むカンボジアの人びとは、ベトナムのダムとの間に挟まれることとなります。



もっと知りたい！！

セサン下流2ダム

P.54

建設予定地周辺にある島。右下の白い部分は、ベトナムの調査団がセメントでつけていった印。



ニョーン・ブンチャンさん
ラタナキリ州タベン郡タベンラー集合村
タベン村（セサン川沿いの村）在住
（2008年6月）

お願いがあります。いろいろな国で、NGO
だけでなくふつうの人たちも、わしらといっ
しよに解決策を探してほしい。この川のほとり
に住む村びとが、自然の恵みを子々孫々まで受
けられるように助けてください。お願いします。

カンボジアの三河川の住民たちは、いつの日が自分たちの声に耳が傾けられ、川の自然な流れが回復されることを願って、ダム開発に反対するキャンペーンを続けています。村びとたちの訴えは、すでにメコン河委員会、そしてカンボジアとベトナム両国の首相にまで認識されていますが、ダム開発の被害は広がるばかりです。

セサン・スレポック・セコン川の個別ダム事業は、おもにベトナムなどの新興国の自己資金で行われています。しかし、日本もこれと無関係ではありません。カンボジア、ラオス、ベトナムは先進国や、世界銀行、アジア開発銀行から毎年多額の経済援助を受けていますが、この3国に一番多く援助をしているのは日本政府なのです。また、日本政府はアジア開発銀行の最大の出資・拠出国であり、世界銀行ではアメリカ合衆国に次いで第2位の出資・拠出国でもあるのです。さらにメコン河委員会にも資金を提供しています。

もっと知り
たい!

おわりに
、日本とのかかわり、

P.85



3SPN 提供

セサン川の住民がやり滝ダムの影響に苦しむようになって、今年で12年が経ちました。ラタナキリ州のセサン川沿いの村では川の異常な流れによる被害から逃げるために、生命（いのち）である川から遠く離れた山岳地に移る人びとも出ています。

第2部

水の声が聞こえますか？

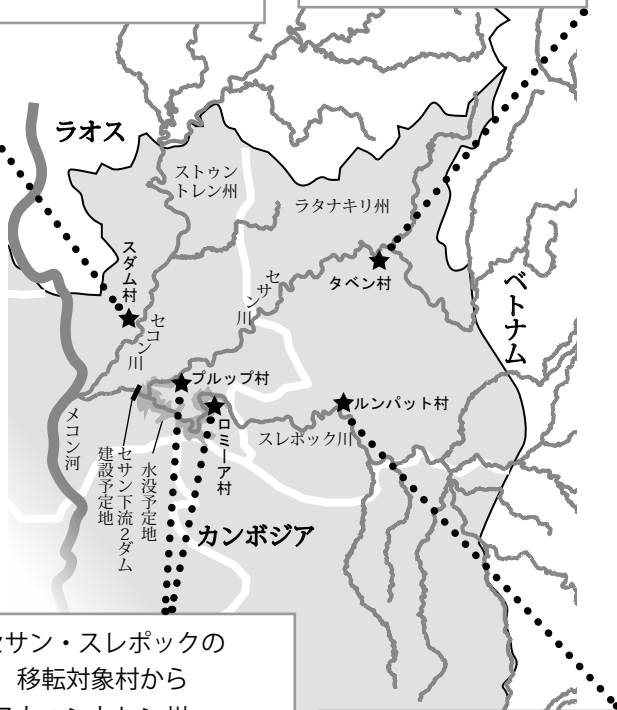
村びとへのインタビュ―

セコンの村から ～ストウントレン州～

セコン川上流のラオスでも、ダム開発は着々と進行している。村びとの話を聞き限りでは、セサン川やスレポック川ほどの大きな被害はまだ生じていないようだ。「川が少しずつ変わってきている」という声も聞かすが、上流のダムの存在は知られておらず、川の変化をダムと結びつけて考える村びとはいない。

セサンの村から ～ラタナキリ州～

セサン・スレポック・セコンの三河川の中でもっともダム開発が進み、深刻な痛手を負ったセサン川。セサン川が流れる2つの州のうち、ベトナムに近いラタナキリ州では、ダムの被害もより深刻だ。村びとは問題の解決を強く訴えている。



セサン・スレポックの 移転対象村から ～ストウントレン州～

国境から遠く離れたストウントレン州も、ベトナム側のダム開発の影響をまぬがれることはできない。そればかりか、こんどは、州内にあるセサン川とスレポック川の合流地点付近でも、ベトナム・カンボジア両政府が共同でセサン下流2ダムを建設しようとしている。立退きを強いられる村の人びとは、声に不安をにじませる。

スレポックの村から ～ラタナキリ州～

スレポック川でも、上流ベトナム側のダム開発が進み、セサン川と同じような問題が現れてきた。



ドゥー・ウイット

さん

わたしは生まれも育ちもタベン村です。祖父や祖母、両親もみんなそうです。親はクルン族とブロー族です。ふだん使うのは部族のことばですが、わたしはクメール語（注1）の読み書きもできます。

1975年、ポル・ポトから逃れてベトナム

に脱出しました（注2）。この村の住民のほとんどは、ポル・ポトが来ると聞いて、国の外に逃げたんです。1979年には、すでに戻っていたストゥントレン州で、ポル・ポト軍と戦う兵士に徴用され（注3）、訓練を受けるためにベトナムのホーチミン市に派遣されました。そこで戦術・政

1952年、タベン郡タベンラー集合村タベン村生まれ。両親はクルン族とブロー族。兵士、警官を経て、今は漁業と農業を営む。近年は、村長、住民コミュニティ代表、長老グループのメンバーも務めた。6児の父。56才。

治・クメール語を2年間学びました。1981年にベトナムから戻ったとき、わたしは26才。まだまだ子どもでした。それから、兵士として戦場で6年戦って、兵役を終えたのは30代前半のことでした。そのあとはプリアビビア州で警察副署長を務めました。そしてこの村に戻り結婚したんです。

結婚してすぐの3年間は、女房の両親と、そのあとはわたしの両親といっしょに暮らしました。両親が死んでからは自分の家を建て、今もそこで暮らしています。

女房はこの村の女です。なれそめを聞きたいって？

一目ぼれで、手紙を送ったんです。そうしたら返事が来てね。それから、よく彼女の家に会いに行きましたよ。彼女のどこが好きだったかですか？ はじめは顔、次に性格が気に入ったんです。家事もうまいしね。うん、今でもむかしのように愛していますよ。子どもは6人います。

上は26才で、下は3才です。

村に戻ってからは、農業と漁業で暮らしています。田んぼの米と魚は家族で食べる分だけ、チャムカ(注4)では、食べる分と売る分を作っています。米、なす、ココナツ、さとうきび、タバコ、パパイヤ、レモン、タンジエリン(ミカンの一種)を育てています。

川はわたしにとつて、とてもだいじな存在です。今でも、河岸で野菜を育てたり、魚ができたらと思います。水もきれいだったらいいのにと。川は、わたしだけじゃなくて、村びとみんなが必要としているんです。

2004年までは一本の延縄(注5)で、家族を養うのに十分な魚が捕れたんです。延縄を夕方5時とか6時に川に仕掛け、真夜中に1度確認して、翌朝に引き上げるんですが、2004年以前は一晚で50キロも魚が捕れました。20キロもする大きな魚もたくさん捕れたんですよ。でも今じゃ、魚はほんとうに少なくなりました。1日中漁に行つて1匹も捕れないこともあります。食べるために市場から買うこともあるんですよ。川で網や延縄はもう使えません。なぜって、水位が急に上がったり下がったりするせいですよ。延縄を水の中に仕掛けても、しばらくして見に行くと水面に浮かんでいることがありません。漁具は泥だらけになるし、いくつ流されて失くしたことが。舟も1隻失くしました。

水位が急激に変わるから、舟を岸に結びひもが切れるんです。

だからわたしはもう川で漁はしません。今年から(セサン川の)支流と池でだけすることにしました。わたしみたいに川での漁を止めた村びとは大勢いますよ。でも、池の魚も減ってます。洪水が起これば、池にも魚が増えるんです。2001年からまったく洪水がないんです。ダムのせいですよ(注6)。

1996年には、すごい洪水が村を襲いました。ヤリ滝ダムが壊れたんです。この村では3人溺れ死にました。牛も水牛も溺れました。村のあちこちが水浸しになって、わたしの家も床上まで水に浸かりましたよ(注7)。水の高さは4、5メートルはあったね。洪水は3、4日続きました。村のみんなは米と塩を持つて丘に避難しました。戻つたら、家は壊れている、道具はなくなっている。野菜は全滅。にわとり、アヒルもいなくなっていました。

水位の変動は、今年になって、少しはましになりました。ベトナムがダムの放水の仕方少しは気をつかいはじめたのかもしれない。大規模な放水のときは、3日前に通知が届くようになりました。

それでも川はおかしい。昨日も朝は水位が低かったのに、午後には高かった。1日で2メートルぐらい違うこともある。これじゃ(河岸で)

野菜も育てられない。むかしは、雨が降れば水位が上がる、雨が止めば下がる。そんなふうでした。でも今じゃ雨に関係なく上がったりがつたりします。ベトナム国境近くでは、1、2メートルの高波が出ると聞いています。

しょっちゅう水位が、あれよあれよと変わるから、河岸が崩れてきています。毎年2、3メートル分の土が川に流れ込みます。河岸の下部の土が洗い流されて、それから上部の土が崩れ落ちるんです。わたしの家はここから1キロくらいのところにあるんですが、家の近くはひどい崩れ方をしている。このまえ、豚が川沿いで餌を探していたら、崩れてきた土砂で生き埋めになって。豚は死にましたよ。このまえの乾季には、村の家畜が10頭死にました。数日前にも1頭溺れ死にました。村では、家畜からなるべく目を離さないようにしてはいたんですがね。

水質も悪くなりました。むかしは水位が低いときは澄んでいたのですが、今じゃずっと濁っています。水が悪いのは確



「この木も今年は川に倒れる込むだろう」とウィットさんは言う。



上・水辺で涼む水牛。
下・村の祠（ほこら）

かですよ。もう村の人間が川の水を使うことはほとんどありません。川で水浴びをすると体がかゆくなりますし。NGOがポンプ井戸をくれたので、みんなそれを使っています。乾季に家畜が川の水を飲むと病気になるります。下痢したり、腹が腫れたり、湿疹が出たり。

野生の動物も減りました。例えば、砂地に卵を産む大トカゲがいるんですが、水位が上がったり下がったりするから卵が流されるんです。鳥も少なくなりましたよ。ぱつと思いつくだけでも、トリードイト、ダツ、アルンベイ、トアングレイ、カアーマングなどは、ほとんど見なくなりました。この名前はクメール語じゃないですよ。わたしの部族のことばでそう呼ぶんです。この鳥たちは地面に巣を作るんですが、今ではどこに巣があるかわたしにもわかりません。

魚の棲みかもなくなりつつあります。岩の穴や川の木の穴、淵とかが、砂と土で埋まってます。村の近くには淵が3か所あるんですが、以前は深さ7メートルから10メートルはあった。そ

とか、川沿いの木の実とかが、河岸が崩れてやられているんです。

川が変わってしまったことは、村の文化や伝統にも影響をおよぼしています。例えば、川を守ってくれる精霊に感謝の祈りを捧げる儀式があつて、毎年2月ごろに砂州で祈るんです。でも今では、乾季でも砂州は水の中です。精霊は今でもそこに住んでいますよ。でも、もう儀式はできません。だから、村びとたちは病気になる、砂州の代わりに川べりで祈ることにしているんです。

ほかにどんな儀式があるかつて？ いろんなのがありますよ。ブロー族とクルン族に先祖代々伝わる伝統なんですけど、例えば、水牛を生贄として捧げて祈ったり。これは川と家の精霊に感謝する儀式です。ちょうど2日前にこの儀式をしたんですよ。田植えの前には、田んぼの精霊に祈り、豚かにわとりを捧げて、お祭りをします。収穫のあとにも、もう1度。それからどの村にも1か所、神聖な場所があります。この村では吊橋の脇にあります。

れが今じゃ2メートルぐらいいかない。むかしは川が全体的にもっと深かったんですよ。魚の餌も減ってきています。虫

ダムの話ではないですが、2001年から、密漁がはびこるようになりました。電気ショック（注8）や巨大な網を使ったり、淵に手榴弾を投げ込んだりして、魚を根こそぎ捕るんです。ラオスやタイから、魚を殺す毒を売る商人もやってくる。川にこの毒薬を投げ入れると、魚

（注1）カンボジアの公用語。先住少数民族は、それぞれのことばで育ち生活するので、みんながクメール語を自在に使えるわけではない。

（注2）1975年4月、ポル・ポト率いるクメール・ルージュは、首都プノンペンに進攻し、当時のロン・ノル政権を倒した。クメール・ルージュは極端な民族主義的共産主義政策を採用し、多くの国民に農村での強制労働を課した。虐殺・粛清が横行し、病氣・飢餓をあわせて、1979年1月に政権が崩壊するまでに、約170万人の人びとがいのちを落としたといわれる。

（注3）1978年末、ベトナム軍がカンボジアに侵攻。翌1979年1月には、プノンペンを攻略。クメール・ルージュはタイ国境近くまで駆逐され、カンボジアに親ベトナムのヘン・サムリン政権が樹立された。しかし、1982年には、ヘン・サムリン政権とポル・ポト、シハヌーク、ソン・サン3派との間で内戦が勃発。パリで和平合意が成立し、カンボジア内戦が終結したのは1991年のことだった。

（注4）陸稲、バナナなど作物栽培のために行うローテーション方式の焼畑を指す。

（注5）はえなわ、漁具の一種。1本の幹繩に「延繩」と呼ぶ多数の枝繩を付け、枝繩の先端に釣り針を付ける。漁場に仕掛けたあと、しばらく放置して延繩を回収する。

（注6）自然の営みの重要な役割を果たしてきた。一方で、ダムの放水は河川の自然な流れを乱し、水位の異常変動や不定期な洪水の原因となる。

（注7）川沿いの村々では、ほぼ全戸が高床式で、居住部分とは地面から2メートルほど高くなっている。床下は漁具などの道具置き場や作業場として使う。

（注8）変圧器につないだ自動車のバッテリーなどで、無差別に魚を感電死させ捕まえる。



川と森林と土地を奪われて、わたしたちはどうやって生きていけばいいのでしょうか？

が死んで川の表面に浮かびます。違法漁業をするのは、警察や地元の役人です。彼らは金銭的な価値の高い木を切ったり、森の鹿や孔雀（くじゃく）、水牛、象、虎を銃で撃ち殺したりもします。象や虎は、1991年ごろは見ましたけど、今ではほとんど見ることはありません。

今、村では、みんな、土地の問題で頭を悩ませています。コンセクション（利用権）を手にした企業が、この村の近くにもやって来たんです（注9）。村のコミュニティ森林（注10）の区画とコンセクションの区画が重なっているんです。

村の人間はむかしから森を大切に、ラタン（藤）、木の葉っぱ、竹を家で使ったり、トカゲや鹿、野豚などの動物を食べたりしているんですが、今は森に行くことができないので、ほんとうに困っています。森でなにか採ろうとすると、コンセクション企業ともめるんです。今年の3月から4月、コンセクション企業が森の木にペンキで印を付けました。伐るためです。よその村の近くでは、もう2、3ヘクタール（2、3万平方メートル）の森を電動ノコギリで切り倒してしまいました。村では「（フン・セン）首相にこの問題を伝えよう」と言って、州政府の事務所に行きました。書簡も送りました。でも、なしのつぶてです。

NGOに助けてほしい。お願いだから、助けてほしい。川と森林と土地を奪われて、わたしたちはどうやって生きていけばいいのでしょうか？ 住む場所もなく、川からも森からもなにも受けとることができなくなる。このままじゃ首をくくるしかない。村には、「家族を殺して、自分も首を吊って死ぬ」と言う人までいます。

今年、わたしにとっても村の人間にとっても、難しい年です。川と森の問題の上に、雨が降らなくて、米はやられてしまったし、物価も上がっています。それなのに、またダムができるんです！ セサン川沿いの5つの村は、ストウントレンの（セサン下流2）ダムに反対する

ことをもう決めました。日本とベトナムと中国がいつしよになってこのダムを造ると聞いてます。外からやってくる人たちは、カンボジアを破壊して、電気を作って、それを自分の国に持ってかえるなんてことをするべきではない。ただ、ストウントレンのダムを造りたいのはカンボジア政府もおなじなんです。政府は「絶対造る」と言っています。

上流にベトナムのダムがあつて、下流にもダムができるわけです。これでスレポック川とセサン川には、魚が完全にいなくなるでしょうね。魚はダムを泳いで突っ切ることはできませんから。話が長くなりました。アイラー・ハツサイ！ クルン語で「ありがとう」って意味です。

（注9）カンボジア政府は、地元住民が占有・利用しているか否かにかかわらず、一地域の土地を区分し、その利用権（コンセクション）を特定企業に売りわたしてしまふ。これによって、地元住民の人権が侵害されたり、環境が破壊されるなど、多くの深刻な問題が発生している。（注10）村ごとが共同で管理する森林。

も知りたい！
村人の要望、関係者の対応
P.76

も知りたい！
メコンの魚の回遊
P.48

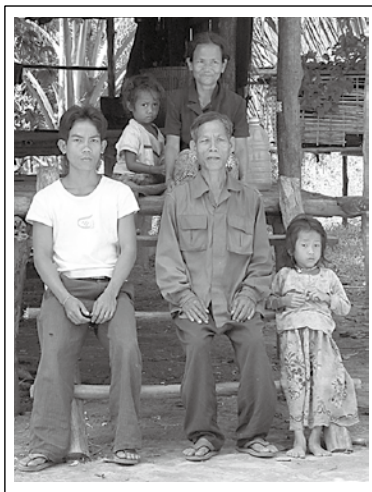
も知りたい！
三河川のダム開発
P.50

も知りたい！
セサン下流2ダム
P.54

も知りたい！
カンボジアへの影響
セサン川の場合
P.59

も知りたい！
ヤリ滝ダム
P.51

- ①名前
- ②年齢
- ③民族
- ④職業
- ⑤居住地



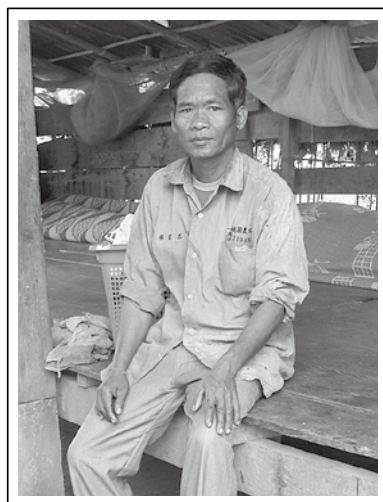
①プロナン・ティエンさん（前列中央）②年齢不詳 ③ブロー族 ④農業・漁業 ⑤プエンサイ郡カチョン集合村カリム村

10年前とくらべて、川はすごく変わったよ。水位も上がったりがったり、ふつうじゃない。川辺で育ててる野菜は、ほとんど全滅だよ。河岸が崩れ落ちて、食べものや薬に使っている木が川に倒れ込むときもある。乾季は水がすごく汚れていて、川の水を使うのは危ないんだ。



①ローマム・メリさん ②55才
③タムブアン族 ④農業・漁業
⑤オーヤダウ郡セサン集合村パウル村（ベトナム国境近く）

ぼくたちの文化にとって、川は重要なんです。ぼくたち先住民は、川の近くに住むのが好きだし、川の精霊をうやまう。特に川の深いところや、ワニに宿る精霊たちをたいせつにしているのです。生まれたときからここに住んでいますよ。でも、今のぼくたちは、いつダムが壊れるかとおびえながら暮らしています。だから、安全な場所に住むといって、村びとたちは、どんどん山間部に移っていきます。



①コー・ヴィックさん
②46才 ③ブロー族
④農業 ⑤タベン郡タバベンラー集合村タバベン村

セサン川は、わたしのいのちです。村にとっても川は村と切り離せない存在です。川の水は、生活のほかに、いろいろな儀式にも使います。先祖や精霊に祈ったり、誓いをたてるのです。例えば、村でいさかいが起きて、どっちが正しいことを言っているのか判断しなければならぬとき、争っている者が同時に川にもぐり、息がもたなくて先に上がってくる方が嘘をついているのです。これは、川の精霊が不正直な人にそうさせるからです。

わたしはすべてのNGOに、セサンの被害について知ってもらいたい。そしてわたしたちを助けて、セサン川についてもっと心をくだいてほしい。そうお願いしたいです。いつダムが壊れるか、倒れるか。そして、わたしたちを殺しに、わたしたちが持っているものすべてを破壊しに来るのでは、と心配です。



①ウイ・ネーンさん ②71才
③ラオ族 ④農業・漁業 ⑤ブレ
ンサイ郡パン集合村パン村

この村で生まれ、ずっとここに住んでる。子どももここで6人育てたよ。川はすぐたいていせつ。漁をして生きてるからね。毎日、川に漁に行つて、水を使っているよ。でも漁は今、難しいねえ。10年前はすぐに3、4キロの魚を捕まえたもんだよ。でも今は無理だね。夜、川に網を仕掛けて朝引き上げるんだけど、捕れるのは200グラムぐらいだね。1キロはとても無理。家族が食べる分にしかない。なにも捕れないときもある。

むかしはね、川は自然に流れていた。家族を十分に食べさせられない、なんて心配はなかった。ベトナムがダムを造つてから10年以上経つ

①ウク・ノームさん ②57才 ③ブ
ロー族 ④農業・漁業 ⑤タベン郡タ
ベンクロム集合村コーボン村



4人の子を育てているよ。女の子が1人、男の子が3人。あたしが生まれたのもこの村よ。

朝起きたら、子どもたちにご飯をつくつて、川に水を汲みに行く。それから畑を耕すために木を切つたり、村や畑の柵を作るために竹やラタン（籐）を集めたり。それに野菜を育てている。雨季のときも乾季のときも、食べるものに困らないようにね。

あたしが今抱えている問題？

まず、刺し網や延縄が洪水で流されること。次に家畜が川で水浴びしたり、水を飲んだりすると病気になつちゃうこと。それから洪水が起こるたびに、たくさんの場所が河岸が崩れ落ちること。だから河岸で野菜を作ることができなくなったよ。あと、川を舟で移動しているときに水位が急に上がった、高い波が来ること。舟が流木にあたって、沈んじゃうんだ。洪水がこわくて砂洲の上でゆっくりできないし。だから漁に出るときは睡眠不足になる。伝統的な行事や儀式もできなくなったよ。

シン・ トーンラオ さん

1958年、ルンパット郡チェイ・ウードム
集合村ルンパット村生まれ。ラオ族。農
業と小売業を営むかたわら、ルンパット
郡のコミュニティ代表を務める。50才。

生まれたときから、この村に住んでるよ。学
校は戦争のせいで、8年生までしか行けなかつ
た。学校では、作文の授業が一番好きだったな。
動物や人、景色なんかを描写するのが楽しかつ
た。わたしは記憶力がいいの。なんでも2度読
めば、だいたい覚えられる。もし勉強を続けら
れたら、ビジネスウーマンになりたかったよ。
1974年に村の保健係になって、ポル・ポ
ト時代もその係を続けた。この村は、ポル・ポ

トに移住させられなかったんだよ。ポル・ポト時
代に人を助けることができたのは、人生で一番
誇りに思うことのひとつ。たくさんの人が保健
施設に来て、みんなご飯を必要としていた（注
11）。でもご飯はわずかしかなくて。だからいつ
もオンカー（注12）がご飯を余分に持ってくる
よう要請を出した。5人しか病人がいなくても、
8人分要請するというぐあいに。「誰にも言っ
ちゃだめよ。オンカーにばれたらわたしが殺され
る」って、みんなに口止めした。それは泥棒行
為だったかもしれないけれど、正しいことだつ
た。だから今でも村びとたちには尊敬されてい
る。わたしはいつも自分の行いに気をつけてる
し、過去の行いについても自信を持っている。
結婚したのは20才のとき。夫は兵士だった。
結婚式は、4組で同時に挙げた。翌1979
年、カンボジアはポル・ポトたちから解放され
て、わたしも保健係を降りた。たいへんな仕事
だし、勤務時間が長いからね。それで駄菓子を
売ったり、家畜を育てるようになった。
1995年、わたしが37才のとき、夫が死
んだんだ。それからずっと、7人の男の子を女
手ひとつで育てている。そりゃあたひへんだよ。
1997年から2000年まで、ユニセフが
支援する識字教育の先生もしていた。でもお金



2005年のスレボック川。右手前の河岸ではトウモロコシなどの野菜が育てられていた。

は家族を養うには足りなくて、辞めて、また駄菓子や生活用品を売るようになったんだ。

スレボック保全ネットワークに参加したのは、2005年のことだよ。今はルンパット郡のスレボック・コミュニティの代表を務めている。「コミュニティ」というのは、行政じゃなくて、NGOの支援を受けたふつうの市民の集

まりだよ。

スレボック川流域には、2郡で7か村あるんだけど、それぞれの村で住民コミュニティの代表を選出している。そして村の代表の中から、集合村レベルの代表を1人、郡レベルの代表を2人、選挙で選ぶんだ。郡の代表を選ぶときは、地元当局や村長、集合村長、郡長も入れて、約

40人が選挙に参加する。選挙で選ばれた代表と長老グループが郡を代表しているんだよ。

コミュニティ代表の仕事のひとつは、情報収集と普及。村びとたちが抱えている問題を聞いて、それをもとに報告書を書いて、集合村や郡の事務所、NGOに送る。それから郡レベルのコミュニティ会合や月1回のNGOとの会合で話し合ったり、そこで聞いたことを村の人たちに伝えたりもする。こうして川の問題を解決しようと働くの

(注11) ポル・ポト政権下では、過酷な強制労働が課せられた一方で、共同炊事で管理した乏しい食事しか与えられず、おびただしい数の人びとが衰弱、餓えによっていのちを失った。

(注12) ポル・ポト政権の下部組織のこと。オンカーがすべてを決定し、国民はオンカーに忠誠を尽くさなければならず、反抗する者は容赦なく殺害された。「オンカー」は、クメール語で「組織」の意味。

は、いいことだよ。村の人たちといっしょに仕事して、解決策を見つめることに貢献できる。情報を伝えたり、報告書を書いたりといった具体的な行動をとれるのもうれしいね。

反対に、この仕事をしていていらいらさせられるのは、地元当局の対応だね。村びとを助けようという強い意志が感じられないときは腹が立つよ。報告書を書いても書いても、問題は解決されないままだ。

川はわたしたちの生活と文化にとって、ほんとうに重要なんだ。川は、村に住むわたしたちのいのちだよ。わたしたちは、川に頼って生活している。川なしには生きられないんだ。川の恵みが少なくなれば、わたしたちの生活も収入も減ってしまう。文化も、お祭り行事も、川がなければありえないんだよ。

わたしはここに長いこと住んでいるから、川のことにはよく知ってる。ふつうだったら、乾季の水は澄んでいるし、流れも自然なんだ。スレボック川が一番きれいな時期なんだよ。水質について心配することもない。川の水は、きれい



だったんだよ。小さいころから、いつも川の水を使っていた。雨季に雨が降れば、水位が高くなって水は濁るけど、雨が止んだらまた水位は下がって、水は元のとおり澄んだんだ。今はそうじゃない。

それに、むかしは、今みたいに、毎年のように洪水は起こらなかった。2005年よりまえは、洪水があっても、気に留めることはなかった。大きな洪水は、2、3年おきくらいにしか起こらなかったし、そんなにひどくなかったもの。1969年と1973年にひどい洪水があったけれど、それくらい。

でも2005年には、ひどい洪水が3度もあった。村は文字通り、水の中に沈んじゃった。水位は、立ち上がってもわたしの頭をゆうに超えるほどだった。4、5日おきに水位が上がって、それから下がった。田んぼもめちゃくちゃ。2006年は洪水が2度あった。2005年よりもひどかったよ。2007年には、もつとひどい洪水が1度あった。

しまったよ。ぜんぶで4、5匹しか生きのこらなかった。死んだ豚を家に連れてかえって、しばらくのあいだ泣いたよ。もちろん、田んぼは全滅だったし、にわとりもひよこも流されて行っちゃった。

わたし自身もたいへんだつたよ。市場に行くこともできなから、ご飯がなくて、缶詰を食べてしのいだ。水位が2日間とても高くてね。村びとたちは助け合って舟で高台に逃げた。地元当局も大きな舟を出して助けてくれた。わ

わたしは、親豚と子豚をあわせて12頭飼ってたんだけど、どうしていいかわからなかった。舟を持ってないから高台に連れていけないくてね。子豚は死んで

たしも高台で一晩過ごしたよ。お年よりや子どもは2、3日避難してた。

村びとたちは、洪水はベトナムのダムの子供だと思ってる。洪水のまえの日、村長が、「洪水が来るから気をつけるように」って、みんなに伝えたんだ。それを聞いて何人かは高台に避難したけど、準備する間がなかった人もいる。だって、「明日、大洪水が来る」って、今日聞いたって、ねえ。村長は洪水の情報を集めた村長に聞いたようだよ。集合村長は郡長に聞いたんじゃないかな。



2006年8月、大洪水がルンパットを襲った。家屋は水の下に沈み、田畑は破壊された (SPN 提供)。





今年も洪水が怖い。
逃げる用意はいつもしているよ。

2005年の洪水のときは、何の警告もなかった。2006年の洪水のときは、ダムの放水についてラジオで聞いたっていう人もいる。でも、聞いたのは洪水が起ったあとのことだった。それでまた来るのかと怖くなって、高台に戻った人がいた。

2004年の乾季は、水位が低くてね。岩がたくさん水面に出ていた。今まで島なんてなかったところにも、島ができてた。舟で移動もできなくて。あんなことは、それまではなかったねえ。村では乾季に貝を採ったりするんだけど、あの年は全滅だった。貝は岩に張りついているから、乾燥して死んだんだね。魚もだよ。あんなふうに水が少ないと、川は池になっちゃってさ！
魚は泳いで逃げられないから、電気ショックでぜんぶ捕まえる人がいた。あの年には魚が大

打撃を受けたと思うよ。
2005年は、水がそこそこあって、こんどは急に上がってきた。異常だったよ。クメール正月（注13）のときも水位が高くて、バゴダ（仏塔）に持っていく砂を集めることができなかつたから、伝統の儀式ができなかつたんだよ。

毎年、米を収穫したあとは、河岸で野菜を育てていたんだけど、2005年からできなくなつた。11、12月は、水位が高くて、野菜を育てる土地が水浸しになつたから。これでたくさんの人が生計手段を失つた。

魚も減つてきた。村の人は食べるのにも困つてきた。売るほど捕れないし、買おうとすると高いし。2005年ごろの魚の値段は、1キロあたり、だいたい3000から5000リエル（80円から130円）だったのに、今じゃ1万2000リエル（約320円）もする。米も値上がりしてる。かつてはキロ当り1000リエル（26円）だったのが、今は3倍もするよ。なんでかわからないけど、カンボジア中で値上がりしてるそうだよ。

水位が上がつたり下がつたりするから、

2005年くらいから河岸が少しずつ崩れてる。川から2、3メートルも崩れ落ちたところもあるよ。崩れるのはだいたい雨季のことだね。2005年と2006年は、川の水が真っ赤になつた。ビンに入れて2、3時間置いとくと、底に赤い土がたまつた。それでも、まだ水の色は赤いままだつた。川は今でも赤いけど、村では川の水を使っているよ。最近では煮沸してから使うけどね。2005年から、特に乾季に水位が上がつたときに、子どもが川で泳いだり、水浴びすると、体がかゆくなるって言う人がいる。わたしは井戸水を使う。でも井戸を持つていない人や漁師は川の水を使っている。

NGOには、わたしたちがこの問題を解決できるよう支援してほしい。どうかわたしたちを助けて。支えてください。

（注13）カンボジアの正月。4月中旬に祝う。

もっと知りたい!!	もっと知りたい!!	もっと知りたい!!
カンボジアへの影響 「スレポック川の場合」	村人の要望、関係者の対応	セサン・スレポック・ セコン保全ネットワーク
P.68	P.76	P.79

①名前 ②年齢 ③民族 ④職業 ⑤居住地



①ブンタン・チャンさん
②68才 ③ラオ族
④農業・漁業 ⑤ルン
パット郡チェイウードム
集合村ルンパット村

漁をするかつて？

わたしは漁師よ。朝

と晩、日に2度川へ漁に行くの。刺し網や釣り糸、仕掛けも使うよ。一晩で10キロから14キロは捕る。いくらかは自分たちで食べるし、あとは売る。家族を養うのに充分なだけは稼いでる。子どもが6人いるの。3人は女の子。1人は死んでしまった。

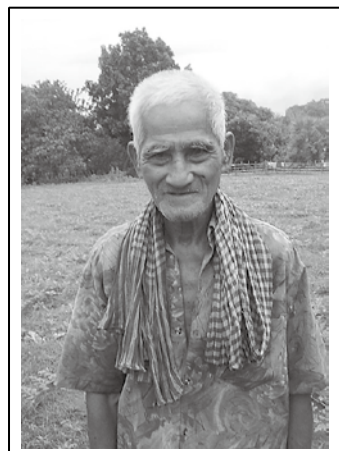
でもここ数年、川は変わったね。今までは、洪水が起こるのは4、5年に1回だったし、長く続かないから稲も平気だったの。それに洪水が田んぼの虫を洗い流してくれたから、田んぼにとつてもよかったのよ。でも今は洪水がしょっちゅう起こって、田んぼや畑、家畜や家財をだめにする。川の水は、雨季も乾季も濁って、使えなくなつた。乾季の方がまだましだけど。川で水浴びはもうしない。肌がかゆくなるから。飲み水や水浴びには雨水を使ってるわ。

おれは漁師だよ。漁以外にも、いろんな目的で川を使わせてもらってる。野菜を作ったり、舟で移動したりさ。川はおれたちの文化と伝統にとって、すごく重要なんだよ。灯籠流しとか、仏塔に砂の山を作るために砂を集めたりね。毎日やっていること？ 畑の草

取りをしたり、大豆を育てるために畑を耕したり、柵を作ったり、さとうきびやバナナの木を育てたり、漁に使う網を作ったり、直したり、家畜や田んぼの世話をしたり、刺し網や延縄を仕掛けたり。おれが考えるに、川は、おれたち村びとみんなの生計手段の基礎だね。川にすっかり頼ってるから、川なしじゃ生きていけないよ。



①タイ・ライさん ②76才
③ラオ族 ④農業・漁業
⑤ルンパット郡チェイウードム
集合村スレポック村



①トゥン・ソンさん
②76才 ③クメール族
④農業・漁業 ⑤ルン
パット郡チェイウード
ム集合村ダイロー村

1964年から川の近くに住んでいます。子どもが10人いて、今はそのうち2人を養っています。川はともたいたいせつです。なぜつて？すべてにおいて頼りきっているからです。魚も捕れますし、食べるため、売るために野菜も作れます。家畜も育てられるし、川辺で野草や野菜を摘むこともできます。

今、川の様子が大きく変化してきています。水は濁ってますし、水位が急に変わって、予測することもできません。2004年から2007年の雨季は、洪水ばかりでした。1年に2度も、3度も洪水があつて、田んぼも畑もだめになつた年がありましたよ。乾季には川が干上がりました。淵はすごく浅くなつて、川底の砂があらわになりました。河岸が崩れたところもたくさんあります。川の恵みが失われてきてるんです。

川は、わたしのいのちだと思っています。川から離れることなどできません。

セサン・スレポツクの移転対象村から（ストウントレン州）



リー・ンバン さん

1968年、セサン郡ブルップ集合村ブルップ村生まれ。クメール族。農業と漁業を営む。40才。

10人家族です。両親と妻、息子、娘と暮らしています。両親は家事を、息子は畑を手伝ってくれます。みんなこの村で生まれました。

田んぼとチャムカを耕しています。チャムカでは、米、バナナ、ココナツなどを作っています。漁は家族で食べる分を捕るだけです。

森には月に1、2度、いろいろなものを採りに行きます。家族のだれかが森に行るときは、のこりの者が全員で行いに気をつけないと森にいる者に悪いことが起きます。待っている者たちは、喧嘩をしてはいけなし、家から遠く離れてもだめです。川に行くときもおなじです。1回の漁で1週間から10日家を空けますが、家族がまちがった行いをする、事故が起こつたりします。村にはそういう例がたくさんありますよ。

これは、精霊の業（わざ）です。わたしは見たことはありませんが、祖父たちから教えてもらいました。精霊が川に宿っているのです。

木や森の色があざやかな5月ごろの川

を見るのが好きです。その年で1番目、2番目に降った雨で水位が上がると、淵にいる魚がよるこんで出てくるので、漁もしやすい。川はきれいで、魚もうれしそうだし、漁師もうれしくて、みんながしあわせな時期ですね。

しかし、今の川はむかしとちがいます。特に4月と5月におかしくなります。4月は水がなまあたたかかった。1993年よりまえは冷たかったのですが。特に乾季の間は、水を飲む人も家畜も病気になることがあります。

魚、野菜、きのこ類はとも少なくなりました。捕れる魚の量ですけど、むかしは1回の漁で10キロぐらい捕れたのが、今では5キロくらいでしょうか。だいたい半減ですね。なにも見つかからないときもあります。

水の流れも変わりました。漁に行くとき、はじめのうちは水位が低いのに急に高くなることがあります。そんなときは漁具が流されて、なくしたりもします。

それに、川の岩がむき出しになるので、きが生えなくなりましたね。川辺の野菜も減りました。わたしが15、16才のときは山ほどあったのですが。川の淵も浅くなりました。

2001年と2002年だったかなあ、洪

水が起こりまして。わたしの家は、川からだいぶ離れているのですが、床下まで水が来ました。あんな遠くにあるヤリ滝ダムですら、こんなにも川の姿を変えて、問題を起こすんです。こんどの（セサン下流2）ダムが近くにできたら、どれだけ変わるんでしょうか。ここから5キロくらいのところにできるかもしれないんですよ。なにがどうなるかまったくわかりません。村では、魚や森の精霊、淵、わたしたちの生活や文化がどうなるか、みんな心配しています。立ち退きについても不安です。

補償には同意していません。わたしの家は大きいし、川に近くて、水を汲みに行ったり、漁をするのに便利なんです。川では石を使って、洗濯もできます。むかしからここでずっとしあわせに暮らしているんです。だから、同意しませんでした。

わたしたちはここでしあわせに暮らしているんです。家や井戸は、別の場所に建てなおせたとしても、わたしたちの心は何世代もまえからここにあるんです。

わたしたちの今の暮らしは、こんな感じですよ。まずお湯を沸かしておいて、30分だけ漁に行く。捕まえてきた魚を沸かしておいたお湯で料理して食べる。こんな暮らしがなくなってしまうのです。どう補償してくれるんでしょうか。ここを引きはらうのは悲しい。補償があったと

しても、ここを引越すのは嫌なんです。たぶん政府や企業は、わたしたちをここから追いたてて、わたしたちは嫌々ながら従うことになるんですよ。もし寺もチャムカもすべて補償してくれたとしても、わたしたちは今のままが一番いいのです。もし学校や耕作用の土地をくれないのであれば、引越すことを断固拒否します。補償内容はまだ知りません。ベトナム人の調査団が3月と4月にこの村にも来ました。資産について聞かれた村びともいれば、なにも聞かれないまま、なにかの情報をノートに書き込まれた人もいます。聞いた話では、4か所の集合村が水没し、2214世帯が移転させられるそうです。

セサン川沿いの村々に住む人びとは、政府にダム建設を止めてほしいと思っています。どうすればいいんでしょうか？ あなたNGOでしよう？ どうすれば建設を止めてくれると思いますか？ 村びと全員で手紙を書いたらどうでしょう。どう思います？ 止まると思いますが？

- もつと割りたい!!
セサン下流2ダム
P.54
- もつと割りたい!!
ヤリ滝ダム
P.51
- もつと割りたい!!
カンボジアへの影響
セサン川の場合
P.59



ブルップ村の様子。川沿いに家が並ぶ。



パウ・マイ さん

1966年生まれ。ラオ族。セサン郡ブルップ集合村ブルップ村在住。かつては兵士、警察官を、今は農業を営む。最近は、ボランティア活動にも精を出す。42才。

10ヘクタール（10万平方メートル）の稲がだめになりました。稲は5日以上水に浸かると死んでしまいます。

このあいだの洪水では、森の精霊を祭った祠（ほこら）が壊れましてね。そういうことがあると、村びとたちの信仰心が損なわれます。

移動にも支障がでます。ストゥントレンの町まで舟で1時

ちの問題です。もし決壊でもしたら、ぼく一人だけじゃなくて、お年よりから子どもまで、村びと全員が一度に死んでしまう。ダムに近くに住んでるんですから。このことをみんなに伝えて、NGOや水資源局とも協力しながら、ベトナムに働きかけたいと思います。

ダムができることになったら、この村から引越すかつて？ いったん政府がこうすると決めたら、ぼくらは従うしかない。補償交渉ががんばるしかないですね。移転地には、道路、学校、井戸、病院など整備が必要です。農地、宅地、木、水牛や牛がのんびりと過ごせる空き地も。最近はコンセツションのせいで、（以前は放し飼いだつた）牛が、自由に歩きまわれなくなつて、村びとたちは、牛の世話にけっこうな時間を使っているんですよ。牛もひもでつながれて、不機嫌そうです。それからたいせつなのは、村びとが受けた経済的損失への補償です。この村の住民の仕事は、森林、水、漁、米など、どれも自然と深い関係のあるものばかりです。代わりになるものがないと生活することは不可能です。

農業をしています。息子が2人、娘が2人います。妻のことは尊敬してますよ。ぼくたちの愛は、セサン川の流れのように新鮮なんです。はは。もちろんヤリ滝ダムができるまえのセサン川の話ですけど。

ダムができて川はおかしくなりましたよ。水が悪くなりましたね。飲むとお腹をこわしたり、いろいろ問題が起こります。浴びると体がかゆくなるしね。牛や水牛もそうです。ぼくも漁に行つたとき、水を煮沸できなかつたのでそのまま飲んだら、あとで下痢をしました。

経済的な問題も出てきています。捕れる魚が減れば収入も減る。それに漁具が流されたり、病気になると医者や薬も必要ですから、出費が増えます。洪水で仕事ができなくなることもあります。2001年には、洪水が15日も続いて、

聞くらいなんですが、往きはふつうに行けても、帰りは水位が低すぎてにっちもさつちもいかなることがある。時間とガソリンを無駄にします。ポール・ポト時代は、ぼくの人生で一番苦しい時期でしたが、ヤリ滝ダムの問題もつらいですよ。村のみんながたいへんな思いをしますから。1979年、川に漁に行つたときのことをなつかしく思い出します。淵はすごく深かつた。手を水に入れると、魚が跳ねて、手を飛び越えました。それぐらい魚がたくさんいたんです。野豚とか鹿とか、動物が水を飲みに来る姿もよく見かけました。今は川に手を入れても、なにも起こりません。昨日は一晚中漁に行つて、とれたのは3匹だけです。

こんどできる（セサン下流2）ダムのことは、ほんとうに心配しています。わたしたちのいの

も知りたい！
カンボジアへの影響
〜セサン川の場合〜

も知りたい！
ヤリ滝ダム
P.51

も知りたい！
セサン下流2ダム
P.54

この村で、生まれ育ったよ。祖父母も親もそう。今は家族9人で暮らしてる。子どもは上が16才で、下が6才。男の子を6人産んで、やっと娘を授かったんだ。人生で一番うれしかったことだね。子だくさんだけど、夫とわたしだけでがんばって養ってるんだよ。両親はもう死んでるからね。魚と畑で生活してる。畑では米、トウモロコシ、芋、野菜を作ってるよ。自分の家で食べる分だけね。

ふだん一日、なにをしてるかって？ 朝は5時半に起きて、お湯を沸かして、子どもにご飯をつくる。お皿を洗って、家のそのうじ。毎日、娘を500メートル先の学校に送りとどけ、それから子どもに手伝ってもらって、川で水汲みをする。川の水は飲むよ。煮沸してからね。ヤリ滝ダムができてから、そのまま飲むと下痢をしたり、目が赤くなったり、皮膚の病気になったりするからね。それから、川で洗濯をして、2匹の豚、にわとり、アヒル、牛、水牛に餌をやる。田ん

ライン・ウィアン さん



1965年、セサン郡ブルップ集合村ブルップ村生まれ。クメール族。農業と漁業を営む。副村長。43才。

ぼの手入れもする。田んぼは家から500メートルくらい離れたところにあるんだ。それから、家族の分までお昼ご飯をつくって。また、食器を洗うでしょ。12時から1時間くらい昼寝しま

すよ。昼寝のあとはチャムカで働く。帰ってきたら晩ご飯をつくって、そうじして、子どもの勉強を手伝う。みんな成績は悪くないよ。それから愛しの夫といっしょに寝ます。はっはっは。

わたしは漁はしない。けど、子どものころは魚を捕まえて遊んだ。あのころは魚がたくさんいてね。浅瀬に追い込んで手で捕まえたんだ。今でもわたしの一番の財産は川の恵みだと思ってるよ。

セサン下流2ダムのことは、今年になって聞いた。まず心配に思ったのは、事故が起こるんじゃないかってこと。今は、そうだねえ、魚がいなくなるのが、一番心配。上流の人たちがダムで苦しんでいるのを知ってるからね。ただただ、もう心配だよ。

新しいダムを造るから、この村は引越せって言われてる。補償について考えなくちゃね。でも、あたしたちは川の近くに住んでいたいんだよ。村長にはそう伝えたいし、村で会合を開いて話し合って、プノンペンの政府に手紙も書いたんだけど。ほんとうにどうすればいいのかねえ。

もどいて！
セサン下流2ダム
P54



ジム・ソッキアーさん

セサン郡クパールロミーア集合村ロミーア村在住。1969年に隣村で生まれる。ブノン族。農業と漁業を営む。2006年からロミーア村の村長。39才。5児の父。

2005年から毎年ひどい洪水が起こるようになってきました。水は7日以上も引かず、水位がとて高く、この家の床すれすれまで水が上がって来ました。雨が降らないのに、水位が上がっていくのを見たこともあります。なぜだかわかりません。

川の水は、悪くなりました。ぶあつくて青い藻が水面に浮かんでいることがあります。水も濁っています。村びとが水を使うときは、川辺の砂地を掘り、そこから水を汲んで、さらに煮沸しています。川の水を直接飲むと、病気になったり、問題が起こるんですね。

魚も減りましたよ。川底にはえる藻とか、きのことか、魚の食べるものがなくなりました。藻はわたしたちも籠いっぱい集めて食べていたんですがね。今では、まったく採れません。河岸も崩れているところがあります。

村びとはみんな(セサン下流2)ダムのことを心配しています。ダムの所有者は村びとにきちんと補償を支払うべきです。十分な広さの代替地や墓なども補償にふくめるべきですよ。わたしたち少数民族には大きな土地が必要なんです。もしダムができたら、わたしもすべてを失うことになります。家も土地も野菜も、ぜんぶです。

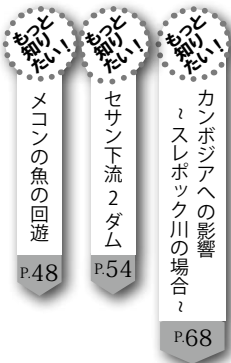
しかし、正直言つて、補償はきちんと行われないうえ、気がしてきます。例えば、代わりの家を補償すると言ってますが、この家は約20平方メートルで、補償でもらえるのは、10平方メートルの家だけです。残りの10平方メートルは現金で補償されることになっています。しかも、これは単なる口約束で、なんの証拠もありません。今、悩んでいます。どうしたらいいかわかりません。ちゃんと補償がなされるとはどういう思いえない

んです。こんど政府に要望書を出すつもりです。きちんと補償が行われ、村びとたちが納得したうえで、移転が行われるように求めなくては。

ベトナムの調査団とは話したことがあります。村を引き払う必要があることと、あと、補償内容について言いわたされました。調査団は、「資産はぜんぶ補償する」と言いましたが、わたしは信じていません。具体的に約束すべきです。それに、建設工事が始まるまえに補償をするべきです。ダム建設が先だと家や家財道具を運ぶのがたいへんだからです。

あと、ダムの水門をはじめ閉める時期は、7月か8月にしてもらいたい。なぜなら、5、6月は魚が川をのぼって産卵する時期だからです。その時期に水門が閉まっていると、魚が川を遡上できません。産卵の時期は水門を閉めてもいいですが、11月には魚が川をくだりはじめるので、再び開ける必要があります。

それだけやっても、次の年には、魚がまったくいなくなるでしょうね。魚にはダムは乗り越えられませんから。





ガン・バーン さん

1973年、セサン郡クパール口
ミーア集合村口ミーア村生まれ。
農業を営む。35歳。4児の母。

兄弟といっしょに農業をしてるわ。男は土を耕して、女は稲や野菜を育てるの。チャムカももちろんやってる。3ヘクタール(3万平方メートル)くらい土地で育てているのは、カシューナツツ、トウガラシ、なす、バナナ、きゅうり、米、さとうきび。女はそのほかに、家で豚や

にわとりに餌をやったり、ご飯をつくったりするわ。森に行つてきのこやくだものを集めるのも好き。しあわせな気持ちになれるの。女の人は、家をきれいにしたり、ご飯をついたり、子どもの世話をしたり、ものを売ったりするのに向いているんじゃないかな。男の人は森でものを集めたり、漁が得意よね。子どもを育てるのは妻と夫の共同作業よ。

ベトナムにダムができたこと、知っているわ。ひどい洪水がよく起こるようになった。水が床まで来たこともあるのよ! そのとき、家財道具も舟も失つたし、みんなお腹をこわしたりして病気になるわ。牛や水牛も溺れちゃった。そこらじゅうに水が来たから、動物が逃げられる場所がなかったの。2006年と2007年のことよ。去年の7月と8月にも洪水が起こったの。今年もあるんじゃないかと心配してる。むかしから洪水はあったけど、普通は4日くらいしたら水が引いた。今は2週間も水が残るわ。それにこの4年くらい、水位が上がったり下がったりするの。雨も降らないのに上がったり水のせいで人間も動物も病気になるし、河岸も崩れてる。わたしも川の水をそのまま飲むとお腹をこわす。魚も減つたわよ。

セサン下流2ダムのこと? もちろん知ってるわよ! 今でも洪水があるのに、ダムができたら、たいへんなことになるわ。それでもここから動きたくない。引越したら生活できなくなるわ。他の土地でどうやって生きてらいいのかわからない。ラタナキリにも親戚はいるけど、引越すことは考えられないわ。子どもときからここで育つたんだもの。この人たちは、みんなわたしの部族の人たちだし。

ダムについてはじめて聞いたのは2007年のこと。(現地で活動するNGOの)CEPA

から聞いたわ。すごく怖くなって、何もできないと思つた。「みんな貧しくなる」思つた。ああ、ダムができなければいいのに!

政府やNGOは、わたしたちがきちんとした補償をもらえるように、助けてくれるべきだわ。家だけじゃなくて、ココナツ、マンゴー、タマリンドの木も、ぜんぶよ。カンボジアでふつう、どんな補償がされてるか知ってるかって? 聞いたことないわ。ここにはテレビもないもの。

このまえベトナムから調査団が来て、「雨季はここに住んじやいけない、洪水になるから」って言ったのよ。わたしは「ダムはいやだ」って言ったの。そしたら、こう言ったのよ。「カンボジアの国全体がダムを求めている。ダムがほしくないのは、きみだけだ。反対したいならフン・セン首相に話さない。もしきみがここにとどまつて問題が起こっても、われわれは対応しませんよ」って。そんなのひどいわ! 不公平だし、正義もなんもありやしない! 誰も助けてくれないなら、ここで死ぬのを待つだけよ。村のみんなも動きたくないって言ってるわ。どうしていいかわからないの! 反対したってダムはできてしまうわ。

きつと
きつと

カンボジアへの影響
スレボック川の場合

P68

きつと
きつと

セサン下流2ダム

P54

田んぼとチャムカで食ってる。くだものや野菜は、家族の分だけ作ってる。市場で売るために、カシューナッツを育てはじめたけど、このまえの洪水でだめになった。むかしは毎日漁にも行ってたけど、今年から止めた。日に10キロは捕れてた魚が、今じゃ5、6キロしか捕れないからな。今は村の漁師から魚を買って、よその村で売ってる。

魚が減った理由？ 密漁が広まってるし、川が変わったからだろう。川は、2005年から水位が上がったり下がったりするようになった。乾季でも水が上がるときがある。延縄を朝仕掛けると、夕方には水の上に出てしまってることもある。

河岸も少しずつ崩れてきてる。川から20メートルくらいの土地が陥没したところもある。野菜を作ったり、バナナの木があるところだったんだけどな。水位が上がったり下がったりするせいで。淵も埋まってきた。漁をしてるとわかるんだ。糸の端に浮を付けて、もう一方の端に石を結んで淵に沈める。むかしは15メートルの糸がいったのに、今じゃ9メートルくらいで十分だ。川は全体的に浅くなったよ。

むかしは乾季の水が澄んでいたのに、今じゃ白っぽい。むかしは川の水をそのまま飲んでたけど、今は井戸があるからその水を使ってる。去年から子どもが川の水を飲んだり、泳いだり



1977年、セサン郡クパールロミアア集合村ロミアア村生まれ。ブノン族。農業と漁業の仲買を仕事とする。30才。

トオン・モックさん

すると、目が赤くなったり、下痢をするようになった。家畜も川の水を飲むと、腹や喉が腫れて下痢をする。それに、洪水のあとにはえた草を家畜が食べると病気になる。

ベトナムのダム開発？ 知らねえな。新しくできるダムのことは知ってるよ。ベトナムから調査団が来て、立ち退かなくちゃいけないって言ってた。

引越したくなんかねえよ。田んぼもチャムカも失うことになる。精霊のための儀式だつてここでしかできないだろ。立ち退きたくなんかねえよ。田んぼや家はどうするんだ？ どうやって家族を養うんだ？ それに、そもそもどこへ行行っていうんだ？

いつ立ち退かなくちゃいけないのか、知らん。どうしたら問題が解決できるかも、わからん。この村を代表してブノンペンで政府と話したやつがいる。でもろくな返事をもらえなかった。村長も、役人も、NGOも、みんなでダムを止め

てくれよ。

おれも両親も、この村で生まれ育った。川でも砂地でも、よく遊んだよ。かわうそといっしょに泳いだり。しあわせな子ども時代だったな。結婚は20才のとき。3年間親といっしょに住んでから、小さな小屋を建てて、こんどは2人で住んだ。金を貯めて、(屋根に使う)トタンとか買ってな。村の人たちといっしょに建てたんだよ。自分の家を建ててよかったよ。できたときは、うれしかった。

でも見てくれよ。まだ床ができてないだろ。作業を続けようと思っただけど、ダムができるって聞いてから、どうしようか迷ってる。どうなるか不安だよ。ダムは「開発」だつて言うやつがいるけど、おれはそうは思わないね。いっしょけんめい働いて建てた家が、これでおじゃんさ。おれの人生で一番うれしかったのは、むかしは貧乏だったこのおれが、こうして家を持てるようになったこと。自分で自分を「開発」したんだ。でも今はダムの話がある。不安だ。子どもは3人いる。いい教育を受けさせてやるのがおれの夢だよ。

もっと知りたい！

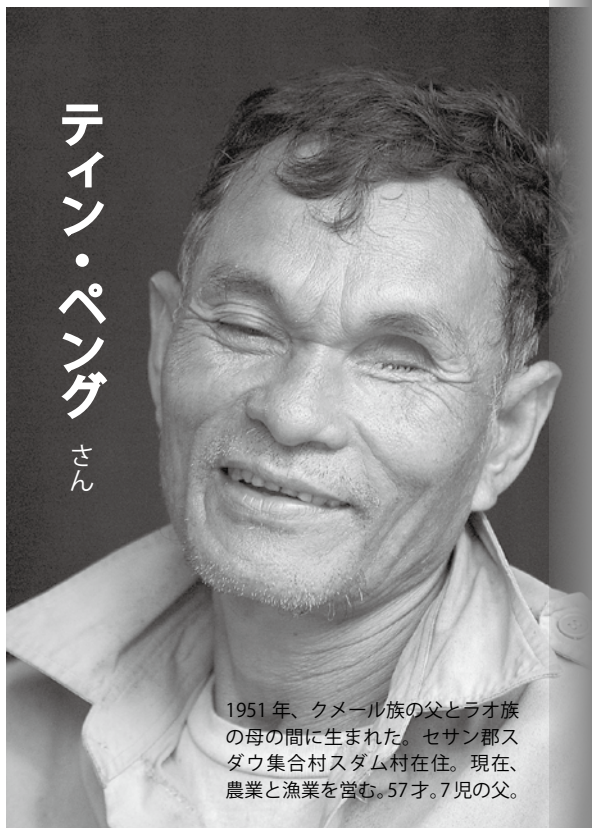
セサン下流2ダム

P.54

もっと知りたい！

カンボジアへの影響
スレポック川の場合

P.68



1951年、クメール族の父とラオ族の母の間に生まれた。セサン郡スダウ集合村スダム村在住。現在、農業と漁業を営む。57才。7児の父。

ティン・ペング さん

田んぼとチャムカをやってる。家族の食う分だけな。漁は月に1、2回しか行かぬえ。1回の漁に2、3日かけて、捕れるのは、20キロから30キロくらいだな。まあ下手な漁師じゃあねえよ。むかしは1日で50キロから100キロあげたけどな。1匹30キロ以上もあつて、胴回りは3、40センチ、体長1メートル半もあるやつが、毎日捕れた。むかしの話さ。密漁がはやりはじめてからは、そんなの捕れねえし、魚の数も減ったよ。最後にあんなでっかい魚が捕れたのは、戦争が終わった数年後、1984年から1985年ごろだった。

おれが生まれたのは1951年だ。小さな島で生まれた。子どものころは、親を手伝って水汲みをしたり、家畜の世話をしたり、畑で働いたりした。15才のとき、はじめて漁に行ったのを覚えてるよ。棒で魚を刺して捕まえた。たくさん捕れてうれしかったな。水をのぞき込むと魚がたくさん泳いでいるのが見えた。若いころは、兵士になりたかった。戦時中だったから国を守りたかったんだ。でも学校を終えてから、坊さんの修行に行った。兵士と正反対の道だった？ そりゃ信仰心があつたし、親のためよ。親に感謝するための方法のひとつなん

違法な漁をするやつらは、でかい網で根こそぎ捕るんだ。電気ショックや爆弾も使う。支流を堰き止めて魚を囲つちまったり、毒薬を使うやつもいる。毒薬で死んだ魚を人間が食べても平気かって？ 平気だよ。密漁はほんとにひどいぜ。ほとんどがよそものだ。5、6人いる。村のみんなで見回りをするようになつてから、だいぶん減つたけどな。

だ。3年修行して、十分やったなあと思つたら寺を出た。ふつうの人だつたら、漁もできるし畑もできるだろ。でも、お坊さんはお寺でお経を読む毎日なんだぜ。

27才で結婚した。遠くの村の女で、一目惚れだった。あいつの村で結婚して、義理の両親と1年間同居してから、この村に引越してきた。あいつのことは、今でも大好きだよ。そのころには、おれの親も島からこの村に移つてた。でもボル・ポト時代に別の場所に移動させられた。そこで親は死んだよ。おれも集団で農作業をさせられた。ボル・ポト時代が終わつて、おれはまたここに戻つてきた。

今のおれの楽しみは、家具を作ることかな。舟も作れるぜ。村のテレビでカラオケビデオを見るのも好きだ。音楽は好きだよ。自分は歌わないけどな。おれが子どものときとくらべて、川は変わったかつて？ 河岸の侵食がすごいよ。舟のたてる波のせいだと思う。1999年から崩れはじめて、どんどん向こう岸が離れていく。むかしは島からこつち岸まで100メートルしかなかったのが、今は200メートルはあるな。この2年は大丈夫だけど。あと、川に浮く藻が増えたな。



トン・シー さん

1945年生まれ、北サマ郡スタム
ウ集合村スタム村在住、63才

むかしは農業をしてたけど、今は家でご飯をつくってる。今年63才になったから、生まれたのは何年かなあ、計算してみて。1945年かい？ 子どものときは、その島に住んでたの。河岸から見えるあの島だよ。学校に通ったことあるよ。しあわせな子ども時代だった。

結婚したのは20才のとき。お寺で輪になって踊っているとき夫に出会ったの。結婚式は花婿の家がひろくの。結婚してしばらくは、わたしの親と住んでいた。農地や水牛を夫の親とわたしの親からもらって、チャムカと田んぼを耕して、川で漁をして、家族を養った。5日農業したら、5日漁をする毎日だった。子どもは6人いたの。でも5人病気で死んで、娘1人だけ残った。今いっしょに住んでいるよ。孫は7人いるよ。

戦争時代はいい思い出がない。村から村へと逃げまわって、いつもびくびくしてた。でも今

た。今は便利な道具があるよねえ。今の方がいいよ。むかしもマイクやスピーカーがあったら、よろこんで祭りで使ったよ。

むかしは、手漕ぎ舟だったのよ。バイクとかモーターボートなんて聞いたこともなかった。島からストウントレンの町まで一晩かかったの。今なら朝出発すれば、村に戻ってお昼ごはん食べられるけどね。若い人のなかにはストウントレンで勉強する人もいるし。先生になる人もいるのよ。

人間がむかしとくらべて変わったかって？ むかしの方がみんな親切だったよ。お金に関係なく魚やものを分け合った。今はあまったものがあれば、すぐ市場に売っちゃうよねえ。むかしは村でお金を使うことなんてなかったんだよ。なんで変わったかって？ むかしはなんでも安かったの。動物を売ったとしてももうけは少なかったの。でも今はものが高いでしょ。

は、ほんとうにしあわせなの。しあわせな、いい時代になったもんねえ。どんな仕事についてもいいし。むかしは米を作らないと死ぬしかなかったのよ。

むかしと今の文化の違い？ あんた、むかしは、マイクもスピーカーもなかったのよ！ 祭りのときは太鼓を叩いて歌ったの。電気もなくて、たいまつだった。

川の変化ねえ。むかしは舟いっぱい魚が捕れた。プラホックをたくさんつくったわ。今は魚の数が減ったわねえ。あたし自身は漁に行ったことはない。夫が行っていた。わたしは家でご飯つくって、子どもの世話してたの。

ほかに変わったこと？ ないよ。朝の川はきれいよお。風があつて、涼しくて。川を眺めるにはいい時間なの。心が洗われるよ。

川には精霊が住んでいる。竜とかワニとか、人を殺すことがあるの。川を渡るとき、舟が沈んで死んじゃうの。死体上がるのは3日後で、体が黒くなってる。竜が殺したのよ。もちろん信じてるよ。先祖が竜を見て、それが言い伝えになったの。祭りのとき、竹で竜の形の舟に食べものをのつけて、火をつけて川に流すの。これをしないと竜は人をとって食うの。

村で一番好きな場所はお寺。お坊さんの話を聞くのが好きなの。人が死んだあとどうなるかって？ 人が死ぬと3日間遺体を置いて、それから川の向こうで焼く。そういう意味じゃないの？ 死後の世界の話？ 死んだ人の魂は川の向こうに残るの。天国と地獄、あるのかねえ。わかんないよ。幽霊は川の向こう側で暮らしてるの。いい人も悪い人も、みんな。そうよ、たくさん幽霊があそこにいるの。見たかったら、そこで一晩過ごせばいいよ。怖い？



1938年、ラタナキリ州ブエンサイ郡生まれ。ラオ族。以前は、農業・漁業を営んでいた。きこりをしてきたこともある。元祭司。セサン郡スタウ集合村スダム村在住。70才。

いかにも、わしは祭司でしたよ。精霊と仏様、両方を信じて、両方に従っています。村では病気になる、精霊の仕業であると信じておりません。精霊に祈りを捧げると治るんです。

精霊にも二種類あります。ひとつは「家の霊」です。家に住んでいた人が死んで霊になったら、家の霊になります。先祖や親戚の霊です。

もうひとつは「外の霊」です。この精霊は自然のなかに住み、森や大きな木に宿っています。見ることはできません。間違ったことをしたり、精霊に出会って触れてしまうと、病気になるます。精霊に出会うのは運がないときです。崇めると、樹木が揺れたり、ものが落ちてきたり、もの音がしたりします。

それから、どの村にもひとつは強い精霊がいます。この精霊は動物に姿を変えることができ

ます。叩こうとしても、どうしても叩けない動物がいたら、それはこの霊です。この霊は村を守ってくれます。また、にわとりなど食べものを手に入れるために、村にわざわいを起こしたりします。村ではこの霊のために島に小さな祠（ほこら）を建てています。毎年この霊に祈りを捧げる儀式を行います。これを怠ると、村全体が病気になるます。

水に宿る精霊のことを、わしらは「水の精霊」と呼びます。竜は水の王です。竜にも二種類あります。ひとつは「竜神」で、もうひとつはふつうの竜です。竜神は人びとを治めていて、人間に姿を変えることができます。ふつうの竜は姿を変えられません。先祖は竜を見てわしらに伝えました。竜神はときどき川に現れて、人間の姿で水浴びをするそうです。

竜は人を殺すことがあります。

例えば、川で、みんなで遊んだり、水浴びをしていて、気がつくといつの間にか、ひとりいなくなっている。こういった場合は竜に殺されたと考えます。

川で死んだ人も、水の精霊になります。川に水浴びに行くと病気になることがあります。これは精霊の仕業です。お供えものがほしいのです。その場合、

お祈りをしなければなりません。

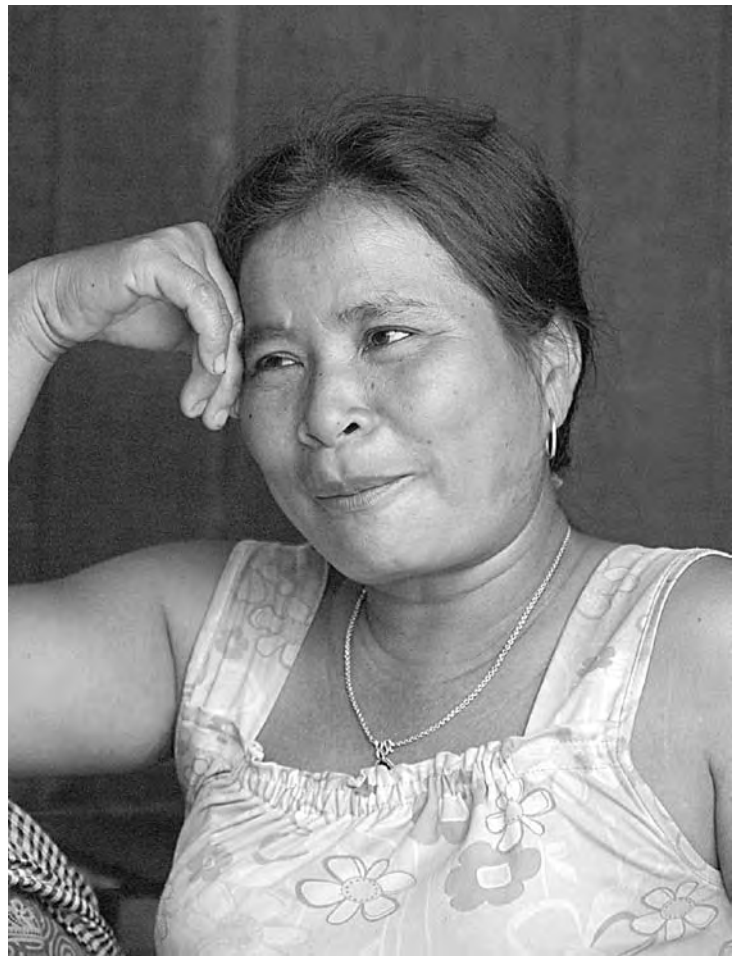
「森の精霊」も森で死んだ人たちです。と言っても、死んだ人みんなが森の精霊になるわけはありません。木から落ちたり、地雷を踏んだり、森で殺されたり、といった死に方をした人が森の霊になります。森の神は霊よりも力があります。森の神はふつうの森には住んでいません。大きな森にだけ住んでいます。村の近くには大きな森がないので、近くにはいません。

プチュンベン（カンボジアの盆）は霊の大きなお祭りです。あの世から霊が戻ってくるのです。

病気の理由が家の霊なら祈りを捧げます。外の霊なら祈とう師に儀式をしてもらいます。村には除霊ができる祈とう師が2、3人います。わしは祈とう師ではありません。祈とう師と祭司は違うものです。

祭司にも3種類あつてですね、寺の管理・運営をする祭司、結婚式をとりおこなう祭司、そして葬式を取りしきる祭司です。村には、それぞれの祭司がいます。わしは寺の管理・運営をしていました。祭りやお供えものの準備が、わしの仕事でした。

どうして祭司になったかつて？ 年よりで、正直なわしに祭司になってほしいと、村全体が会議で決めたんです。でも、23年も祭司をやつて年をとつたので、数年前に引退しました。



パート・チョービーさん

1963年生まれ。ラオ族。セサン郡
スダウ集合村スダム村在住。45才。

わたしは隣村で生まれましたが、ポール・ポト時代にここに移られました。ここで暮らす人のなかには、集団で農作業に就くようにと移住させられた人もたくさんいます。わたしは田んぼの縁に土を盛るために土を運ばされました。たいへんな時代でした。ポール・ポト時代が終わって、1979年に結婚しました。夫はこの村の出身です。

2005年、洪水に襲われて、田畑がだめになりました。チャムカはひとつが村の外、もうひとつは村のそばにあるんですが、両方ともだいなしになりました。あの年は、どうやったら子どもを食べさせて、生きのびられるのか、とても心配でしたよ。商売のやり方もわからないし、米がないとなにもできないですから。でもさいわいなことに牛を売って、主人の給料もあつたので、なんとかになりました。

むかしと今の生活の変化ですか？ むかしはたくさん魚が捕れても、市場に売ることにはなかつたですねえ。となり近所で分け合ったものですよ。でも近ごろは、魚を見つけるのがむかしよりたいへんになりました。

それから河岸が島から遠くなってきましたね。むかしは舟なしで島まで行けたんですけどね。特に雨季に河岸の近くで舟が波をたてると岸の土が崩れるんです。

田んぼとチャムカを耕して暮らしています。主人は漁に行つて、家族の分だけ魚を捕まえています。わたしは漁には行きません。米、牛、水牛を売っています。

子どもは息子が4人、娘が3人います。1人は死にました。下の子は9才、上は26才です。息子は2人、もう独立しました。1人はストウントレンの高校に通つてます。いい職に就けるように勉強してほしいと思っています。

村での女の仕事は、家畜の世話、酒作り、農

作業です。男は農作業と漁業が仕事です。子どもを育てるのも母親の仕事です。ものを売るとも女の仕事ですね。女の方がひとのことを理解したり、ものを買う気にさせるのがうまいから。わたしも得意な方です。おもに米と、たまに主人が捕つて、あまつた魚を売っています。うちが米をたくさん作っていることは、村でみんな知ってるので、商人が村に米の買い付けに来ると、みんなわたしの家に来るように言ってくれるんですよ。

第3部

もつと知るための9章

もつと
知りたい!

カンボジアの地勢

カンボジア王国

カンボジア王国は、東南アジアのインドシナ半島東部に位置する。熱帯モンスーン気候に属し、雨季（5月～10月）と乾季（11月～4月）の区別が明確である。国土面積は日本の約18万平方キロ）で、国境をベトナム、タイ、ラオスと接す

る。国土のほぼ中央をメコン河が貫流する。首都はプノンペーン。通貨単位はリエル（2008年8月現在、1ドル＝約4200リエル、1円＝約38リエル）。人口約1400万人の90%以上がクメール民族で、公用語はクメール語、宗教は仏教。国民の主食は米で、稲作農業および漁業が盛ん。政体は立憲君主制。議会は国民議会（下院）と上院からなる二院制である。国民議会議員は比例代表制による直接選挙で、上院議員は制限選挙（一部は任命制）で選出される。

2008年現在、国家元首は、ノロドム・シハモニ国王。首相は、サムデク・フン・セン人民党副党首（サムデク）は尊称。

行政区分は、20の州と4つの特別市から成り、地方行政では、州（市）をさらに、郡（区）と集合村（サンカット）に区分する（「区」や「サンカット」は、プノンペンなどの市街地に適用される）。集合村の下に「村」という単位もあるが、これには憲法上の設置根拠がない。州と郡には、中央政府が州知事と郡長を任命し、各省庁の出先機関である局が設けられている。集合村には、選挙によって選出された議員で構成する集合村評議会が設置されている。

カンボジアは激動の現代史を体験した。

1953年、フランスの植民地から独立。その後、アメリカ合衆国が支えたロン・ノル將軍によるクーデターを契機に内戦が勃発（1970年）。1975年、中国の支援で力を得た共產主義勢力クメール・ルージュがプノンペンに入城して内戦は終結するが、以降1979年に至るまで、ポル・ポトによる恐怖政治の下で約170万人が死亡したとされる。ベトナム軍の侵攻によりポル・ポト政権は瓦解するが、国土は再度の内戦状態に。1991年、パリ和平協定によってようやく内戦が終結。1993年、国連カンボジア暫定機構（UNTAC）による総選挙を経て、9月に発布された新憲法の下で「カンボジア王国」が誕生した。その後は国内も安定化し、1998年、2003年、2008年と国民議会総選挙を実施。1999年には、東南アジア諸国連合（ASEAN）にも加盟した。

2005年の国内総生産（GDP）は、約62億9000万ドル。日本は、2006年までの累計で有償資金協力約160億円および無償資金協力約1156億円を、また2005年までの累計で技術協力約392億円を提供している、「最大の援助供与国」である（外務省、2008a）。

カンボジア北東部

カンボジア北東部は、ラタナキリ州、ストウン

トレン州、モンドルキリ州からなる。この地域には古くから、民族ごとに異なった生活様式・言語・文化を持つ先住・少数民族が多数居住する。1998年の国民統計によると、カンボジアの先住・少数民族人口約10万1000人の大部分が、ラタナキリ州（約6万4000人）とモンドルキリ州（約1万9200人）に集中している。人口の多い順に、タムプアン族、プノン族、ジャライ族、クルン族、ブロー族、カチョー族、カベット族などの民族が暮らしている（SWECO Graner, 2006a）。

首都プノンペンからラタナキリ州の州都バンロンまで車で約12時間（雨季では、約15時間）、ストウントレン州の州都ストウントレンまでは約8時間、モンドルキリ州の州都センモノロムまでは約9時間（雨季では、約12時間）かかる。

カンボジア北東部は、自然資源の豊富さと生物多様性でも知られている。ラタナキリ州とモンドルキリ州には、国内天然林の約4割が存在する。また、国際河川であるセサン川、スレポック川、セコン川が両州を流れている。こうした自然資源（森林と林産物、河川と漁業資源）の持続的な利用は、環境保全の視点からのみならず、特に自然資源に依存した生活を送る地域住民の食糧安全保障や生計を守るという意味で、非常に重要である。さらに地域住民の多くが、自然との共存を生活や文化の基盤に置く先住・少数民族である点に留意しておく必要もある。しかし近年は、内外の投資家による森林伐採などの

環境破壊が顕著になってきている。また、セサン川とスレポック川では、上流ベトナム側でダム開発が進み、下流に位置するこの地域に甚大な被害をおよぼしている。セコン川上流のラオス側でもダム建設は始まっており、近い将来に影響が顕在化する恐れがある。

セサン川、スレポック川、セコン川

セサン・スレポック・セコン川は、ベトナムやラオスから国境を越えてカンボジア北東部に流れ込む河川であると同時に、メコン河流域最大の支流水系を成す。三河川の総流量は、メコン河流域の年間総流量の実に19%を占めるといわれる（Halcrow and Partners, 1999）。セサン・スレポック・セコン川流域は生物多様性でも名高く、絶滅危惧種が多数確認されている。また、メコン河下流域の魚の回遊にとって非常に重要な生態系の一部でもある。さらに、流域には100以上にのぼる先住・少数民族コミュニティが存在し、川の資源に依存した生活を営んでいる。

セサン川は、ベトナム中部高原のジャライ省とコンツム省に源を発する。川は、この山岳地帯から西南に流れ、カンボジア北東部のラタナキリ州オー

ヤダウ郡、アンドンミア郡、タバベン郡、プエンサイ郡を順に過ぎ、ストウントレン州でメコン河本流に合流する。川の総延長は、約462キロ。そのうち210キロがベトナム領内を流れる。流域総面積は、約1万8570平方キロ。そのうち約60%がベトナム側、残りの約40%がカンボジア側に位置する (SWECO Grøner, 2006b)。カンボジア領内の川沿いでは、75か村に約3万人 (ラタナキリ州の60か村に約2万人、ストウントレン州の15か村に約1万人) が暮らしている (SPN, in progress)。

スレポック川は、ベトナム中部高原のダクラク省に源を発し、カンボジア北東部のモンドルキリ州ラタナキリ州、ストウントレン州を貫流する。流域総面積は、約3万平方キロ。うち1万8200平方キロはベトナム領内にある。スレポック川は、メコン河本流に流れ込むまえに、まずセサン川と合流するが、この合流地点まではベトナム国境から245キロある (SWECO Grøner, 2006a)。カンボジア側のスレポック川沿いには、21か村に約1万1000人の人びとが暮らしている (TERRA, 2006)。

セコン川は、ラオス南部のアンナン山脈からカンボジア北東部ストウントレン州に流れ込む。スレポック川と同様、セサン川と合流して後にメコン河本流に合流する。ストウントレン州のセコン川沿いには31か村、2万8400人の人びとが暮らしている (SPN, in progress)。



スレポック川のほとりで葡萄 (たけのこ) の皮をむく漁民。

もっと知りたい!

メコンの魚の回遊

メコン河の魚は「回遊」している。ダムは魚の回遊を直接さまざまに、水の流れを変えることでその生態にも悪影響をおよぼす。メコン河の生態系を理解するには、回遊の問題は避けて通れない。

そこで以下では、メコン河委員会 (Mekong River Commission = MRC) や研究者が実施した調査 (Poulsen, et al. 2002, Baird, 2005) をもとに、メコン河の魚の回遊についてまとめた。

「回遊」とは

「回遊」は、「魚類がその生活史の決まった時期に、ある生息域から別の場所に移動し、その後再び元の生息域に戻ってくること」、または「同種の生物の多くの個体が、予測可能な移動を周期的にすること」などと定義されている。回遊は、河川の魚の多くに見られる特徴である。卵から孵った稚魚が受動的に下流に流されるのも回遊の一種である。この場合、流される場所は、稚魚が育つのに適した環境でなくてはならない。したがって

回遊は、移動の道筋だけでなく、移動先の生息地や水環境とあわせて考える必要がある。

回遊と生息地

メコン河の回遊を知るうえで、氾濫原、乾季の乾燥を避ける水環境、産卵地の3つがとりわけ重要である。氾濫原は、雨季のみに現れる季節的な一時水域で、カンボジアのトンレサップ湖の周辺からベトナムにかけてのメコン河本流一帯や、タイやラオスのメコン河支流域が好例である。東北タイのソククラム川やマン川支流のチー川流域にも氾濫原が広がっている。雨季のはじめの増水は、産卵と回遊の引き金であり、稚魚によっては、氾濫原に注ぎ込む水に乗って移動し、そこで成長するとみられている。乾季になると魚は、氾濫原から乾季でも涸れない湖や沼、河川に戻っていく。特にメコン河本流では、「deep pool」と呼ばれる「淵」に多種の魚が集まる。淵は、ラオス南部コーンの瀑布群からカンボジア北部クラチエ州などに存在

する。産卵地や産卵そのものについては、未知の部分が多い。地域住民の知見などから、メコン河の魚は本支流の早瀬や淵と氾濫原で産卵すると推定されているが、種類によって場所は異なる。

回遊のシステム

中国南西部を除くメコン河での回遊は、下流部回遊システム (LMS)、中流部回遊システム (MMS)、上流部回遊システム (UMS) の3つに分けることができる。

セサン・スレポック・セコン川と回遊

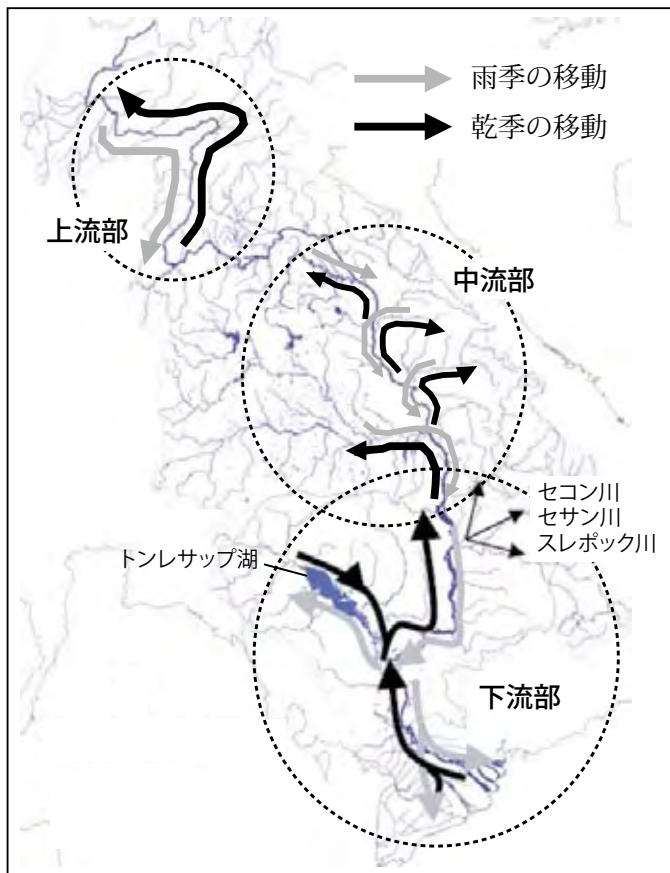
表1にあるように、セサン・スレポック・セコン川は、LMSの一部をなす。LMSは世界的にも魚種がもっとも多く、漁業資源の生産性が高い地域のひとつである。乾季の水位低下にしたがつて、トンレサップ湖からメコン河本流へ、さらに上流にある支流部分へと回遊する魚がいる。これらの魚たちは、水位が低い時期はカンボジア・クラチエ州やストウントレン州の本流で過ごし、水位が上昇すると、セサン・スレポック・セコン川へと移動する。移動先で卵を産んだ後、今度はそこ

表1 メコン河での回遊システム

システム	範囲	時期と移動方向	特徴
下流部 (LMS)	<ul style="list-style-type: none"> コーンの瀑布群から下流、メコン・デルタ、メコン河口まで。 トンレサップ湖とメコン河本流 セサン川、スレポック川、セコン川 	<ul style="list-style-type: none"> 乾季に下流から上流に向かい、雨季に戻る。 乾季にトンレサップ湖を出て本流に向かい、雨季に戻る。 乾季にセサン川、スレポック川、セコン川流域に向かう。 	<ul style="list-style-type: none"> 氾濫原やその周辺で産卵する魚種がある。
中流部 (MMS)	<ul style="list-style-type: none"> コーンの瀑布群から上流、タイ・ルーイ川河口付近まで。 	<ul style="list-style-type: none"> 雨季に氾濫原に向かう魚種が、ムン川、ソクラーム川、セバンファイ川、ヒンブン川など主要な支流に入り、乾季に本流に戻る。 	<ul style="list-style-type: none"> LMS と MMS は断絶した環境ではなく、相互を行き来する魚や、成長の段階によって相互を移動する魚がいる。
上流部 (UMS)	<ul style="list-style-type: none"> ルーイ川河口より上流、ラオス・中国国境まで。 	<ul style="list-style-type: none"> 雨季に本流上流に向かい、乾季に下流に戻る。 	<ul style="list-style-type: none"> UMS には大きな氾濫原はない。 LMS や MMS から比較的断絶している (LMS や MMS より標高が高い)。

Poulsen, et al. (2002) をもとに作成。

地図2 メコン河での回遊システム (略図)



より下流に位置する支流などに移り、最終的にはトンレサップ湖に戻っていく。セサン・スレポック・セコン川でのダム開発は、魚の回遊を阻害するばかりか、洲などの生息地を破壊する。その結果、三河川流域の漁業資源の減少のみならず、メコン河全体の生態系に被害がおよぶと考えられる。

Poulsen, et al. (2002: 33, 36, 39) をもとに作成。



三河川のダム開発

セサン川

セサン川における水力発電の潜在能力は、フランスが一代を植民地化していた時代から

注目されていた。例えば、ヤリ滝ダムの建設計画は1929年にまでさかのぼる (Wyatt & Baird, 2007)。しかし、当時は経済的な問題などで実現に至らなかった。1957年に活動を開始したメコン委員会は、1970年代になってセサン川に16か所のダム(カンボジアに5か所、ベトナムに10か所、両国国境に1か所)を計画した(堀、1996)。しかし、これらの計画もまた実施には至らなかった。

1990年代、ベトナムは慢性的な電力不足に悩まされていた。電力不足が経済発展を阻害することから、発電能力の増強はベトナムにとって国をあげての優先課題となった。この動きの中で、EVN(旧ベトナム電力公社、現ベトナム電力グループ)がこの課題を解決する役割を担うことになる。同時に、多くの援助国・機関が、ベトナムの発電能力の増強に資金を提供した。中でも当時のソビエト連邦からの経済援助は多額で、1993年、ベトナムはヤリ滝ダム(囲み1)の建設に着手する。ヤリ滝ダムは、セサン川流域ではじめての水力発電ダムであった。

ソビエト連邦が瓦解し、ベトナムが開放経済政策を取るようになってから、発電能力増強の資金源は、世界銀行(World Bank)やアジア開発銀行(Asian Development Bank = ADB)といった国際金融機関に移っていった。ADB、スウェーデン国際開発局(Swedish International Development Agency = SIDA)、そしてEVN自身が何件かの調査を実施し、ベトナム領内のセサン川上流域でのダム建設予定地は6か所にまで絞り込まれた。同時に、カンボジア側のセサン下流域でも5か所でダム建設が提案された。さらに、1999年からは、ベトナム国家水力発電計画に関する調査も行われている。この調査の目的は、水力発電事業に優先順位をつけること(UNEP, 2008)、SIDAおよびノルウェー開発協力庁(Norwegian Agency for Development Cooperation = NORAD)が調査資金を提供した。調査の範囲には、セサン・スレポック両河川流域のダム案件もふくまれている。

現在、ベトナム側では3か所のダム(ヤリ滝、セサン3、セサン3A)が操業中、2か所のダム(ブレイクロン、セサン4)が建設中である。これらのダムの建設にあたっては、環境影響評価(EIA)が実施されておらず、実施されている場合も内容は不十分である。総じて、事業の計画・実施において、影響を受ける現地住民の基本的な権利、ニーズ、そして懸念に対してほとんど配慮

「これ以上、なにをするつもりなんですか？
ほとんどすべてのものが破壊されてしまいました。
もう1か所ダムができれば、破壊も広がるでしょう。
もっと多くの方が死んでしまいます。」

ロチャム・トゥワントさん、セサン川沿いオッコブ村 2002年

囲み 1



ヤリ滝ダム

「ヤリ滝ダムにかかった費用は
10 億ドルかもしれませんが、
(失われた)カンボジア人の
生命と生活は、
10 億ドルごときで
すむものではありません。」

ある村びと、セサン川沿いブルーク村 2003 年

ヤリ滝ダムは、メコン河下流域に建設された最初の、そして最大のダムである。設備容量は 720 メガワット (MW) で、ベトナム中部高原に位置する。壁の高さが 70 メートルにおよぶこのダムは、常時満水位 (FOL) に面積が 65 平方キロにおよぶ貯水池を有する。1993 年 11 月に建設を開始し、1998 年に貯水が行われた。操業が正式に始まったのは、2002 年 1 月であった (SWECO Grøner, 2006b)。発電後の電気はベトナム南部のホーチミン市を中心とした工業地帯に供給される (Hirsch & Wyatt, 2004)。

ヤリ滝ダムの建設費用は概算で 10 億ドル。建設工事は EVN が請け負った。ベトナム政府は、ロシア・ウクライナ両政府から融資と機材提供を受けて建設資金を調達。スウェーデン、スイス、ノルウェー各政府も技術支援や小規模な資金を提供した。例えば、スウェーデン企業 Skanska にトンネル建設の研修費として約 320 万ドルを提供したのは、スウェーデンの援助機関 SIDA である。また、スイス政府も、1992 年にスイス企業 Electrowatt Engineering (現在は、フィンランドのコンサルタント会社 Jakko Poyry が所有) が実施した EIA に、100 万ドルを超える資金を提供した。世界銀行は、はじめ貯水池建設がもたらす住民移転を懸念し、直接的な経済支援を断った。ところが最終的に、送配電施設に 5 億 7500 万ドルを融資し、その一環としてホーチミン市に達する 500 キロボルト (KV) の送電線建設に合意した (3SPN, 2005)。

ダムの建設と運転操業でセサン川下流の水文、水質、漁業、水生生物に被害が発生することは予測可能だった。にもかかわらず、下流に位置するカンボジアへの社会環境影響はまったく検討されなかった。カンボジア側の住民にはダム建設の通告すらなかった。

ヤリ滝ダムがカンボジアにもたらした被害は 1996 年後半から顕在化した。さらに、全 4 基のタービンのうち、2 基の運転が始まった 2000 年 5 月までに、カンボジア・ラタナキリ州とストウントレン州で大規模な環境・社会・経済上の悪影響が発生していた。今日に至るまでも被害への緩和策は不十分で、下流カンボジアの住民に対する補償はいっさい行われていない。

していない。

カンボジア側の水力発電計画は、カンボジア政府の技術および経済的な理由から、これまで実現しなかった (Wyatt & Bard, 2007)。しかし、カンボジア政府は水力発電の推進を国家政策として掲げており、現在、日本の国際協力機構 (Japan International Cooperation Agency = JICA) が水力開発マスタープラン調査の実施を支援している。2007 年 6 月から始まったこの調査の目

的は、セサン川をふくむカンボジアの主要河川における既存の水力発電事業計画に優先順位をつけることで、調査を実施しているのは日本企業の本工営である (国際協力機構, 2008)。さらに、カンボジア・ベトナム両政府の合意の下、ベトナム政府主導によるカンボジア側のダム開発計画も進行している。ベトナムは数多くの調査を行った結果、2006 年後半になって 5 か所のダム事業をカンボジア政府に対して提案し

た。これらの事業とは、両国国境のセサン下流 1 ダム、ストウントレン州のセサン下流 2 ダム、ラタナキリ州のセサン下流 3 ダム、プレクレアン 1 ダム、プレクレアン 2 ダムである (Sam & Barton, 2006)。このうち、セサン下流 1 およびセサン下流 2 ダムについては、実施可能性調査が行われている (囲み 2)。

表 2 と地図 1 (19 ページ) にセサン川流域ダム事業の詳細をまとめた。

表2 セサン川流域ダム事業

事業名	設備容量 (MW)	進行状況	実施主体 (国)	詳細
ベトナム領内				
ヤリ滝 Yali Falls	720	<p>操業中</p> <ul style="list-style-type: none"> ダム建設：1993年～2001年 タービン運転：2000年～ 正式操業：2002年～ 	EVN (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用は約10億ドル。 カンボジア国境から70～80キロのベトナム中部高原に位置する。 EIAはスイス政府の支援により、スイス企業 Electrowatt Engineering が1992年に実施。下流カンボジアへの越境影響はまったく検討されなかった。 建設資金は、ロシア・ウクライナ両政府からの融資と機材提供によって調達された。スウェーデン、スイス、ノルウェー各政府からも、技術支援や小規模な資金の提供を受けた。 世界銀行が送電線整備に5億7500万ドルを融資。
セサン3 Sesan 3	260	<p>操業中</p> <ul style="list-style-type: none"> ダム建設：2002年～2005年 タービン運転：2006年～ 	EVN (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用は約2億5100万ドル。 プレイクー市から40キロ、ヤリ滝ダムから約15キロ下流のジャライ省に位置する。 ロシア政府が建設資金として計1億ドルを提供。 1999年、ADBが技術支援（贈与）を決定。この支援で作成されたEIA報告書案は下流への深刻な影響に言及し、カンボジアの影響住民への補償を提案。ベトナム政府はこの報告書案を受け入れず、ADBによる建設への融資も辞退。 ノルウェー企業 Statkraft Engineering、スウェーデン企業 SWECO が実施可能性調査報告書を作成。
セサン3A Sesan 3A	96	<p>操業中</p> <ul style="list-style-type: none"> ダム建設：2003年～2007年 タービン運転：2006年～ 	EVN (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用は約1億1700万ドル（推定）。 セサン3ダムから約10キロ下流のジャライ省に位置する。 建設資金はロシア政府からの援助およびベトナム国内で調達。
プレイクロン Pleikrong	100	<p>建設中</p> <ul style="list-style-type: none"> ダム建設：2003年～（2008年完成予定） 	EVN (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用は約2億5600万ドル（推定）。 コンツム市から20キロ西、ヤリ滝ダムの上流、コンツム省に位置する。 建設資金の大部分はベトナム国内で調達され、ロシア政府も一部を支援。
セサン4 Sesan 4	360	<p>建設中</p> <ul style="list-style-type: none"> ダム建設：2005年～（2010年完成予定） 	EVN (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用は約3億4350万ドル（推定）。 カンボジア国境から6キロ、セサン3Aから約22キロ下流に位置する。 実施可能性調査はEVNによって2005年8月に終了。 建設資金は、ベトナム貿易銀行（VIETCOMBANK）、ベトナム投資開発銀行（Bank for Investment and Development of Vietnam = BIDV）、ベトナム工商銀行（Bank for Industry and Commerce）、ベトナム農業農村開発銀行（Bank for Agriculture and Rural Development）から調達。
セサン4A調整池 Sesan 4A Reservoir	—	<p>建設中</p> <ul style="list-style-type: none"> ダム建設：2004年～（2008年完成予定） 	EVN (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> セサン4ダムから5キロ下流、カンボジア国境から約1キロに位置する。

事業名	設備容量 (MW)	進行状況	実施主体 (国)	詳細
ベトナム領内 (続き)				
上流 コンツム Upper Kon Tum	260	計画 (確約済み)	EVN (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用は約 2 億 7600 万ドル (推定)。
カンボジア領内				
セサン 下流 2 Lower Sesan 2	480	実施可能性調査 <ul style="list-style-type: none"> 調査：2008 年～ ダム建設 (予定)：2009 年～ 操業 (予定)：2014 年～ 	EVN カンボジア合弁会社 (カンボジア、ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用はセサン下流 1 と合計で約 6 億ドル (推定)。 ストウントレン州セサン郡、スレポック川との合流地点の約 1.5 キロ下流に位置する。 2006 年後半にベトナム政府がカンボジア政府に提案した 5 か所のダム事業のひとつ。 JICA 水力開発マスタープランの調査対象案件。 実施可能性調査は EVN による。 資金調達・建設・操業は、EVN カンボジア合弁会社と 2 つの子会社が行う。 セサン・スレポック両河川流域で 381 平方キロの土地が水没、約 1100 世帯 (5000 人) を移転。 電力の大半はベトナムに輸出、残りをカンボジア国内で利用する予定。 1999 年、ADB がセサン下流 2、スレポック下流 2 という 2 か所の事業として実施可能性調査の事前調査を完了。のちにひとつのダムに統合。
セサン 下流 1 Lower Sesan 1	90	実施可能性調査 <ul style="list-style-type: none"> 調査：2008 年～ 	EVN カンボジア合弁会社 (カンボジア、ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用はセサン下流 1 と合計で約 6 億ドル (推定)。 ラタナキリ州のベトナム国境付近、セサン川のさらに支流に位置する。 2006 年後半にベトナム政府がカンボジア政府に提案した 5 か所のダム事業のひとつ。 電力の大半はベトナムに輸出、残りをカンボジア国内で利用する予定。
セサン 下流 3 Lower Sesan 3	375 または 180	計画	—	<ul style="list-style-type: none"> ラタナキリ州タベン郡またはブエンサイ郡に位置する。 2006 年後半にベトナム政府がカンボジア政府に提案した 5 か所のダム事業のひとつ。
プレク リアン 1A Prek Liang 1A	23	計画	—	<ul style="list-style-type: none"> ラタナキリ州タベン郡ピラチェイ国立公園内、セサン川のさらに支流に位置する。 JICA 水力開発マスタープランの調査対象案件。
プレク リアン 1 Prek Liang 1	51	計画	—	<ul style="list-style-type: none"> ラタナキリ州タベン郡ピラチェイ国立公園内、セサン川のさらに支流に位置する。 2006 年後半にベトナム政府がカンボジア政府に提案した 5 か所のダム事業にふくまれる。 JICA 水力開発マスタープランの調査対象案件。
プレク リアン 2 Prek Liang 2	48	計画	—	

Trandem (2008a)、SWECO Grøner (2006b) をもとに作成。

囲み 2



セサン下流 2 ダム

「川（の環境）はすでに破壊されている。カンボジアの人びとにも、ダム開発の恩恵を少しは受ける権利がある。」

カンボジア政府職員（Chandara & Quinn, 2007）

2007年6月、カンボジア・ベトナム両政府間で、EVNがセサン下流2ダムの実施可能性調査を行うとの合意がなされた（VNS, 2007a）。セサン下流1ダムとあわせた建設費用などの総額は6億ドル。発電した電気はカンボジア国内で消費するほか、ベトナムにも輸出される（VNS, 2008）。事業実施主体はEVNカンボジア合弁会社であるが、資本調達を目的に、さらに2つの企業がカンボジア内に設立される。これらの企業は、セサン下流2ダム、セサン下流1ダムの2か所のダムの建設・管理・操業を担い、将来的にはカンボジア国内で、発電、商業、森林、採掘などの分野にも進出するという（VNS, 2007b）。

2008年5月、セサン下流2ダム計画のEIAをめぐる公聴会が、カンボジア・ストウントレン州で開催された。ところが公聴会での事業説明はおもに地元当局に向けたもので、影響住民は参加すら許されなかった。参加したNGOによると（Tek, 2008）、EIA報告書は公開されず、英文の説明資料が公聴会当日に配布されたのみであった。公聴会の席では、EIA報告書案は既にカンボジア環境省、水資源気象省、およびカンボジア国内メコン委員会に提出されており、承認されれば2009年初頭には事業を始めるとの説明だった。操業開始は2014年を予定、電力の大半をベトナムに輸出し、残りはカンボジアの国内で利用するとのことだった。

公聴会での配布資料（PECC-1 & KCC, 2008）によると、セサン下流2ダムは、高さ83メートル、幅8メートル、長さ8メートルである。発電容量は480MWで、常時満水位（FOL）75メートル、最低運転水位74メートル。貯水池は面積380平方キロにもおよぶ。また、2007年6月、EVNカンボジアがカンボジア政府鉱工業電力省と交わした覚書に基づき、ダムとストウントレン市街地を結ぶ送電線が敷設されるほか、ラタナキリ州都バンルンには変電所が、さらにダムからバンルンおよびセサン下流1ダムを通して、ベトナムのセサン4ダムに達する送電線も建設される。

ダムが建設されることになれば、セサン川沿いの住民がさらに辛苦をなめることになる。また、4か村が完全に水没し、さらに4か村で村の一部が水没する。約1100世帯（5000人）の人びとが移転を余儀なくされるため、さまざまな補償や影響緩和策が提案されている（PECC-1 & KCC, 2008）が、カンボジアでは住民移転や補償に関する法制度が確立しておらず、全国各地で紛争や人権侵害が頻発している。補償が不十分だった、あるいはまったくもらえなかったために、住民が移転後に貧困化する事例があるとを絶たない（杉田, 2005、福田, 2008）。セサン下流2ダムでも、実際に適正かつ有効な対策がとられるかはおおいに疑問である。

スレポック川

現在、ベトナム領内のスレポック川流域では1か所のダムが操業中（ドライホリン・ニュー）で、4か所のダムが建設中（ブオンクオップ、ブオントウアスラ、スレポック3、スレポック4）である。これらのダムの建設主体はEVNで、資金はベトナム国内でほぼすべて調達している。その一方で、ベラルーシやロシアからの経済支援、オランダのABN-AMRO銀行などの海外商業銀行からの

の融資も建設資金となっている。ブオンクオップダムでは、日本の住友商事も機器調達の契約を受注している。

スレポック川のダムは、セサン川の場合と同様、国境を越えた悪影響を検討しないうまま建設が始まっている。ダムによって被害を受ける下流カンボジアの人びとの基本的人権、ニーズ、懸念は、事業の計画・実施の段階でほとんど顧みられていない。この結果、セサン川沿いの住民が体験したのと同様の問題が、スレポック川でも起こり始めている。

前述の通り、1999年から始まったベトナム国家水力発電計画の調査には、セサン川流域に加えてスレポック川流域のダム案件もふくまれている。また、カンボジア国内の動きを見ると、2008年、中国企業が、スレポック下流3ダムおよび下流4ダムの実施可能性調査を行うためにカンボジア政府と覚書を結んだ。

表3と地図1（19ページ）に、スレポック川流域ダム事業の詳細をまとめた。

表3 スレポック川流域ダム事業

事業名	設備容量 (MW)	進行状況	実施主体 (国)	詳細
ベトナム領内				
ドライホリン・ オールド Dray H'Linh Old	—	操業中止 ・ 1990 年完成	EVN (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> ・ ブオンマトウオット市から約 15 キロ西、ダクラク省に位置する。「ブオンマトウオット」(Buon Ma Thuot) は、現地エデ語での呼称で、ラオス語の「バンメトート」(Ban Me Thuot)が使われることもある。
ドライホリン・ ニュー Dray H'Linh New	16	操業中	EVN (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> ・ ブオンマトウオット市から約 15 キロ西、ダクラク省に位置する。 ・ 2008 年 4 月、操業が始まっているとの報道があった。
ブオンクオップ Boun Kuop	280	建設中 ・ ダム建設： 2003 年～ (2008 年完成予定) ・ 操業 (予定)： 2008 年～	EVN (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事業費用は約 2 億 9000 万ドル (推定)。 ・ ブオンマトウオット市から約 30 キロ東西、ダクラク省に位置する。 ・ 資金の大部分はベトナム国内で調達。残りをベラルーシ、ロシア、ABN-AMRO から調達した。建設契約の主な受注者には、ベトナム建設輸出入株式会社 (VINACONEX)、カビコ公司 (CAVICO Corporation) があり、住友商事も発電機を調達。
ブオントゥアスラ Buon Tua Srah	86	建設中 ・ ダム建設： 2004 年～ (2008 年完成予定)	EVN (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> ・ ブオンマトウオット市から約 45 キロ南、ダクラク省に位置する。
スレポック 3 Srepok 3	220	建設中 ・ ダム建設： 2007 年～ ・ 操業 (予定)： 2010 年～	EVN (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事業費用は約 3 億 350 万ドル (推定)。 ・ ベトナム貿易銀行、ベトナム工商銀行、ベトナム農業農村開発銀行が融資。中国技術進出口総公司 (China National Technical Export and Import Corporation=CNTIC) が機器を調達。
スレポック 4 Srepok 4	80	建設中 ・ ダム建設： 2008 年～ (2008 年完成予定)	EVN (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事業費用は約 174 兆ベトナムドン (約 11 億円、推定)。 ・ ベトナム貿易銀行、ベトナム工商銀行、ベトナム農業農村開発銀行、Viet A Commercial Joint Stock Bank、Rubber Finance Company が融資。Dai Hai Power Investment and Development Joint Stock Company が建設契約を受注。 ・ スレポック 3 ダムからの放水を調整する機能を果たすとされる。
ドックスエン本流 Duc Xuyen Main	70	実施可能性調査 ・ 建設完成 (予定)： 2010 年	EVN (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> ・ ダクラク省およびラムドン省、スレポック川の連続ダムの最上流に位置する。
カンボジア領内				
スレポック下流 2 Lower Srepok 2	222	セサン下流 2 と統合。	—	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事業費用は約 3 億 5300 万ドル (推定)。 ・ ストゥントレン州に位置する。 ・ 1999 年、ADB が実施可能性調査の事前調査を完了。
スレポック下流 3 Lower Srepok 3	300	不明 (実施可能性調査が行われている可能性あり)	不明	<ul style="list-style-type: none"> ・ ラタナキリ州に位置する。 ・ 2008 年 6 月、中国・広西桂冠電力股份有限公司 (Guangxi Guiguan Electric Power) と鉦工業電力省が、実施可能性調査に関する覚書を交わした。覚書の日付から 90 日以内に調査が始まることになっている。
スレポック下流 4 Lower Srepok 4	100			

Trandem (2008a)、SWECO Grøner (2006a) をもとに作成。

セコン川流域

ラオス領であるセコン川上流域では、現在、1か所のダムが操業中（ホアイホ）、1か所のダムが建設中（セカマン3）、少なくとも12か所のダム計画（セカマン1、セカマン4、セコン3、セコン4、セコン5、ナムコン1、ナムコン2、ナムコン3、ダクエムル、ホアイラムパンヤイ、セピエン・セナムノイ、セカタム）が進行中である。建設資金の大部分は、ベトナム企業など海外資本によってまかなわれ、電力の大半はベトナムやタイに輸出される。以下、表4と地図1（19ページ）に、カンボジア領内もふくめたセコン川流域におけるダム事業の詳細をまとめた。

表4 セコン川流域ダム事業

事業名	設備容量 (MW)	進行状況	実施主体 (国)〈所有率〉	詳細
ラオス領内				
ホアイホ Houay Ho	150	操業中 ・ 操業： 1999年～	ラオス電力会社 (ラオス)〈20%〉、 Suez Energy (ベルギー)〈60%〉、 HHTC (タイ)〈20%〉	<ul style="list-style-type: none"> ・ チャムパサック県とアタプー県のセコン川支流に位置する。 ・ 建設は、Daewoo (韓国)と Loxely (タイ)による。2002年に Tractebel に売却された。 ・ 電力はタイへ輸出されている。 ・ 環境への悪影響と深刻な移転問題で物議をかもした。
セカマン3 Xekaman 3	250	建設中 ・ ダム建設： 2006年～ ・ 操業(予定)： 2010年～	ベトナム・ラオス電力投資開発株式会社 (ベトナム)〈85%〉、 ラオス電力会社 (ラオス)〈15%〉	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事業費用は約2億7300万ドル (推定)。 ・ セコン県のセコン川支流セカマン川に位置する。 ・ EIA 報告書は存在するが、公開されていない。 ・ 建設は、ベトナム企業 Song Da Corporation による。 ・ ベトナム貿易銀行と BIDV が6600万ドルを融資。 ・ ベトナム・ラオス電力投資開発株式会社の株主構成は、Song Da Corporation (49%)、Vietnam National Oil and Gas Group (PETROVIETNAM)、BIDV、PETROVIETNAM Joint Stock Finance Corporation、BIDV Securities Company。 ・ 電力の90%をベトナムに輸出、残り10%をラオス国内で消費する予定。 ・ 完成後10年間は、ベトナム・ラオス電力投資開発株式会社が管理し、その後はラオス政府が業務を引き継ぐ。
セカマン1 Xekaman 1	465	実施可能性調査 ・ 調査： 2006年～ ・ ダム建設(予定)： 2008年～	ベトナム・ラオス電力投資開発株式会社 (ベトナム)〈70～80% (未定)〉、 ラオス〈15～30% (未定)〉	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事業総費用は約4億ドル (推定)。ベトナム・ラオス電力投資開発株式会社が調達。 ・ アタプー県に位置する。 ・ 2006年3月、ベトナム・ラオス電力投資開発株式会社が実施可能性調査を開始。 ・ 電力はベトナムに輸出する予定。

事業名	設備容量 (MW)	進行状況	実施主体 (国)〈所有者〉	詳細
ラオス領内 (続き)				
セカマン 4 Xekaman 4	55	計画 (進行中)	ベトナム・ラオス 電力投資開発株式 会社 (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用は約 9400 万ドル (推定)。 実施可能性調査の覚書が 2006 年に交わされた。 電力はタイまたはベトナムに輸出予定。
セコン 3 Xekong 3	150	実施可能性調査	ベトナム・ラオス 電力投資開発株式 会社 (ベトナム)	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用は約 2 億 8000 万ドル (推定)。 セコン県に位置する。 2008 年 1 月に覚書が交わされた。 電力はタイまたはベトナムに輸出予定。
セコン 4 Xekong 4	600 または 300	実施可能性調査 <ul style="list-style-type: none"> 調査: 終了 ダム建設 (予定): 2008 年～ 操業(予定): 2014 年～ 	Russian Regional Oil (ロシア)、その他未定	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用は約 6 億ドル (推定)。 セコン県に位置する。 2006 年 3 月、Russian Regional Oil が、実施可能性調査についてラオス政府と覚書を交わす。2007 年 11 月、EIA ワークショップをピエンチャンで開催。 2006 年 10 月、Russian Regional Oil がダム建設について覚書を交わす。 Vostokhydro Energostroy (ロシア) が建設を受注。 セコン 4、セコン 5、ナムコン 1、ナムコン 3 の累積影響によって、セコン河流域の漁業生産の 50% が失われ、ラオス国内と下流のカンボジアで深刻な被害が発生するとされる。 電力はタイまたはベトナムに輸出予定。
セコン 5 Xekong 5	400	実施可能性調査 <ul style="list-style-type: none"> 調査: (2008 年終了予定) 操業(予定): 2015 年～ 	Russian Regional Oil (ロシア)、その他未定	<ul style="list-style-type: none"> セコン県に位置する。 2005 年に覚書が交わされた。2008 年に EIA 完了予定。 電力はタイまたはベトナムに輸出予定。
ナムコン 1 Nam Kong 1	150 または 75	実施可能性調査 <ul style="list-style-type: none"> 調査: 終了 ダム建設 (予定): 2008 年～ 操業(予定): 2013 年～ 	Russian Regional Oil (ロシア)、その他未定	<ul style="list-style-type: none"> アタプー県に位置する。 電力はラオス国内で消費、あるいはタイとベトナムに輸出予定。 2007 年、実施可能性調査が完了。 2006 年 10 月、Russian Regional Oil がダム建設について覚書を交わす。
ナムコン 2 Nam Kong 2	80	承認済み <ul style="list-style-type: none"> ダム建設完成 (予定): 2012 年 	カピコ公司 (ベトナム)〈70%〉、EVN〈30%〉	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用は約 1 億 2000 万ドル (推定)。 アタプー県に位置する。 電力はすべてベトナムに輸出する予定。 2008 年 4 月、ラオス政府が事業を承認。
ナムコン 3 Nam Kong 3	35	実施可能性調査	Russian Regional Oil (ロシア)、その他未定	<ul style="list-style-type: none"> アタプー県に位置する。 2005 年 12 月、Russian Regional Oil が実施可能性調査についてラオス政府と覚書を交わす。 電力はラオス国内で消費される予定。
ダクエムル Dak Emuele	130	実施可能性調査 <ul style="list-style-type: none"> ダム建設 (予定): 2009 年～ 	ベトナム・ラオス 電力投資開発株式 会社 (ベトナム) 〈75%〉、ラオス 〈25%〉	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用は約 1 億 5500 万ドル (推定)。 セコン県に位置する。 2008 年 1 月、事業開発合意書に署名。

事業名	設備容量 (MW)	進行状況	実施主体 (国)〈所有率〉	詳細
ラオス領内 (続き)				
ホアイラム パンヤイ Houay Lamphan Gnai	60	実施可能性調査 ・ 調査 (予定) : 2008 年～ 2009 年	不明	<ul style="list-style-type: none"> セコン県セコン川支流ホアイラムパン川に位置する。 電力は一部をラオス国内で消費、残りをカンボジアに輸出する予定。 世界銀行が電力局に実施可能性調査の費用約 100 万ドルを供与。 日本企業ニュージェック社が調査を実施。
セピエン・ セナムノイ Xepian- Xenamnoy	390	実施可能性調査 ・ 調査 : 2007 年～	不明	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用は約 6 億 6800 万ドル (推定)。 アタプー県およびチャムパサック県に位置する。 電力の大部分はベトナムに輸出する予定。 2003 年 10 月、ラオス政府と Korea & Laos Power Development が、実施可能性調査を共同で行うとして覚書を交わす。実施可能性調査の結果、ダムを建設する場合は、韓国企業が 600 万ドルを投資。ラオス政府も 25～35%を出資する予定。
セカタム Xe Katam	61	実施可能性調査 ・ 建設完成 (予定) : 2012 年	関西電力 (日本)〈55%〉、タイ投資家〈25%〉	<ul style="list-style-type: none"> 事業費用は約 1 億 2000 万ドル (推定)。 チャムパサック県に位置する。 2007 年 12 月、事業開発合意書に署名。
カンボジア領内				
セコン Sekong	148	計画	—	<ul style="list-style-type: none"> ストウントレン州に位置する。 JICA 水力発電マスタープランで、優先順位第 13 番目とされている。JICA の調査によると、536 ヘクタールの土地が水没、503 世帯の移転が必要。

Trandem (2008a)、TERRA & IR (2008) をもとに作成。

セコン川



もっとも知りたい!

カンボジアへの影響 セサン川の場合

「めちゃくちゃにされてしまった
私たちの生活、文化、生命を、
いったいどうやって
補償するのでしょうか？」

ある村びと、セサン川沿いブルーク村 2003年

セサン川上流では、1993年にヤリ滝ダムの建設が始まって以来、さらに2か所のダムが建設された。これらのダムが操業を開始したうえに、あらたに2か所のダムが建設中である。この一連のダム開発が、下流カンボジア側の生態系と流域住民の生活にもたらした被害は甚大である。ラタナキリ州やストゥントレン州に住む村びとたちは、「1996年以来、セサン川はすっかり変わってしまった」と嘆く。現在、カンボジア側の川沿いでは、75か村に約3万人（ラタナキリ州で60か村に約2万人、ストゥントレン州で15か村に約1万人）の人びとが暮らしており（3PN, in progress）、大半の住民が、川の生態系の変化によって生活に大きな打撃を受けた。両州は先住・少数民族が多数居住することで知られ、ラタナキリ州で被害の報告があるのは、9民族（ラオ族、ジャライ族、カチヨーク族、タムプアン族、ブロー族、クルン族、クメール族、カベット族、華人）、ストゥントレン州で報告のあるのが、7民族（ラオ族、ラオデウム族、クメール族、クメール・コー族、クメール・パデウム（ブロー）族、プノン

族、クルン族）におよび（Fisheries Office & NTFP, 2000; Baird et al., 2002）。

セサン川流域に発生したダムの悪影響については、地元住民とNGOが、当局とも協力して、さまざまな調査や記録を行ってきた。もともと初期のものは、2000年4月から5月にラタナキリ州で実施された調査（Fisheries Office & NTFP, 2000）で、このときは、地元のNGOと州漁業事務所が協力して、州内4郡15集合村に点在する59か村の住民に聞き取り調査を行った。その後、ストゥントレン州でも同様の聞き取り調査が実施され（Baird et al., 2002）、生物への被害は、鳥類（Clasen, 2004）や魚類（Baird & Meach, 2005）を対象とした調査もある。最近では、NGOと地元住民が、川沿いの村を放棄して内陸部に移住する住民の現状を調査した報告書もある（3PN, 2007）。

ヤリ滝ダムの建設が始まってから実に12年を経た2005年、ENVNの委託を受けたSWECO Groner社が、ベトナム領内セサン川の（計画中もふくむ）ダムによる下流カンボジアへの影響を調査した。その結果、カンボジア側住民が長年にわたって訴えつけてきた問題の数々が裏付けられた。この調査の結果は、2007年7月、『ベトナムの水力発電開発によるカンボジア領セサン川への影響に関する迅速EIA最終報告書』（SWECO Groner, 2007. 以下では、「セサン事後EIA報告書」としてまとめられた。

以下では、セサン事後 EIA 報告書をはじめとする過去の主な調査から、まず、ダム開発による河川環境の変化と生態系への影響、次に、その結果として住民が受けた被害をまとめた。

異常な洪水

ヤリ滝ダムの建設が始まるまで、セサン川沿いに住む村びとたちは、水位の上下や洪水は周期をなし、それは川の姿の一部で、とりわけ雨量と関係があると理解していた。ところが、ヤリ滝ダムのせいで、住民たちの知恵が通用しない異常な水位の変動や大洪水が発生しはじめた。

一般に、水力発電所の発電量は、タービンを通過する水の量（つまり、貯水池から下流に向けて放出される水の量）に正比例する。ヤリ滝ダムの場合、自然の周期とは無関係に変動するベトナムの電力需要を満たすために発電が行われる (Wyatt & Baird, 2007)。このため、下流に不自然な水位の変動をもたらすのである。セサン事後 EIA 報告書は、ベトナムのダム開発によって、下流で不自然な水位の変動や異常な洪水が発生するようになったとしている。雨季が始まったばかりの時点では、ダムの貯水池に水を溜める必要から下流の水量は減る。いったん水が溜まると、こんどは発電による放水で下流に洪水が発生する。乾季には、貯水池からの放水が続

くため、下流の水位が通常より高くなるのである。

異常な洪水によって、流域の住民が広範な被害を受けたのは、1996 年後半がはじめてである。同年 9 月、上流部で大雨が降ったが、洪水は約 1 か月遅れて、10 月と 11 月にやってきた。しかも、このとき、数時間のうちに、みるみると水位が数メートルも上昇し洪水になったという (Fisheries Office & NTFP, 2000)。この事件以降、異常な大洪水や急流の発生が頻発するようになった。セサン事後 EIA 報告書は、1999 年および 2000 年のヤリ滝ダムからの放水に言及し、カンボジア側で人命、財産、生計、居住地に深刻な被害を起こすほど大規模であったことを認めている。

2002 年ごろから洪水はおおむね以前ほどひどくはなくなった (Trandem, 2008b)。しかし、2005 年 8 月には、激しい洪水が村を襲い、少なくとも 1 名の住民が溺死している (SPN, 2005)。

乾季における異常な水位の低下

低下

ダム開発の結果、乾季の水位が高くなることは前述したが、その一方で、住民の中には、水位が極端に低くなり、川が干上がると証言する者もいる。以下の時期には、ラタナキリ州でセサン川が完全に干上がったという (Trandem, 2008b)。



崩れ落ちた河岸 (SPN 提供)。

- 1997年と1998年の乾季(日数は不明)。
- 2000年4月(日数は不明)。
- 2006年2月(2日間)。オーヤダウ郡、アンドンミア郡、タベン郡において、川は完全に干上がった。さらに下流のプエンサイ郡では、多少の水が残っていた。ある住民は、この事態が発生する数日前に、「2月に2日間、セサン川の水を止める」というEVNの通知を無線で聴いた、と証言している。
- 2007年2月(2日間)
- 2007年12月(4、5日間)

水位の異常な変動

水位の異常な変動は年間を通じて起こっており、さまざまな様相を呈する。1日の内に上下することもある。数日おきに変動することもある。注目すべき例として、1日の内に水位が7メートルも上昇し、やがて下降したと、オーヤダウ郡で複数の住民が証言している (Fisheries Office & NTFP, 2000)。水位の不自然な変動はMRCのデータ (Wyatt & Baird, 2007: 432) でも確認することができる。表5は、ヤリ滝ダムから約110キロ下流に位置するラタナキリ州アンドンミア郡で、2001年から2003年、毎年1月に1時間毎に計測された水位の変動を示している。表5を見ると、1日の内

に水位が1メートル前後も上下する現象が頻発していることがわかる(特に2003年)。また、水位が大きく変化するときと比較的安定するときがある点も不自然な変動と言える(特に2001年)。

河岸浸食

セサン事後EIA報告書では、常態化する不自然な水流の変動によつて河岸浸食が発生していることを認めつつ、「水位の変動によつて、河岸はいつも地滑りや侵食を受けやすくなっている。以前とくらべて、むき出しになって勾配が急な河岸も増えている。これは河岸が地滑りを起こしたためである」(p.140)、あるいは「水位と水流の日常的な変動は、下流河川の広い範囲にわたつて侵食を誘引する。これは、乾季にもっとも顕著である…(中略) : 時間が経つと、河岸、樹木、竹林は、地滑りで川に落ち込んでいく。さらに、河岸は垂直となり、洪水が発生すると大規模な侵食を起こしやすくなる」(p.145)と詳述している。

濁度の悪化

10年前とくらべて、特に雨季のセサン川の濁りは、はなはだしくなっているとされる。セサン事

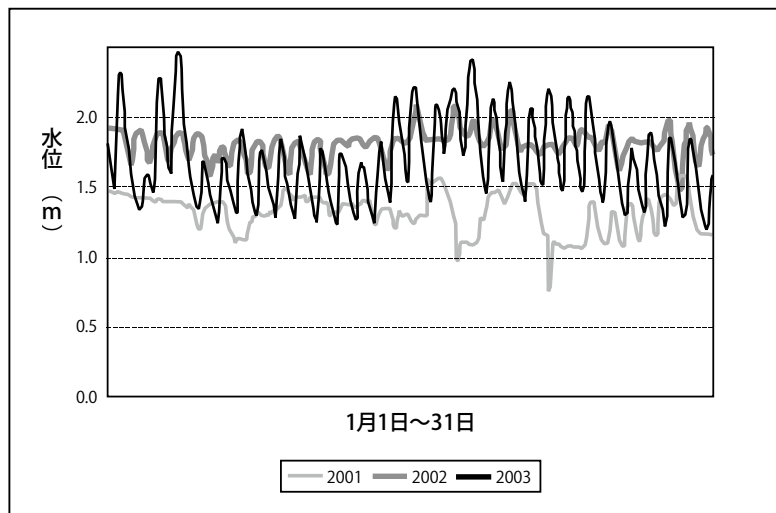


表5 1月の水位変動
(2001年~2003年、
調査地点:ラタナキリ州
アンドンミア郡)

Wyatt & Baird (2007: 432) をもとに作成。

後 E I A 報告書では、ダム建設および操業中のダムの貯水池で発生する浸食が濁度の悪化を引き起こしているとして、「ダム貯水池の壁面が侵食されている。侵食された成分はほとんど貯水池に沈殿するが、微細な沈泥（シルト）や粘土は下流に流れ、河川の水を濁らせる。このような侵食が下流で問題を引き起こすのは（ダムの）操業の初期10年のみである」（p.145）、さらに「ヤリ（滝ダム）の操業1年目に濁度の問題が発生して、村びとは水を洗濯に使えなかった。再びカンボジア側で河川の水が濁りはじめている。これは、ベトナム側で新しい（ダム）事業の建設作業が行われているためである」（p.139）、あるいは「洪水の時期には水が赤く染まり、濁（にご）る…（中略）…悪臭が発生して、水が濁（にご）っていることもよくある」（p.142）などと説明している。また、ダムの下流でも河岸浸食が進行し、水位と水量の変動で川床が洗い流されている可能性もある。これらも濁度の悪化の原因と考えられる（Wyatt & Baird, 2007）。

回遊の阻害

本来、モンスーンの周期が誘発する魚の回遊を異常な水位変動が乱している点は、以前から研究者や NGO、住民が指摘してきたところである。この点について、セサン事後 E I A 報告書は、「生物

種の多くにおいては、雨季の冒頭で発生する第1回目の河川水流の増加が回遊行動を誘発する。（回遊を）誘発するこの水流の発生は、貯水池のある調整河川では時期が遅れ、かつ量が少なくなることがしばしばである。雨季の冒頭では、貯水池を満たすために（水が）使われるからである。（中略）…貯水池は、（河川の）水流が（魚の回遊に必要な）量に達する時期をかなり遅らせる可能性がある。その結果、魚は産卵地をはじめとする目的地に適切な時期に到達できなくなる。（中略）…産卵回遊は、（回遊を）誘発する水流が十分に発生しないこと、あるいは回遊期間内に魚が産卵地に到達するのに十分な水量が存在しないことによって、しばしば阻害されてしまう」（p.149）と説明している。

魚の生息環境の悪化

ダム建設、あるいはダム湖や河岸の浸食の結果、シルトや粘土が下流に流れる。これが魚の生息環境の劣化につながる。例えば、シルトが川底に沈殿すると魚の生息地が脅かされる。プエンサイ郡ティアムクロム村近くには、かつて深さ7〜8メートルの淵があったが、2000年の調査時には、すでに1メートル半ほどにまで埋まってしまったとの地元住民の証言がある（Fisheries Office & NTFP, 2000）。シルトや堆砂によって、なにもなかった場

所に砂州が出現することも多くの村びとたちの報告するところである。この点に関して、セサン事後 E I A 報告書は、「カンボジアのセサン川中流部および下流部では、水位変動の幅は小さいとしても、上流の浸食による土砂が下流に流れ、乾季の間に淵に堆積する点は注目に値する。淵は少しずつ埋まり、乾季の魚の避難場所としての重要な役割を果たせなくなる」（p.145）としている。また、河川の濁度が高いと水中に達する太陽光が少なくなる。これによって、魚の餌となる藻類など、水中で光合成を営む生物の発育が阻害される。さらに、水中に浮遊物質が増加することで、高度の堆積負荷に耐えられない魚のえらに炎症が発生することもある（Hirsch & Wyatt, 2004）。

魚類の減少

魚類の固体数、特に大型の魚が激減している。2005年に NGO がラタナキリ州で行った村びとからの聞き取りでは、ヤリ滝ダムの建設以降、相当の種類の魚が急に姿を見せなくなっている（Baird & Meach, 2005）。

セサン事後 E I A 報告書も、ダム建設が漁業資源にもたらす深刻な被害を率直に認め、「ベトナムにおける既存および計画中の河川管理計画が、セサン川の何種類かの魚類をはじめとする水生生物の死

滅を引き起こすことには疑いの余地がない。ヤリ(滝ダム)が操業を開始してから、川の淵が堆積物で埋まったことにより、大ナマズ、イシガイ(淡水性の二枚貝の総称)、カニは姿を消した」(p.20)、あるいは「ヤリ(滝ダム)の(河川)調整は、セサン川沿いに住む人びとに必要なタンパク質の量が漁業では供給できない程度にまで、魚類資源、魚のサイズ、魚種構成を減少させたと考えられる。これは、調査中に聞き取った人びとすべてが証言しており、また、バンルンの魚市場で、セサン川で捕れた魚が減っていることから確認できる：(中略)：10年前、バンルンの魚市場にとってセサン川は主たる魚の供給源であったが、今ではクラチエ州のメコン河で捕れた魚が多い」(p.139)などと述べている。

表6 ヤリ滝ダムの建設以降に
姿をほぼ消した魚の種類

<p><i>Macrochirichthys macrochirus</i> <i>Luciosoma bleekeri</i> <i>Thynnichthys thynnoides</i> <i>Leptobarbus hoeveni</i> <i>Channa cf. marulius</i></p>

Baird & Meach (2005: 35)

野生生物への悪影響

乾季における水量の増加をはじめとするセサン川の変化は、さまざまな野生動物にも悪影響をおよぼしている。2003年に行われた調査によると、セサン川に生息しているカタグロツメバゲリ、カワアジサシ、絶滅危惧種であるインドアジサシといった、砂州の上に巣を作る鳥が減少している(Crasan, 2005)。セサン事後EIA報告書も、「セサン川の異常な水位変動は、川の自然なリズムに適応している川辺の植物、鳥、爬虫類、さまざまな水生生物の生態に深刻な悪影響をおよぼしている」(p.13)と述べている。

有毒藻類の発生と水質汚染

セサン川沿いの住民は、セサン川の水質が悪化していること、それにより健康被害が発生していることを長年訴えつづけてきた。セサン事後EIA報告書もこれを認め、「ヤリ滝ダムの」貯水池に(水が)溜められるようになってはじめての2、3年間(1998年〜2000年)、(池や湖に繁殖し水を緑色にする)毒性のアオコが発生し、ラタナキリ州に水質問題を引き起こしたと思われる」(p.136)、あるいは「水質データを検討した結果、ヤリ(滝ダム)の貯水池で、低濃度の藻類毒素を検出した。さ

らに、ミクロシスチンと呼ばれる毒素を生産することで知られる藻類種ミクロキティス属の一種が寄生したことが明らかになった。ミクロシスチンは、長期的に見た場合、肝機能にじわじわと影響を与え、肝炎などの肝臓病と併発すると患者が死に至る可能性もある」(p.135)、また「(2005年12月、プウムピイおよびブエンサイで行われた)河川中のミクロシスチン値検査の結果は、検出限界よりも低かった。しかし、河川が汚染される危険性のもっとも高い時期は4月から5月であるのに、サンプリングはこの時期に行われていない。乾季のサンプリングが必要である」(p.135)などと指摘している。

さらに、セサン事後EIA報告書は、「ベトナムおよびカンボジアで採取した水と藻類を分析し、聞き取り調査の結果と総合して考えると、ヤリ(滝ダム)の貯水池が、栄養分に富んだ低層水を放出することで、下流の川に藻類が発生した可能性がある。実際、*Lungya* (cf. *woolai*) 属の熱帯・亜熱帯性系状アオコがいくらか存在したが、この藻類は(すでに)述べたのとまったく同様の症状を誘発する。また、水は有毒となり、かゆみを引き起こすことがある。飲んだ場合は、呼吸器系疾患、頭痛、腹痛を生じる。この藻類は、貯水池でも河川でも生育可能で、日光が豊富で温暖なときに発育する。異常発生によって魚が死ぬこともある。2005年11、12月の調査では、藻類毒素がヤリ(滝ダム)の貯水池で見つかったものの、下流では検出できなかった」とも

述べている。

セサン事後 EIA 報告書は、また、新規の貯水池でも有毒藻類の問題が発生する点を予測している。すなわち、「はじめの5年から10年間は、水没した土地から発生する分解有機リター（落葉・落枝）が養分を放出する。この時期、貯水池はさらに富栄養状態となり、定期的にアオコの問題が発生する可能性がある。とりわけ、水流が少ない時期の終わりごろ（4、5月）に発生する可能性がもっとも高い。将来（建築されるダムによって）、さらに土地が水没し、（河川）調整後5年から10年の間、下流で栄養分に富んだ水が生まれる。これによって、あらたに藻類の問題が発生する可能性がある」（p.148）と述べている。

以上が、ダム開発によって生じる河川と周辺環境の変化である。こうした変化は、次のような形で河川流域に暮らす人びとの生活に影響をおよぼす。

人命、財産、生計、居住地の損失

1996年後半から現在に至るまで、予測可能な大洪水や急流が頻発することで、家畜は溺死し、舟や漁具が流失し、農作物や住民の財産が破壊され、住民は恐怖におびえている。2000年の聞

き取り調査 (Fisheries Office & NTFP, 2000) によると、ラタナキリ州の流域59か村だけで、少なくとも32名の村びとが異常な水位上昇による高波などで死亡している。家畜の溺死も多く、少なくとも、水牛612頭、豚2389頭、アヒル3559羽にわたり4万962羽が被害に遭っている。また、50トンを超える貯蔵米が洪水で流失している。高波や増水で流失した舟や漁具類については、丸木舟1191隻、エンジン付きボート18隻、刺し網9463件、投網129件、漏斗式の仕掛け2187件、開閉式の仕掛け5247件など、報告があとをたたなかつた。この調査が実施されてから、すでに8年以上の歳月が経過しており、住民が被った被害や損失は増大の一途である。

2005年8月の洪水を例外として、2001年6月以降、洪水や水位の急激な変動による溺死者は報告されていない (Trandem, 2008b)。NGOの報告書 (NGO Forum on Cambodia, 2005) によると、これには、以下の要因が考えられる。まず、異常な水位の変動による危険から逃れるために、村びとたちが生活・行動様式を調整している点がある。次に、水位の変動がかつてほど激しくなくなったことである。最後に、ベトナム政府が発する放水の事前通知がいくつかの村に届いていることがある。ただし、遠隔地の村までは通知が届いていないので、通知方法を改善する必要がある。

河岸農業への打撃

セサン川流域では、乾季の水位低下で現れる川岸の土地を利用して畑作を行い、タバコ、なす、トウガラシなどの作物を自給・販売・物々交換用に栽培している。2000年の調査 (Fisheries Office & NTFP, 2000) によれば、こうした河岸農業に従事している村びとの数は、(当時の) 流域人口の半分に相当する1800世帯におよぶ。セサン事後 EIA 報告書も、水位の大幅な変動、大洪水、河岸の崩落の結果、河岸農業が衰退し、農地の放棄にもつながっていると述べている。また、住居周辺の菜園も水位の異常変動によって同様の被害を受けている。

米の生産の低下

2000年の調査によると、大洪水で水没した農地は、1999年の雨季だけで、水田1830ヘクタール(約18平方キロ)、焼畑地629ヘクタール(約6平方キロ)に達した (Fisheries Office & NTFP, 2000)。この点について、セサン事後 EIA 報告書は、「米の生産が、洪水発生時の過剰水と雨季冒頭の(通常より)低い水位によって被害を受けている」(p.143)と述べている。

有用生物・植物の減少

かつて川沿いの住民は、乾季に浅くなった川の淵や川床で、近辺に自生する有用植物や生物（貝）などを豊富に集めることができた。セサン事後EIA報告書も、「侵食によって、かつては食用・薬用の目的で採集できた、川辺に自生する生物種が減少した」(p.142)としている。

漁獲量の減少

セサン川の漁獲量は大きく減少している。2005年に6か村の漁師たちと協力して実施された調査 (Baird & Meach, 2005) では、6か村での漁獲量は、以前とくらべて、50%から90%、平均で約73%も減少したと推定している(表7)。

セサン事後EIA報告書も、漁業資源に対する被害の深刻さを取り上げ、「漁業資源の減少による魚の捕獲量の低下(以前の捕獲量の10%~30%)について、ヤリ(滝ダム)は、この減少の主たる原因である」(p.139)と断定している。また、漁業資源の減少に加えて、水位の急激な変動で村びとが舟や漁具を流失し漁業ができなくなる、水位が安定していることを前提として発達した漁法では思うように収穫できないといった、漁業自体が直面する問題も、漁獲量減少の原因であると考えられる。

食糧安全保障の危機

河岸農業の衰退、米の生産の低下、有用生物・植物の減少、漁獲量の低下は、流域住民の食糧安全保障を脅かす。セサン事後EIA報告書にも、以下の記述が見られる。

- 「漁獲高が減少し、食糧安全保障はすでに危機に瀕している」(p.186)。
- 「昨今、地元住民は、魚のみをタンパク源として生活することができなくなっており、(販売用ではなく)食用の目的で家畜を飼育したり、養殖を行う必要がある」(p.140)。
- 「今のところ、魚に代わる日常的なタンパク源は存在しない。村びとには肉を食べるだけの金銭的余裕がない。家畜は現金収入のための販売用に保有しており、食用目的に給することはできない」。
- 「魚に代わる、現実的なタンパク源を確保し、川辺の野菜の代替となる生物種が見つからない限り、長期的には、とりわけ成長期の子どもの栄養失調…(中略)…健康状態の悪化が予想される」(p.143)。

表7 セサン川の漁獲量の減少(推定)

村名	過去の漁獲量 (基準値=10)	現在の漁獲量 (減少率)	備考
プノンコック村	10	2 (80%)	
ティエムルー村	10	1 (90%)	
タベン村	10	3 (70%)	かつて村びとは自家製のプラホックをつくっていたが、現在では市場で購入している。
コナットトイ村	10	3 (70%)	
タラーオ村	10	5 (50%)	
ボックハーム村	10	2 (80%)	

Baird & Meach (2005: 35) をもとに作成。

水質と健康への影響

セサン川の水は、流域住民の洗濯や水浴び、場合によっては飲用にも利用されている。2000年の調査 (Fisheries Office & NTFP, 2000) では、

住民が特に訴えた症状として、下痢、腹痛、のどや鼻の痛みとかゆみ、めまい、吐き気、発疹などを記録している。これらは、流域で一般的なコレラ、麻疹、水疱瘡、マラリア、ジフテリアの症状と比較すると、特異な症状であるという。さらに、村びとたちによると、同様の症状は家畜の間にも広がっている。1997年と1998年の雨季だけでも、村

びとたちが異常死と考えている家畜の数は、水牛4909頭、牛2288頭、豚7854頭、アヒル1670羽にわたりで実に14万7749羽にのぼる。また、「バーキングディア」と呼ばれる鹿や野生のイノシシなど、希少種をふくむ野生動物がセサン川近くで病死している、との地元住民の報告もある。

セサン事後EIA報告書は、有毒藻類の発生を認め、藻類が引き起こす深刻な健康被害について、「地元の人びとが訴える、セサン川の水を飲むと出る症状は、アオコが引き起こしている可能性がある。アオコは、(肝臓を攻撃する)肝臓毒と(神経を攻撃する)神経毒の2種類の毒素を生産する。神経毒は、摂取数分後で死に至ることがあり、肝臓毒は死亡までに数時間から数日かかることがある。双方とも、もともと一般的な直接の死因は呼吸器系疾患である」、あるいは「セサン川で水浴びをしたり、泳いだりしたあとに感じるかゆみも、ある種の藻類が引き起こしている可能性がある。もともと一般的な生物種は、CyanophyceaeとChrysophyceaeのアオコ

である。これらの藻類は、刺激性液体を内包する浮袋を持ち、触れると破裂する」(p.135)と詳述している。

砂金採取の衰退

水位の異常変動によって、たいせつな副収入源である砂金採りの作業ができなくなった。2000年の調査で対象となった4郡のうち2郡では、かつて乾季の重要な産業であった砂金採取が、乾季の増水や高波でまったくできなくなった。59か村のうち47か村で砂金採りをしていたことから、被害の大きさが推測できる(Fisheries Office & NTFP, 2000)。

交通・運輸手段への悪影響

川は、流域住民たちの交通・運輸手段でもあった。村びとたちは、村と漁場・田畑との往復、村落間の往来など、日常的に川を使って移動している。流域では一般的に、ひとりでも操縦できる丸太舟がもともと頻繁に使われている。しかし、急激な水位の上昇や強い流れによって、舟が転覆したり、水面下の流木や岩礁に衝突して損傷することがある(SO Forum on Cambodia, 2005)。セサン事後EIA報告書も、「濁った水のせいで(水面下の岩が見えに

くくなり)船を漕ぐ際の危険が大きく」なっている(p.140)としている。

経済的損失

おもに2000年のデータをもとにした経済分析(McKenney, 2001 in Wyatt & Baird, 2007)では、1999年、ラタナキリ州に住む3434世帯の年間収入におよぼした損失は、総額約250万ドルだという。これは、洪水による物理的被害が発生した最初の年である1996年には月109ドルであった世帯収入が、1999年には月46ドルまで減少したのに等しい。さらに、1996年から1999年までの資産の損失累計は、実に80万ドルにもおよぶと推測される。ただし、量化するのが難しい影響も多いことから、これらの数字は、被害を低く見積もりすぎているとの見解もある。

経済的損失を埋め合わせるために、借金を背負う村びとが増えている。おなじ村の住民同士で、あるいは地域の米銀行などからお金を借りたり、近隣の高利貸しから借金をする。また、周辺の森に自生する植物の利用を増やしたり、(焼)畑の面積を拡大する傾向が見られる(Wyatt & Baird, 2007)。

転出・離村

ダム of 被害を避けるために、離村して山間部に住みはじめる村びとがあとを絶たない。2006年の調査 (SSPN, 2007) によると、ラタナキリ州セサン川流域では、すでに722世帯(約3500人)が村を離れている。転出・離村のきっかけとしては、頻発する洪水や異常な水流がさまざまな損失をもた

らし、村びとたちが川沿いに住みつづけることに困難と恐怖を感じている点があげられる。食糧確保が難しくなっていること、住民がダムの決壊を恐れていることも離村の大きな理由である。

しかし、移転した住民も新たな問題に直面している。まず、離村の際に、それまで所有していた田畑や財産を放棄することになる、また、転居先は学校から遠く、1000名以上の学齢児童が学校に

通えないでいる。さらに、新しい田畑を開拓するため、数100ヘクタール(数平方キロ)にのぼる森林が伐採されている。このほかにも、特に乾季に深刻な水不足が発生する、遠隔地で移動手段も限られることから外部との接触や情報交換が難しい、などの問題点が報告されている (SSPN, 2007)。





カンボジアへの影響

スレポック川の場合

スレポック川流域では、21か村に約1万1000人の人びとが暮らしている (SRN, in progress)。川沿いに住む村びとの大部分は、ラオ族、プノン族、タムプアン族、ジャライ族、プロー族、クルン族といった先住・少数民族である。村びとたちは、セサン川沿いの住民とおなじく、農業、家畜の飼育、運輸交通、飲用をはじめとする家庭生活など、日常のあらゆる局面でスレポック川の水を利用してゐる (Swift, 2006)。

スレポック川上流のベトナム側には、操業中のダムが1か所、建設中のダムが4か所存在する。住民の証言によると、セサン川で見られるのと同様の変動が、2004年ごろからスレポック川でも観察されるようになった。

こうした変化と住民生活への影響は、NGOの調査 (Swift, 2006) や住民が発したプレスリリース (囲み3) に記載・記録されている。現在の状態については、NGOからの聞き取り (Irandem, 2008b) を通じて知る事ができる。

地元住民の証言では、スレポック川で異常な水

位変動が見られるようになったのは、2004年である。2006年以降は、そうした変動が頻発するようになった。異常で急激な水位の上昇は、乾季にも報告されている。

2004年雨季のスレポック川は、干上がるには至らなかったが、水位が非常に低かった。また、2005年乾季の水位は、住民の記憶に残る限りで最低であった。水量が少ないために水産資源が減り、さらに魚の乱獲が行われたという。

2005年からは、各村を異常な洪水が襲うようになった。約1週間続く大洪水が、2005年に2度(8月、9月)、2006年に1度(8月)、2007年に1度(8月)発生している。2005年9月以降の洪水はことに深刻で、スレポック川から2キロ離れた地点まで水が達した。田畑は壊滅し、住民の家財道具や財産、家畜が流失した。2005年9月の洪水の数日前には、ダムの放水を知らせるベトナムのラジオニュースを聞いた住民がいた。2006年8月には、郡長が集合村評議会にダムの放水を事前通知し、集合村長から警

告を受けた村もある。しかし、後日NGOが郡および州にこの件を問い合わせたところ、当局は通知したことを否定した。

スレポック川は、従来からほぼ毎年氾濫し、村や田畑が冠水することもあった。しかし、過去には村びとの財産や農作物に被害が出ることはなく、むしろ土壌を豊かにし農業生産を向上させる役割を果たしていた。また、洪水が発生するのは雨季特有の大量降雨のあとで、水は数日でひいたという。

2007年1月に村びとたちが発した声明では、川の変調による被害を次のように列挙している。

- 洲が浅くなってきている。河岸浸食が速度を増している。
- 住民と家畜の健康が害されている。
- 河岸農業や村びとの資産が破壊されている。
- 村びとが河岸の田畑を放棄している。食料や新しい職を求めて離村する住民が現れている。
- 水産資源が減少し、漁業による生計が立ちゆかなくなっている。
- 伝統文化や生活様式の維持が困難になってきている。

セサン川の場合と同様に、ENVNの委託を受けたSWECO Groner社が、ベトナム領内スレポック川流域の(計画段階をふくむ)ダムによる、下流カンボジア側への影響を調査した。その結果は、『ベ

囲み3 カンボジア・スレポック川で 深刻な洪水が村びとの生活を直撃

(2006年8月16日付け記者発表)
セサン・スレポック・セコン保全ネットワーク (3SPN)

2006年8月12日以来、カンボジア・ラタナキリ州のスレポック川沿いに住む村びとたちを、大洪水が襲っている。スレポック川の水がすさまじい勢いで村に流れ込み、家屋、学校、寺院、道はことごとく水没してしまい、状況は日ごとに悪化している。

村びとによれば、スレポック川の水が村に達しはじめたのは8月12日の正午ごろで、たちまちのうちに家屋と道路が冠水した。8月14日には、洪水の被害は川岸から1.5キロも離れた家屋や水田にまで広がり、水位も3、4メートルにまで達した。スレポック川の水深は、8月14日の測定で13.5メートルあり、2日後にはさらに1メートル増水した。

チェイウードム集合村には、トゥマイ、ディロウ、ルンパット、オウカン、サムカ、スレチュックの6か所の村があり、約693世帯の人びとが住んでいるが、6か村すべてが今回の洪水で深刻な打撃を受けた。従来バイクで往來していたところを、今は舟で行き来しなければならぬ。一時は緑におおわれた水田も水の底に沈んでしまった。村びとの大半が、すでに今年の田植えを終えていた。

「昨年もひどい洪水が1度ありました。でも、今年の洪水はさらにひどい。村が毎年このように水没するなんてありえません。何世代にもわたる常識です。もし毎年水没するなら、わたしたちはここには住めなかったはずですから」と、ルンパット村のヌオン・コムさんは語った。ヌオンさんはまた、すでに田植えを終えた2ヘクタール(2万平方メートル)の水田も水没したと述べた。洪水で米がだいなしになれば、この先食べていくものがない。家財道具を守るために、村びとたちは、家畜や貴重品を水没していない高台に移した。

8月16日、もっとも被害の大きかったルンパット村で、少なくとも30世帯が身の安全を確保するために家を捨て、水の届かないところに移動した。「チェイウードム集合村の各村で、少なくとも100ヘクタール(1平方キロ)の水田が被害を受けました。全体で、少なく見積もっても600ヘクタール(6平方キロ)の水田が水没したということです」とクロウト・サン・ルンパット郡長は語った。

スレポック川流域では、上流のベトナム

側でEVNが3か所のダムを建設している(当時)点が注目に値する。ルンパット郡の村びとの大半は、スレポック川流域のダム建設のことを知っている。最近降雨量も多いが、村びとの多くは、生計を悪化させる洪水が自然のものではないと勘付いている。この大洪水の原因についてはいろいろな説や考え方があり、ダムによるものなのか、雨のせいなのかは誰にもわからない。

「今回の洪水はまったく天然のもので、ラタナキリ州や上流で降りつづいた豪雨のせいですよ。中国に発生した台風の影響かも知れません」とクロウト・サン郡長は語った。ベトナムはクロウト・サン郡長に、スレポック川上流でのダム開発のことは知らせてきたが、ダムの放水については通知してこなかったという。

しかし、チェイウードム集合村の村びとの大半は、村長や集合村長から、8月12日から14日の3日間、ベトナムがダムからの放水を計画していると聞かされている。村びとたちは、スレポック川の水が村に達しはじめた8月12日にこの連絡を受けた。

この件について、チャンタ・ソンポン集合村書記官は、「ハー・ネン・ルンパット副郡長が電話でわたしに、ベトナムが3日間放水をする、と言ってきたんです。彼の指示にしたがって、わたしは荷物をまとめて川から離れるよう村びとに連絡したんです」と説明した。

3SPNは、ハー・ネン副郡長に説明を求めようと電話をかけたが、返事はなかった。

「集合村書記官から、ベトナムが3日間放水をすると聞かされて、わたしは村長たちに手紙を書いて、村びとに荷物をまとめて川から離れるよう伝達してほしい、と言ったんです」とマイ・サルアン・チェイウードム集合村長は語った。

ラタナキリ州気象水資源部のユン・チェタナ部長は、ベトナムからの放流については聞いていないと述べた。

クロウト・サン郡長の話では、コンモム郡のスライモングル、スレアンクロン両集合村でも、少なくとも7か村で洪水の被害が出ている。

(3SPN, 2006)

トナムの水力発電開発によるカンボジア領スレポック川への影響に関するEIA最終報告書(SWECO Graner, 2006a)以下では、「スレポック事後EIA報告書」としてまとめられている。同報告書は、

既存のダムによる悪影響は認めていないが、ダム建設が進行するにつれ、セサン川と同様の被害が起ると予測している。



越境する環境被害を 防ぐための枠組み

メコン河委員会 (MRC)

セサン・スレポック・セコン川は、いずれも国際河川メコン河の支流である。メコン河は、チベット高原に源流を發し、中国雲南省、ビルマ（ミャンマー）、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムを貫流し、南シナ海に注ぎ込む。MRCは、この国際河川の本流および支流を、流域各国が平等な立場ともっとも適切なやり方で保全・活用しつつ、開発の悪影響を最小限にとどめる目的で、1995年4月に設立された。ただし、正式加盟国は下流域の4か国で、中国とビルマ（ミャンマー）は「対話パートナー」の立場にとどまっている。MRC設立の際に加盟国が署名した「メコン河流域の持続可能な開発のための協力協定」(MRC, 1995; 以下では、「メコン河協定」) 第1条で、流域国間の協力分野を、メコン河流域の水および関連する資源の持続可能な開発・利用・管理ならびに保全と定めており、そこには水力発電もふくまれている。

MRCは、理事会 (Council)、合同委員会 (Joint Committee)、事務局 (Secretariat) の3つの常設組織で構成される。

理事会には各加盟国の関係が、合同委員会には政府高官がメンバーとして参加している。また、各加盟国には、「国内メコン委員会」(National Mekong Committee) が設置されている。一方、MRCに資金などを提供する援助国政府や国際機関は、「支援協議グループ」(Donor Consultative Group) と呼ばれ、毎年MRCと業務内容についての正式な協議を実施している (MRC, 2008a)。MRCの資金源は、2007年の場合、加盟国が提供する約163万ドルと、先進工業国政府や国際機関が提供する約2000万ドルの財政援助である (MRC, 2008b)。最大の拠出者はデンマーク政府で、2006年度は、約225万ドルをMRCに拠出した。同年、日本政府は約35万ドルを拠出している (外務省, 2007)。国際連合や国際金融機関と異なり、資金を提供している流域外の国々はMRCの活動に関する意思決定には加わらず、加盟4か国によって運営されている。ベトナム領内でのダム開発が原因とされるカンボジア北東部の環境破壊をくいとめるために、

MRCにはどのような役割が果たせるのか。ひとつの鍵は、メコン河協定第7条「有害な影響の防止と抑止」で、ここにはMRC加盟各国が、メコン河流域の水資源利用による有害な影響を回避・最小化・緩和すべくあらゆる努力を行う、と明記されている (MRC, 1995)。つまり、セサン川やスレポック川で生じている被害を解決・防止・緩和するために、MRCは「あらゆる努力を行う」べきなのである。

また、メコン河協定第5条A項は、メコン河の水を支流流域内で利用したり、流域外に転流する際は、合同委員会に通知することを義務付けている (MRC, 1995)。メコン河協定では、この通知の中心について具体的な定めがなかったため、2003年11月の理事会で通知の様式が承認された。これによると、事業名、事業の立地、事業の目的、(建設開始・建設終了・操業開始の) 実施予定日、水資源利用の期間、事業の概要などの通知が義務付けられている (MRC, 2003)。したがって、セサン・スレポック・セコン川流域でのダム開発の場合、開発を推進するベトナム・ラオス政府が、こうした情報をMRCの合同委員会を通じて、カンボジア政府に伝達しなければならぬ。しかし、ベトナム政府は定められた最低程度の情報ですら、カンボジア政府はいうにおよばず、MRC合同委員会にすら通知したことがない (Wyatt & Baird, 2007)。



セサン・スレポック川を 管理するカンボジア・ ベトナム共同委員会

AMRC (2003) をもとに作成。



「セサン・スレポック川を管理するカンボジア・ベトナム共同委員会」(Cambodian and Vietnamese Committees for the Management of the Se San and Srepok Rivers. 以下では「セサン・スレポック共同委員会」)は、セサン・スレポック両河川のダム開発による管理について、カンボジア・ベトナム両国政府が対話する場である。セサン・スレポック共同委員会の前身は、2000年10月、セサン川の問題を話し合うためにMRCの協力で生まれた「セサン川を管理するカンボジア・ベトナム共同委員会」(以下では、「セサン共同委員会」)である。2001年7月に第1回会合が開催され、2008年3月の第4回会合から、スレポック川の管理も協議範囲にふくまれるようになり、委員会名も現在のものに改称となった。

セサン共同委員会は、カンボジア、ベトナムそれぞれの国内に、「セサン川管理委員会」を設置していた。2004年1

月、カンボジアのセサン川管理委員会は廃止。その権能は、カンボジア政府水資源省が管轄する「カンボジア、ベトナム、ラオス、タイ国境ダムおよび運河の調整に関する常設委員会」(Standing Committee on Coordination of Dams-Canal along Border of



スレポック川

Cambodia, Vietnam, Laos, and Thailand) によって引き継がれている。

セサン共同委員会に対するMRCの関与は、技術的な面での客観的データの提供と助言以外には、司会と通訳の提供にとどまっていた。セサン問題を解決する上で重要な役割を果たす州政府やセサン保全ネットワーク(Sesan Protection Network = SPN)などの住民組織・NGOは、会合への参加すら認められていない(Hirsch & Wyatt, 2004)。この状態は、セサン・スレポック共同委員会となっても変わっていない。

もっと知りたい!

環境影響評価は問題回避に 貢献しているのか?

ダムなどの大規模基盤整備事業がもたらす被害を予測・回避・緩和・管理する手段のひとつとして、環境影響評価 (Environmental Impact Assessment) Ⅱ (EIA) がある。EIA の定義は、国ごとで異なり、日本の国内法では、「事業の実施が環境に及ぼす影響について環境の構成要素に係る項目ごとに調査、予測及び評価を行うとともに、これらを行う過程においてその事業に係る環境の保全のための措置を検討し、この措置が講じられた場合における環境影響を総合的に評価すること」と定めている (環境影響評価法第2条)。国際機関においては、「環境影響」の範囲に、自然環境のみならず、住民移転や生計手段に関連する社会環境面での影響もふくめて論じることが多い。

セサン・スレポック川上流でダム開発を進めるベトナムの場合、1993年にはじめて制定された環境保護法が「(前略) : 環境に与える影響を分析・評価・予測し、さらに環境保護に対するしかるべき解決策を提案する過程を意味する」ものと

して、EIA の性格を説明している (地球・人間環境フォーラム、2007)。ヤリ滝ダムのEIA が実施されたのは、この環境保護法が制定される前年の1992年だった。しかし、とは言いつつも、ヤリ滝ダムのEIA が調査対象としたのはダム下流6キロの範囲のみであり、数10キロ下流のカンボジア領内への悪影響は一顧だにされなかった。1993年の環境保護法や施行令においても、国境を越えた環境影響をEIA の対象とするかどうかは依然明確ではない。

1995年のメコン河協定を基盤とするMRCの越境ガバナンスに関する権能は、セサン川ダム開発のような支流をめぐる開発については、越境EIA の明白な義務にまではおよんでいない。MRC事務局は、ヤリ滝ダムのEIA は、MRCの前身である暫定メコン委員会時代に実施されたもので、メコン河協定発効以前の問題なのであるから、MRCに直接的な責任はないとの見解を示している (Wyatt & Baird, 2007)。

以下では、セサン・スレポック川ダム開発に関するEIA 報告書のうち入手可能なものについて、既存の分析 (Wyatt & Baird, 2007) をまよめた。

ヤリ滝ダム

スイスのコンサルタント会社 Electrowatt Engineering が EIA を実施した。調査費用109万ドルは、スイス政府が負担した。暫定メコン委員会は、このEIA 実施の際の調整役だった。EIA が影響評価対象として定めたのは、ダム上流にある住民移転地域と発電所、下流については、ダム建設予定地からわずか6キロの範囲のみであった。カンボジア側への影響調査は実施検討すらされず、下流の人口は「わずか」、影響も僅少であると断定した。

カンボジア側住民の訴えにあるように、4基の発電機のうち、2基の運転が始まった2000年5月12日の時点で、下流ではすでに相当深刻な被害が発生していた。にもかかわらず、2000年2月にNGOが自主的に調査を開始するまで、ヤリ滝ダムによって、ラタナキリ・ストゥントレン両州の村びとたちが受けた数々の被害の実態は、調査も記録もされていなかったのである。

セサン3ダム

1999年7月、日本政府が最大の出資者であるADBは、ベトナム政府に対して、発電能力260MWのセサン3ダムを建設するための技術支援の贈与を決めた。このADBの資金提供により、セサン3ダムのEIAは、WorleyETL社が実施した。2000年4月、EIA報告書案は完成したが、これをベトナム政府が拒絶し、最終版はついで作成されなかった。そればかりか、ベトナム政府はこのEIA報告書案を極秘文書あつかいにし、これを理由にADBも公開を拒んでいた。

2000年10月、結局ADBはセサン3ダム事業から撤退することになった。その後、2003年5月にEIA報告書案が外部にリークされ、その内容が世の知るところとなった。

このEIAの実施過程でも、カンボジアでの調査は行われなかったが、EIA報告書案は、ヤリ滝ダムとセサン3ダムに関するそれまでの調査を参照し、下流への影響を軽視または無視していると厳しく批判していた。さらに、カンボジア側へのダム建設の影響は「破壊的に甚大」で、事前調査は「信頼に足る科学的または定量的な根拠を持たない」とし、セサン川の水流を一方的に変えることは、国際法およびメコン河協定に違反すると示唆した。そのうえで、カンボジア・ベトナム両国間での交渉とカ

ンボジア側の影響住民に対する補償が提案されていたのである。

セサン4ダム

セサン4ダムのEIA報告書案は、ベトナム工業省とベトナム国内メコン委員会の名で出版された。この報告書案は、セサン川流域の個別ダム事業のなかで、カンボジア側への越境影響を検討した唯一の例である。しかしながら、このEIAが国際的水準を満たしているとはお世辞にも言えず、多くの深刻な問題をほらんでいる。基本情報すら記載されておらず、上流ダムの操業特性などに関する決定的に重要な情報も記述がない。結論の大部分は推定に基づいている。技術面の問題の例としては、以下の点があげられる。

- ダム事業の影響地域を特定していない。「カンボジアに影響がある」としているが、なんの影響があるかの記述は少なく、実質的に、根拠となるデータも示せていない。

● セサン4ダムからの放水量を調整するために、下流にセサン4A調整池を建設しよう提案しているが、調整池の容量を、セサン4ダムの乾季の放水量のみに基づいて推計している。国際水準にのつとつたEIAであれば、セサ

ン4ダムだけではなく、さらに上流に位置するダムからの放水量も総計した上で検討すべきである。また、雨季の状態や、セサン川のそれぞれのダムが洪水対策として放水した状況下での調整池の管理・運営について検討した形跡がない。

- 下流の水質について、ほとんど言及していない。
- 下流の漁業や、魚以外の生物群に関する基礎情報が欠落している。漁業に関しては調査を実施していない。にもかかわらず、下流の漁業資源はダムによる環境の変化に順応できると結論付けている。

このEIA報告書案は、手続き面でも国際的慣行から逸脱している。例えば、ベトナム国内メコン委員会の報告ではダム建設が2005年1月9日に始まっているはずだが、実施可能調査は2005年8月まで完成していない。つまり、セサン4ダムの建設は、実施可能性調査やEIAが完成し、当局によって承認を受けるまえに始まっていたのである。これは国際的慣行の違反であるばかりか、1993年のベトナム環境保護法第18条「EIA報告書の査定結果は、当該当局が事業を承認または事業実施を承認する根拠のひとつを形成する」にまで違反していると考えられる。

さらに、ベトナム政府がカンボジア政府にEIA報告書案を送付し意見を求めたのは、

2005年8月のことだった(意見送付の期限は同年12月とされた)。ところが、ダム建設は2005年1月に開始されており、これほど遅い段階でカンボジア政府の意見を求めることによつて、どのような意味があったのかは、はなはだ疑問である。カンボジア政府の意見が事業の内容を左右することはなかったと考えるのがふつうであろう。

事後 EIA

2005年から2006年にかけて、ベトナム政府は、セサン・スレポック両河川流域でのダム開発が、下流カンボジア領内におよぼす影響の調査を委託した。スレポック川での調査は、2006年11月に「スレポック事後EIA報告書」として出版の運びとなる一方、セサン川での調査結果は、2007年7月の「セサン事後EIA報告書」にまとめられた。

2つの事後EIAの委託を受けたのはSWECO Groner社で、SIDAとNORADが支援するベトナム国家水力発電計画の一部として実施された。これらの調査は、計画中のものもふくめたダムが下流にもたらす影響を調査し、最終的に緩和策を提案している。しかし、すでに運転・建設中のダムが存在する中で実施された調査を「EIA」と呼ぶことはできない。

流域住民もカンボジア政府も、まず、調査の公平性に疑問を投げかけた。それは、SWECO Gronerが、セサン川のダム開発に深くかかわってきたからにはほかならない。親会社のSWECOとSWECO Gronerの前身Sakkrat Gronerの2社は、ベトナム国家水力発電計画およびセサン3ダムに関する調査を実施した。カンボジア政府は、セサン共同委員会の席で、2社は流域でのダム事業に深い利害関係を持つと訴えたが、ベトナム政府はこの意見を無視して、2005年、2社を雇用した。また、セサン川の調査の費用の一部を負担したため、ベトナム政府の2社に対する影響力はさらに強まった。MRCも事後EIAに関与したが、最低限のレベルにとどまった(Wyatt & Baird, 2007)。

2つの事後EIAが国際的基準を満たしていないことは明らかであり、ベトナム政府やSWECO Gronerですら、これがEIAではないと認識している(Scurrah, 2007)。SWECO Groner社のトーマ・ハーゲン副社長も、スレポック川のカンボジア領内では「早急なEIA報告書」しかまとめることができなかったと認めている。同社の調査団は、2005年11月、たった2週間ラタナキリ・ストゥントレン両州に滞在しただけである。「EIA報告書を完成させるには、雨季と乾季両方の調査が必要なことだから、最低あと1年はかかる」と、ハーゲン副社長は発言している(Sam, 2007)。カンボジアの環境省EIA局の職員も、「これはEIA報

告書ではなく、初期EIA報告書であると考えている」と述べている(Scurrah, 2007)。

セサン事後EIA報告書は、村びとたちが長年訴えてきた問題を追認し、今後のダム開発でさらなる影響が発生することを指摘した点で評価できる。一方、スレポック事後EIA報告書は、スレポック川のダム開発が下流カンボジアにもたらしている被害には言及しなかった。しかし、今後開発が進むにつれ、セサン川と同様の問題が起こるであろうことを予見した(SWECO Groner, 2006a)。

事後EIAは、さまざまな影響緩和策も提案した。以下は、セサン事後EIA報告書が、ダムの操業による悪影響に対して提案した緩和策である。

- セサン4A調整池を設置すること。
- 導水路の放水および急激な流れに対する早期警報システムを確立すること。
- 雨季には貯水池の貯水を延期すること。
- 河川および貯水池への栄養分の流失を抑えること。
- 水産資源プログラムおよび養殖プログラムを考案すること。

下流の被害に対する補償については、以下の6項目が提案されている。

- 養殖プログラムの立上げ

- 家畜飼育や養鶏プログラムの立上げ
- 作物管理や補助的プログラムの立上げ
- 地域主導の森林管理や社会森林プログラムの立上げ・強化
- 電力の供給
- 医療制度の改善

セサン事後 EIA 報告書は、さらに、被害住民や地元当局、NGO などの関係者と協議を行いながら緩和策を立案するべきで、その実施にあたっては NGO が参加すべきだとも述べている。スレポック事後 EIA 報告書でも、スレポック 4 で放水を調節し下流の水位変動を改善する、などの緩和策が提案されている (SWECO Goner, 2006a)。

しかしながら、2008 年 3 月に開催されたセサン・スレポック共同委員会第 4 回会合の議事録 (Cambodian and Vietnamese Committees for the Management of the Se San and Srepok Rivers, 2008) を読むと、カンボジア・ベトナム両政府が、報告書に盛り込まれた緩和策をどれほど真剣に実施する気があるのか疑問を持たざるをえない。まず、カンボジア政府は、セサン川開発についてはセサン 4 A 調整池をうまく運転すること、スレポック川開発に関しては、事後 EIA に NGO が不満を持っているとして、カンボジア領で再度 EIA を実施するよう要望するにとどまった。これに対して、ベトナム政府は、セサン 4 A 調整池が下流への放

水を管理すると回答し、EIA のやり直しは資金次第であるとした。第 4 回会合は、セサン・スレポック両河川の水質モニタリングに対して MRC 事務局の支援を要請することを決定して幕を閉じた。かりに緩和策が実施されたとしても、カンボジア領内にあらたにダムが建設されれば、緩和策自体がほとんど意味を持たなくなる可能性もある。

セサン下流 2 ダム

EIA 報告書案は、すでにカンボジア政府に提出され、政府の承認を待っている状態である (EIA, 2008)。2008 年 5 月、セサン下流 2 ダムをめぐる公聴会で配布された資料 (PECC-1 & KCC, 2008) によると、EIA 報告書案の結論は、「(事業による) 恩恵は長期にわたり、また、それが大部分を占める」といった、ダムによる便益を強調したものである。これまでのセサン川ダム開発の中で、被害を受けた村びとたちが訴えてきた点に対する根本的な反省は微塵も読みとれない。一例として、漁業への影響について、一方で「ダム建設は水生動物種および魚種のいくつかにとって生息環境の変化を誘引する可能性がある」ことを認めつつ、緩和策としては、「(ダム) 貯水池における漁業」を提案し、「(前略) …貯水池は、漁業および養殖業に好ましい環境となる」と断言している。農業への影響につい

ては、「ダムができれば」乾季に水を供給し、二期作が可能となるため、貯水池周辺の農業生産が向上する」としている。洪水に関しては、「貯水池が洪水を減速させる」とすら強弁している。健康・保健・衛生面では、「大気・土壌・水質汚染が起こる可能性があり、疾病が発生する」という記述は見られるが、被害が出るのは建設中に限られ、緩和策で最小化できるとしている。



セサン下流 2 ダムの建設予定地周辺



村人の要望、関係者の対応

「村のみんなは、ヤリ滝ダムのこと、とっても憤慨してますよ。政府が解決してくれないなら、ダムまで行って自分たちの手で壊してやります」。

プー・トーさん、セサン川沿いパドル村 2003年

以下では、流域住民とNGOの動きや関係者の対応を時系列にまとめた。

セサン川下流で被害が発生 (1996年後半)

カンボジアのセサン川流域に住む村びとたちが、はじめて異常な洪水による損害を受けたのは1996年後半、ヤリ滝ダムの建設が1993年11月に始まって、約3年後のことだった。このときの洪水は、ダム建設に必要な導水ダムによって発生したとされている。村びとたちは、ベトナム側でダムが建設されていることすら知らされておらず、川の異常は精霊の業(わざ)だと信じていた。以降、雨季の洪水は従来よりも規模を増し、おまけに予測不可能となった。その結果、地元住民の間では死者をふくめて深刻な被害が発生した。

NGOネットワークが発足、自主的調査を実施 (2000年2月)

ラタナキリ州で、自然資源や村びとたちの生計手段に関連する草の根の活動を実践してきたNGO「Non-Timber Forest Products Project (NTFP)」などが、セサン川の異常と住民への被害を憂慮し、他のNGOとも協力して流域の村々の状況を調べ、会合を持つようになった。2000年2月、内外のNGOが「セサン・ワーキンググループ」というゆるやかなネットワークを立ち上げ、流域の状況を監視するようになる。創設時のメンバーには、NTFPをはじめ、カンボジアNGOフォーラム(NGO Forum on Cambodia)、オクスファム・アメリカ東アジア地域事務所(Oxfam America East Asia Regional Office)などが名前をつらねた。ワーキンググループが活発化するにつれて、Culture and Environment Preservation Association (CEPA)なども参加するようになる。

ワーキンググループは、2000年2月、セサン川問題の概要をまとめた報告を作成し、さらに2つの本格的調査の実施を決めた。この調査では、現地当局との協力で、カンボジア領内のセサン川沿いに点在する全90か所の村(当時)からの聞き取りが実現した。最初の調査(Fisheries Office

8 NFFP, 2000) は、2000年4、5月にラタナキリ州で実施、2番目の調査 (Baird et al, 2002) は、2001年12月から翌2002年1月にかけて、ストウントレン州で行われた。

MRCがラタナキリ州を視察、 政府も問題を公式確認

(2000年3月)

2000年2月のワーキンググループの報告を受けて、同年3月、MRCは、事実関係調査使節団をラタナキリ州に派遣した。同時に、カンボジア・ベトナム両国政府から国境を越えた洪水問題についての報告を受けた。その結果、使節団は、水位が極度に低い1998年の乾季(4、5月)と1999年の雨季の洪水時に、水位の異常変動が発生していたことを確認した。また、MRCの報告によれば、2000年1月から3月上旬、1時間あたり4、5メートルに達する水位の乱高下が7日から10日の周期で続いた。これによって、ヤリ滝ダムが放水が国境を越えた洪水を発生させている点が政府間で確認された(松本, 2003)。

ベトナム政府が謝罪

(2000年4月)

2000年4月、ベトナム政府は、同年1月から3月、ヤリ滝ダムの放水がカンボジアで洪水や高波を引き起こし、5名もの死者を出したことについて、カンボジア政府に対して公式に謝罪した。同時に、ベトナムの地方当局関係者が謝罪のためにラタナキリ州を訪れ、同州副知事に対して、「今後、事前警告なく下流に放水することはない」と明言した(松本, 2003)。しかし、こうした動きの裏でダム開発は着実に進行していた。ベトナム側の謝罪があった2000年5月、ヤリ滝ダムの2基のタービンが運転を開始。セサン3ダムの実施可能性調査も進んでいた。

ADBがセサン3ダム事業 から撤退(2000年10月)

1999年7月、ADBは、セサン3ダム建設への技術支援の提供を決定していた。この技術支援によって2000年4月、EIA報告書案が完成。同報告書案は、下流への悪影響を軽視・無視した従来の調査を厳しく批判し、カンボジア側で

の調査や緩和策を提案した。ベトナム政府はこの報告書案を承認せず、同年10月、「ADBからの事業支援は、もはや必要ない」と発表した(Hirsch & Wyatt, 2004)。

MRC事務局が介入、セサン 共同委員会が発足

(2000年10月)

2000年10月、MRCは第7回理事会を開催。この席で、MRC事務局の提案により、セサン川の管理についてカンボジア・ベトナム両国が対話をする場として、「セサン共同委員会」が発足した。MRC理事会で加盟国間の対話を開始するにあたっては、1995年のメコン河協定34条、18C条、24F条がその根拠となる(MRC, 1995)。34条によると、こうした対話はMRCが主導する。セサン川問題によって、MRCは、発足以来はじめて、34条、18C条、24F条の定める手続きを踏むことになった(Wyatt & Baird, 2007)。これで紛争が解決できない場合は、35条の規定により、当該国政府間の交渉に入ることもできるが、今のところ、カンボジア政府は35条の発動を求めている。セサン共同委員会は、これまで4度の会合を開いたが、MRCの関与は最小限にとどまっている。

カンボジア・ベトナム両政

府が初会合、5項目の解

決策で合意

(2000年12月)

2000年12月、MRCの関与により、カンボジアの国内メコン委員会事務局長、関係省庁職員、県担当者らから成る代表団がヤリ滝ダム現地を訪れ、ベトナム政府関係者と会談した(松本、2003)。その席で、両国政府代表団は、ヤリ滝ダムの放水による下流への被害を回避するためとして5項目の「解決策」に合意した。これは、のちの2003年11月、第3回共同委員会会合の席で、ベトナム首相による指示書として公表されたものと同様の内容である(EVN, 2003)。

- 解決策1 通常および非常の状況において、ベトナムは、貯水池の操業、特に放水に関する情報を、十分かつ事前に、適切な経路を通じてカンボジアと共有する。同様に、カンボジアにおける川の状況に関する情報も、おなじ方法で伝達する。
- 解決策2 セサン川流域に住む人びとが、水位の変動を認識し、予防措置が取れるようにヤリ滝ダム貯水池からの放水は徐々に実施する。

- 解決策3 通常の状況下では、約15日先の放水について、国内メコン委員会、関連する州当局、MRCを通じて通知を発する。

- 解決策4 緊急および極端な洪水状況下では、関連する諸機関に直ちに警告を発する。

- 解決策5 環境影響の緩和に関する調査については、必要に応じて、MRC 同席の下、別途協議する。

これら5項目の解決策は、ダムの放水の際にカンボジアへ配慮することで、表面上はベトナム政府がカンボジア政府に歩み寄ったかのように見える。しかし実質的には、カンボジアと交渉や協議することなしに、ベトナムがダムの放水様式を一方的に決めることを再確認している。また、放水の事前通知を発するとしているが、遠隔地に住む村びとたちの元には通知が事前に届かないことが多く、現実的な解決策とはいえない。第5項目の「調査」だが、この合意の日から調査が実施されるまでの間に、実に約5年の年月がかかった。しかも、調査の提言が実施に移されるかどうかについては大きな疑問がある。

セサン保全ネットワークが

発足、住民ネットワーク

が拡大(2001年12月)

2001年半ばになっても状況の改善が望めなため、セサン・ワーキンググループは、あらたな活動を模索するようになる。ワーキンググループ、地元住民代表、ラタナキリ・ストウントレン両州および郡職員が議論した結果、「セサン保全ネットワーク(SPN)プロジェクト」を立ち上げ、MRC、カンボジア・ベトナムの国内メコン委員会、援助国・援助機関に働きかけることで問題解決を目指す方針が決定された。SPNプロジェクトの活動の柱には、住民ネットワークの形成・強化を支援すること、住民の懸念や要求の根拠となる調査を実施すること、地方当局や国内外のNGOと協力関係を築き、技術的な面や働きかけの手段に対して支援を得ることなどが据えられた。

2001年12月、こうした活動が、「セサン保全ネットワーク」(SPN)の設立として結実する。SPNが住民ネットワークを支援する際に重要視したのは、ネットワークの構造が住民の視点から見て公正であり、住民の統一した声を発信できることだった。この点に関しては、2002年、郡長、集落村長、村長、村の長老たち、村のリーダー的人物、郡の教育・保健・農村事務所などの地元政府

囲み 4

もっと
知り
たい!

セサン・スレポック・
セコン保全ネットワーク

2005年10月、セサン保全ネットワーク (SPN) は、「セサン・スレポック・セコン保全ネットワーク」(3S Protection Network=3SPN) に発展解消し、あらたなスタートを切ることになった。3SPNはNGOの形態をとった地域住民の運動体である。事務局はラタナキリ州にあり、現地・国内・国際レベルでさまざまな団体・個人と協力しつつ活動を展開している。3SPNの活動目標は、セサン・スレポック・セコン川流域の住民が持つ河川環境や自然資源に対する権利が尊重・強化され、大規模開発によって破壊された(あるいは、破壊の危機に直面している)河川流域が回復され、被害住民が正当な補償を受けられるようになることである。3SPNは、資源の消費

と分配は、生態系の持続可能性および社会正義の原則に基づくべきであると主張する。

3SPNの主な活動は、流域で生活する村びとたちが、自分自身で意見や懸念を表明できるように、ネットワークを支援・強化してゆくことである。現在、3SPNの支援を受けて、2つの住民ネットワークが活動している。ひとつは、ラタナキリ州のセサン川流域全60か村で構成する「セサン保全ネットワーク」、もうひとつは、ラタナキリ州のスレポック川流域全14か村で構成する「スレポック保全ネットワーク」である。

住民ネットワークは、地域の伝統的な社会構造を基盤に、村レベルから郡レベルへと組織されている。まず、村レベルでは、男女各1名の代表を、村ごとに、村びとによって選出する。集合村のレベルでは、村の代表、集合村評議会の議員、村長や長老たちで構成する集合村委員会が設置されている。さらに、郡レベルになると、村の代表の中から、各郡に男女各1名の代表を選挙によって選出する。郡の代表は、毎月約14日をネットワークのための活動に費やし、その結果を郡のワーキンググループに報告する。ワーキンググループには郡で尊敬を集めている長老たちが集まり、集合村委員会のメンバーとともに、ネットワークの活動に関して助言する。住民代表は全員無給で、自主的にネットワークの活動に取り組んでいる。ストゥントレン州のセサン・スレポック・セコン川流域に住む村びとたちに対する支援は、同州で草の根活動を展開しているCEPAに協力する形で実施している。

SPN事務局が議論を積み重ねた。この結果として、現在の組織形態(囲み4)が取られるようになった。ネットワークに対する基本的方針は、SPNが発展した3SPNにおいても変わらず、あらゆる活動は村びとたちと協議の上で実施されている。

7か村で始まった住民ネットワークは、急速に拡大し、2008年現在、ラタナキリ州のセサン川沿いの全60か村が加盟している。セサン川開発に対して、地元住民の声を代表し、抗議の声や意見を外部に伝える能力を持つ組織に発展したと言える。

セサン川流域住民が統一 望書を提出 (2002年11月)

2001年12月から翌2002年1月にかけて行われたストゥントレン州での聞き取り調査の結果、ラタナキリ州ほどではないにしろ、ストゥントレン州でも1996年以降、不自然な洪水や水質汚濁が確認されており、住民生活にも悪影響が生じていることが明らかになった。この調査の結果を議論す

るために、2002年6月、住民集會が開かれたが、その直前、ベトナム政府が、セサン川上流にセサン3ダムを建設すると発表した。集會に集まった村びとたちは、ヤリ滝ダム問題が放置されたまま、あらたなダム建設が始まったことに強い懸念と憤りを感じ、同年11月、「ラタナキリ州セサン川流域に住む諸少数民族による共同声明」(Representatives of the Ethnic Groups Living along the Sesan River of the Four Districts in Ratanakiri, 2002)を発した。共同声明は、以下の点を要求している。

- カンボジア政府は関係機関と協力し、セサン川の水力発電ダム、とりわけセサン3とセサン4ダムの建設中止に向けて尽力すること。
- セサン川を元の自然な流れに戻すこと。
- ダムを建設した者および建設に資金を提供した者は、被害を受けた住民の全財産を弁償すること。
- 政府はベトナム政府と交渉して解決策を見出すこと。
- MRCをはじめとする関係者はラタナキリ州を訪れ、セサン川流域住民と協議をまじえながら被害を調査すること。

同様の要求は、ストウントレン州のSPN代表者からも出された。これ以上ダムを造らせない、川を自然な流れに戻す、損害を補償させるという3つの要求は、これ以降も現在に至るまで不変で、住民ネットワークの活動目標の根幹をなしている。

セサン共同委員会が第1回く

3回会合を開催

(2001年7月、2002年4月、2003年11月)

3度にわたって開催されたセサン共同委員会の会合では、ベトナム政府がほぼ会合の主導権を握つ

ていたと言つてよい。この点に関して研究者の分析(Wyatt & Baird, 2007)を以下にまとめる。

カンボジア政府が交渉の席で弱い立場に甘んじることがない理由として、カンボジア政府には、セサン川問題について調査を実施するだけの資金も技術もないことがある。また、自国民の被害に関して、ベトナム政府に真つ向から立ち向かおうとする政治的意思を欠いている。

例えば、ヤリ滝ダムの操業を調整することで、下流に発生する水位の変動を弱め、河岸の侵食や舟・漁具の流失などを一定程度防ぐことは可能だろう。しかし、カンボジア政府には、ダムの操業と環境社会影響を関連付けることができない。また、MRCも、水位の異常変動を示すデータを持っていないから、カンボジア政府を助けようとするしない。カンボジア政府が科学的根拠を示せないのいいことに、ベトナム政府はヤリ滝ダムの操業に関する議論を避けつづけた。ダムの操業を調整すれば、自国の電力使用のピーク時に発電量を最大にすることができなくなるからだろう。

3度の会合を通じて、セサン川の後EIAについて議論が行われた。カンボジア政府は、カンボジア領内のセサン川全域を調査の対象とし、漁業への影響を調査課題にふくめるよう要求した。ベトナム政府は、この点については譲歩したが、調査を実施するコンサルタントの選定などで両国の見解

は対立した。ベトナム政府が推したコンサルタントはSWECO社とStarkraft Groner社だったが、カンボジア政府は、両社がこれまでベトナムのダム開発に深く関与してきた点に難色を示した。結局、2005年、ベトナム政府は、カンボジア政府の意向を無視して両社(現SWECO Groner社)を雇用した。

世界銀行とSIDAの対応

(2003年8月、10月)

2003年8月、世界銀行のカンボジア事務所長がラタナキリ州を訪問し、セサン川流域の住民たちやNGOと会合を持った。このとき、カンボジア事務所長は、「世界銀行はヤリ滝ダムの建設には関与していない。ヤリ滝ダムとホーチミン市をつなぐ送電線の敷設を支援しただけだ」と述べ、世界銀行に事態を改善する責任がないことを強調した。しかし一方で、カンボジア事務所長は、「世界銀行が持つあらゆる手段を動員してこの問題に取り組み、ダムによる被害を受けたセサン川流域の村びとを支援するよう努力する」とも述べた(3SPN, 2005)。これ以降、NGOは世界銀行に対して、ベトナム政府に働きかけるよう要望する書簡を何通か送ったが、世界銀行から回答が寄せられたことはない(Trandem, 2008b)。

2003年10月、SPNはSIDAと会合を

持った。SIDAもまた、世界銀行とおなじ理屈で、「SIDAはヤリ滝ダムの建設に関与していない。セサン3ダムと3Aダムを調査する際にENVNに資金を提供しただけで、ヤリ滝ダムによる被害はSIDAの責任ではない」と主張した。そればかりか、「SIDAが関与してもしなくても、ベトナム政府のダム開発は進むであろうから、SIDAはダム開発にかかわることで状況の改善に貢献できる」と述べ、今後もベトナムのダム開発を支援しつづけるという見解を示した(3SPN, 2005)。

セサン・スレポック川でダム開発が加速、スレポック川で問題が顕在化

(2003年11月～2006年5月)

セサン川では、2003年11月にプレイクロンダム、2005年1月にセサン4ダムの建設が始まる。2005年4月にはセサン3ダムが操業を開始する。

スレポック川上流では、1990年にドライホリン・オールドダムが完成したが、このダムはのちに操業を中止していた。しかし、2003年12月、ブオンクオップダム、翌2004年11月にはブオントゥアスラダムの建設が始まった。スレポック川

沿いの住民は、2004年から川の異変に気づきはじめる。2005年の乾季には、スレポック川の水位がかつてないほど低下し、2005年8月9月、12月には、大洪水がスレポック川沿いの村々を襲った。2006年、水位の異常変動は年間を通して発生。2006年雨季、2007年雨季と洪水がますますひどくなる。

この間、流域の住民たちは、NGOと協力してネットワークを拡大、各方面に要求と懸念を訴えつづける。2005年2月、セサン・スレポック・セコンの三河川がメコン河本流と合流するストウントレン州で、カンボジア北東部漁業フォーラムが開催された。約180名の漁民が、カンボジア、ラオス、タイから集い、カンボジアの中央・地元政府職員や内外のNGOも多数参加した。2日間にわたって開催されたこのフォーラムでは、NGOや政府関係者が流域規模での魚類の回遊に関する研究結果を発表し、メコン河流域の生態系が相互に連関し、水産資源の乱獲や大規模開発による環境破壊の悪影響が流域全体におよぶとの認識が共有された。

漁業フォーラムに参加した漁民たちの間では、それまで数年間に、メコン河全域で魚の数と種類が減少、水質が悪化し、水位も不規則に変動するなど、看過できない異変が発生しているという共通認識があった。フォーラムでは、この異変を起こす原因のひとつとして、ダム開発に論議が集中した。参加者は、ダム建設が河川の生態系、川に生きる人びとの



左・漁業フォーラムでの発表。右・多数の漁民が参加した漁業フォーラム。



スタウトレンの市場で東北タイを流れるムン川の魚を見つけてよるこぶタイの漁民。

文化・習慣、地域の農業・漁業・生計・生活を脅かすことを、各地からの報告によって再認識し、一方で、地域の共有資源を回復し・守り・育てるための共同体漁業などの具体的取り組みやその課題についても、活発に議論した。フォーラムは、「カンボジア北東部漁業フォーラム宣言」(Representatives of the Riparian Communities in Cambodia, Laos, and Thailand, 2005) を発して、幕を閉じた。

2005年5月、ラタナキリ・スタウトレンの川沿いの住民が、フン・セン首相に問題解決を

求める要望書を送る (Representatives of the Sesan

Protection Network in Ratanakiri and Sung Treng Provinces, 2005)。同年10月には、スレポック川

およびセコン川流域の住民もネットワークに加わり、SPNを3SPNに改組。2006年5月、今度

は三河川沿いの住民が団結して、フン・セン首相に三河川流域の問題を解決するよう訴える書簡を

提出した (Representatives of the Sesan, Sre Pok, and Sekong Protection Network in Ratanakiri and

Sung Treng Provinces, 2006)。

しかし、村びとたちの要望に対して真摯に耳を傾ける者はいなかった。2005年6月、カンボジア・ベトナム両国内メコン委員会が行った水質調査の結果をめぐる公聴会が開催される。しかし、両国内メコン委員会は、水質の問題は確認されなかったと主張した (Tranden, 2008b)。

2005年8月、ベトナム政府がカンボジア政府に対してセサン4ダムのEIA報告書案を送付し、見解を求めてきた。ベトナム政府がカンボジア政府の懸念に配慮した兆しかとも思われたが、実はセサン4ダムの建設は7か月前、2005年1月にすでに始まっていた (Wyatt & Baird, 2007)。この間、セサン共同委員会は1度も開催されず、第4回目の会合は、第3回目会合の実に4年半後、2008年3月になってやっと開催の運びとなる。住民がフン・セン首相に送った要望書には、今日に至るまで回答がない (Tranden, 2008b)。

セコン川ダム開発が活発化 (2006年4月)

セコン川上流のラオスでは、1999年にホイホダムが操業を開始しているのみであったが、2006年4月にセカマン3ダムの建設がはじまる。2008年現在、少なくとも12か所のダム計画 (セカマン1、セカマン4、セコン3、セコン4、

セコン5、ナムコン1、ナムコン2、ナムコン3、ダクエムル、ホアイラムパンヤイ、セビエン・セナムノイ、セカタム）が進行中である。

事後EIAの実施

(2005年～2007年7月)

2005年から2006年にかけて、セサン・スレポック事後EIAが実施された。住民とNGOは、2つの事後EIA報告書の公開と見直しを、EVN、ベトナム国内メコン委員会、SIDA、NORADに対して強く求めた。

スレポック事後EIA報告書をめぐる公聴会は、2007年1月12日、カンボジア・ベトナム両国内メコン委員会の共催で、プノンペンにおいて開催された。この公聴会には、EVN副総裁、ベトナム水資源環境省をはじめとするベトナム政府各省庁代表、カンボジア鉱工業エネルギー省をはじめとするカンボジア政府各省庁代表、カンボジア各州の州知事、スウェーデン大使館員、カンボジア北東部の住民、NGOなど、約150名が出席した(Sam, 2007)。スレポック川流域の村びとたちは、ここではじめてEVNやベトナム・カンボジア国内メコン委員会のメンバーらと顔を合わせるようになった。EVNが事後EIAの結果を説明するのに対し、流域の住民代表は、セサン川で起きた数々の問



スレポック事後EIA報告書をめぐる公聴会の様子(3SPN提供)。

題を参照しながら、スレポック川でも同様の問題が生じる可能性と、そのことに對する懸念を力説した。さらに、ダム建設の一時中止、ダム建設責任者による補償、ダム建設を前提としたEIAや住民参加を拒むダム事業への資金提供停止を求めつつ、あくまで上流にダムを建設する場合は、放水と水位変動を通知するシステムを整備するよう要請した。また同日、住民は被害状況と要望について「ベトナム領スレポック川におけるダム建設に関するスレポック流域住民による声明」(Representatives of the Sreпок Community, 2007)を発表してこゝ。

これに対してEVN副総裁は、「合意点を見出し、解決策を探り、損害に對応する」ことを約束した(TERRA, 2006)。また、ベトナム政府も、ダム事業は2国間の合意に基づいて実施する、国際条約にしたがい、ベトナム・カンボジア両国民の利益になるよう努める、環境面での悪影響を緩和する、スレポック事後EIA報告書を改善するなどの点を約束した(Sam, 2007)。さらに、カンボジア国内メコン委員会副委員長(環境大臣兼任)は、影響緩和策が見つからない場合は水力発電開発計画を継続しないと発言した(Sam, 2007)。

しかし、他方でEVNは既存のダムによる被害を否定した。EVNの言い分は、スレポック川上流には、ブオンクオップ、ブオントウアスラ、スレポック3、ドライホリン(ニュー)の4か所のダム(当時)があるが、河川の水量に影響するほどダム

の建設は進んでおらず、貯水も完了していないので、スレポック川の流れにも変化は生じていないということだった。また、村びとたちは、公聴会開催を評価しながらも、セサン川問題を解決していない E V N が持ち出す約束にはあくまで懐疑的であった (San, 2007)。

ベトナム・カンボジア両国内メコン委員会も、この席で2つの約束をした。ひとつは、セサン事後 E I A 報告書を公開すること、今ひとつは、2007年3月に、セサン事後 E I A 報告書をめぐる公聴会を開催することである。ところが、その後、国内委員会からはなんの連絡もなく、N G O がくりかえし問い合わせた結果、2007年6月末になってようやく、187ページにわたるセサン事後 E I A 報告書案が公開された。公聴会は、その1週間後、両国内メコン委員会の共催で、プノンペンで開催されることとなった。しかし、報告書案は英語版のみ、公聴会に住民が招かれなかったため、住民と N G O は、公聴会を延期し、手続きを改善するよう求めた。住民からは要望書 (Community Representatives Living along the Sesan River in Ratanakiri Province, 2007) も提出された。こうした働きかけにもかかわらず、改善がなされぬまま、2007年7月5日、両国内メコン委員会が公聴会の強行開催におよんだため、N G O はこの公聴会への参加を拒否した。

カンボジア領内でダム開発 が進行 (2006 年後半)

三河川流域のダム開発は新たな局面を迎える。ベトナム政府がカンボジア政府に対して、セサン川のカンボジア領内に5か所のダムを建設する計画を提案した。これらの事業は、いずれも発電を目的とし、東から、両国国境付近のセサン下流1ダム、ラタナキリ州のセサン下流3ダム、プレクレアン1ダム、プレクレアン2ダム、ストウントレン州のセサン下流2ダムとなっている (San & Barton, 2006)。現在、セサン下流1および下流2ダムの実施可能性調査が進行中である。

セサン・スレポック共同委員 会が第4回会合、事後 E I A の緩和策の行方 (2008年3月)

セサン共同委員会は、スレポック川の管理についても議論できる場となり、「セサン・スレポック共同委員会」と改称される。第4回会合で、セサン事後 E I A 報告書の提案する緩和策の検討を住民と N G O は期待したが、議事録 (Cambodian and

Vietnamese Committees for the Management of the Se San and Srepok Rivers, 2008) からは、カンボジア・ベトナム両政府の緩和策実施に対する熱意が伝わっていない。

会合でカンボジア政府は、セサン川問題については、セサン 4 A 調整池の適切な運営を要望するにとどまり、スレポック川については、住民と N G O の不満を背景に、カンボジア領内で E I A をやり直すよう求めるのみだった。これに対してベトナム政府は、セサン 4 A 調整池を運用することで下流への放水を管理すると答え、スレポック川カンボジア領内での E I A の実施は資金の有無によるとした。最終的には、セサン・スレポック両河川の水質モニタリングに関して、M R C 事務局に支援を要請することが合意された。こうして、既存のダムによる被害が放置される一方で、カンボジア・ベトナム両国政府は、セサン下流1、下流2ダムの調査を迅速に行うための協力を強めることを確認し、会合は締めくくられた。今後、共同委員会の開催は年1度となり、次回会合は2009年まで待たなければならない。事後 E I A の緩和策の実施がますます危がまれる。



おわりに

〜日本とのかかわり〜

実態を把握し、回避し、必要な緩和策を講じ、それらを政策や個別事業の意思決定に反映させることだろう。こうした手続きは、当初から、そして一貫して、影響を受ける人びとや市民社会に対して開かれていなければならないし、不幸にも被害が生じた場合には、ただちに救済策が検討されるような仕組みも不可欠だろう。

さて、メコン圏でそうした枠組みを確立するにあたって、日本政府はどのような取組みや支援を行っているのだろうか。日本政府は、本書で取り上げたカンボジア・ベトナム・ラオス3か国政府にとって、最大の援助国である。同時に日本政府は、「大メコン圏経済協力構想」の名の下にメコン圏の地域統合を推進するADBの最大出資・拠出者で、ラオスの巨大ダムに融資する世界銀行においてもアメリカ合衆国に次いで第2位の出資・拠出者である。

ADBも世界銀行もそれぞれ、カンボジア・ベトナム・ラオス政府に対して、多額の経済援助を供与している(表8)。民間企業による直接投資は度外視するとしても、民間企業の活動を後方支援する公的資金をここに加えれば、日本政府のメコン河流域国への深いかわりが鮮明になるばかりである。しかし、日本政府が、越境する環境問題への対処をメコン圏における愁眉の課題だと認識しているようには見えない。

MRCについては、これまでもたびたび触れたが、国際河川メコン河の共同管理を促進する目的で

流域の社会、そこにダム開発がもたらした被害、そして問題解決を目指す村びとたちとNGOの取り組みを詳細に述べてきた。三河川流域がたたる豊かさや村びとたちにもたらす恵みを知れば知るほど、ダム開発による悪影響が看過し難いものであり、損害に対しては正当な補償が、進行・計画中のダム開発に対しては過去の教訓化と住民参加を通じた慎重な判断や対応が求められていることが明らかになったと思う。

2001年12月にSPNが活動を開始して、今年で8年の月日が流れようとしている。この間被害住民は、セサン・スレポック・セコン三河川流域でネットワークを拡大しつつ、カンボジア・ベトナム両政府をはじめ、MRC、カンボジア・ベトナム国内メコン河委員会、関連援助国・国際援助機関への働きかけを強めてきた。その結果、2007年にはついに、1990年後半からセサン川流域の住民たちが訴えてきた数々の問題をセサン事後EIA報告書が公式に確認し、セサン・スレポック川が被る環境社会影響に対する緩和策を提案するまでに至った。しかしながら、カンボジア・ベトナムの当該両政府がどれだけ真剣に緩和策を実施するつもりがあるかは疑問であり、MRCも、2国間に歴然と存在する力関係をこまねいているだけで、国境を越える河川管理の促進役としての気概がいつこうに感じられない。今後も、村びとたちとNGOによる、これまで以上にねばり強い活動が必要になる。

本書では、セサン・スレポック・セコン三河川

表8 日本政府・世界銀行・ADBの援助額（1993年～2006年）

単位 100万ドル（表示額は2008年現在のドル換算、支払い純額ベース）

対ベトナム援助

	日本 (二国間供与)	世界銀行 (拠出額)	ADB (拠出額)
1993	11.47	-0.6	2.44
1994	79.46	125.2	8.84
1995	170.19	46.45	56.81
1996	120.85	188	26.91
1997	232.49	180.2	147.47
1998	388.62	253.06	127.88
1999	679.99	156.1	192.72
2000	923.68	172.51	236.3
2001	459.53	276.68	174.78
2002	374.74	258.9	236.54
2003	484.24	565.18	298.52
2004	615.33	435.73	191.79
2005	602.66	379.2	212.56
2006	562.91	322.09	164.53

対ラオス援助

	日本 (二国間供与)	世界銀行 (拠出額)	ADB (拠出額)
1993	40.43	37.44	45.85
1994	60.71	26.2	23.96
1995	97.58	27.09	61.44
1996	57.41	59	83.64
1997	78.6	40.9	85.55
1998	85.57	23.68	63.5
1999	132.54	18.52	43.79
2000	114.87	16.73	47.28
2001	75.47	26.86	40.21
2002	90.09	27.2	43.72
2003	86	41.65	47.59
2004	71.73	29.2	39.05
2005	54.06	37.41	82.25
2006	64.07	35.14	71.63

対カンボジア援助

	日本 (二国間供与)	世界銀行 (拠出額)	ADB (拠出額)
1993	61.34		5.98
1994	64.52	38.23	16.36
1995	152.04	24.62	45.42
1996	71.34	45.60	32.06
1997	61.63	30.41	10.74
1998	81.40	19.18	29.33
1999	50.87	26.78	26.16
2000	99.21	36.57	50.83
2001	120.21	39.55	48.35
2002	98.58	47.25	79.05
2003	125.88	63.78	74.13
2004	86.37	47.39	78.75
2005	100.62	35.50	85.67
2006	106.28	20.66	55.05

OECD（2008）のデータをもとに作成。

表9 日本政府の対MRC拠出金

単位 1000ドル

年度	拠出額
2000	1001
2001	825
2002	418
2003	269
2004	319
2005	382
2006	342
合計	3556

外務省（2003、2006: 41, 187、
2007: 44, 179）より作成。



発足した機関である。これは、MRCが越境する環境問題への対処を期待されていることにほかならない。ところが、セサン・スレポック・セコン川流域に発生した環境社会被害に対して、MRCが実際に果たしてきた役割はきわめて限定的である。MRCに対して、三河川流域に住む村びとたちがたびたび窮状を訴えてきたことを考えると、MRCのこれまでの対応には、村びとたちならずとも失望感を禁じえない。

日本政府は、ADBや世界銀行に対する関与の比ではないにしても、MRCにも毎年活動資金を提供しており、2000年から7年間の拠出は総額で約356万ドルにおよぶ(表9)。現実に発生した環境社会影響に対応しきれない機関に、日本政府があくまで資金援助を継続する意義はなんなのだろうか。MRCへの資金提供を通じて、日本政府は、越境する環境問題への取り組みを強める意図があるのだろうか。

確かに、日本政府が、本書で取り上げた個々のダム開発事業のすべてに経済援助を注ぎ込んで、越境する環境被害を発生させる張本人になっているというわけではない。しかし、個別事業推進のための調査や、政府の水力発電開発計画の策定を、日本政府の資金が間接的に支えている例はある。そして、間接的な関与には、また別の形態もある。その好例がベトナムである。

日本政府は、特に1993年以降、EVN(旧

ベトナム電力公社、現ベトナム電力グループ)への援助を通して、ベトナム政府の電力開発計画を強力に後押ししてきた。1993年には、フーミー火力発電所、ファーライ火力発電所(増設)、ハムトアン・ターミー水力発電所と、3つの案件を支援し、1995年度から1997年度には、おなじ3件の事業に対して追加融資を実行した。また、1997年度にはオモン火力発電所、1998年度にはダイニン水力発電所への援助を開始し、2003年以降にはあらたに、タクモ水力発電所、ニンピン火力発電所、ギソン火力発電所の建設に対して円借款を供与した。これらを総合すると、日本政府は、1959年から2006年までの間に、ベトナムにおける10件の水力・火力発電所をふくむ36件の開発事業(無償資金協力をふくむ)に対して、総額約4000億円の経済援助を実施してきたのである(表10)。つまり、日本政府の対ベトナム電力開発支援が、ベトナム政府をして、セサン・スレポック・セコン三河川流域でダム開発を推進するための余剰資金を生ましめているのである。

「はじめに」の冒頭で、セサン・スレポック・セコン川流域に住む村びとたちの現状を、より多くの人びとに知っていただくことが本書の目的であると書いた。大規模開発の影響、開発援助の弊害、国境を越える環境社会被害といった本書を貫くテーマは、それだけで一定の方々に関心を持っていただけるの

表10 日本政府の対ベトナム電力開発援助案件と供与額

案件	供与額(億円)
ダニム水力発電所(4件)	106.88
カントー火力発電所(1件)	57.60
フーミー火力発電所(4件)	619.32
ファーライ火力発電所(5件)	728.26
ハムトアン・ターミー水力発電所(5件)	530.74
オモン火力発電(6件)	807.30
ダイニン水力発電所(3件)	331.72
タクモ水力発電所(1件)	59.72
ニンピン火力発電所(2件)	338.54
ギソン火力発電所(1件)	209.43
その他(送電線・復旧計画など)(4件)	190.07
合計(36件)	3979.58

外務省(2008b、2008c)、外務省国際協力局(2008)より作成。

かもしれないが、最後に、日本社会に住むわたしたちのかかわりを論じることで、いつそう多くの方々(本書を手にして、三河川流域に住む村びとたちの声に耳を傾けてくださることになれば、こんな)にうれしいことはない。

和文

- 外務省 (2003) 「メコン河委員会拠出金」. <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiry/sonota/k_kikan_15/pdfs/177.pdf>(最終アクセス日 2008 年 9 月 15 日).
- 外務省 (2006) 『国際機関等への拠出金・出資金等に関する報告書 平成 18 年度版』.
- 外務省 (2007) 『国際機関等への拠出金・出資金等に関する報告書 平成 19 年度版』.
- 外務省 (2008a) 「カンボジア王国 (Kingdom of Cambodia)」. <<http://www.mofa.go.jp/MOFAJ/area/cambodia/data.html>>(最終アクセス日 2008 年 8 月 16 日).
- 外務省 (2008b) 「ベトナム：90 年度までの有償資金協力及び無償資金協力実績：年度別・形態別実績」. <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiry/jisseki/kuni/j_90sbefore/901-02.htm> (最終アクセス日 2008 年 8 月 26 日).
- 外務省 (2008c) 「ベトナム：91 年度～98 年度の有償資金協力及び無償資金協力実績：年度別・形態別実績」. <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiry/jisseki/kuni/j_99/g1-02.htm> (最終アクセス日 2008 年 8 月 26 日).
- 外務省国際協力局 (編) (2008) 『政府開発援助 (ODA) 国別データブック 2007』.
- 国際協力機構 (JICA) (2008) 「カンボジア水力開発マスタープラン調査の概要」. <http://gwweb.jica.go.jp/km/km_frame.nsf>(最終アクセス日 2008 年 8 月 16 日).
- 杉田玲奈 (2005) 「ADB 融資国道一号线改修事業監査～非自発的住民移転政策実施におけるカンボジアでの課題」 『フォーラム Mekong』 Vol.6 No.4, pp.12-17.
- 地球・人間環境フォーラム (2007) 『ベトナムにおける企業の環境対策と社会的責任 CSR in Asia』 東京：地球・人間環境フォーラム.
- 福田健治 (2008) 「カンボジア国道 1 号線改修事業～無償資金協力と大規模住民移転」 『フォーラム Mekong』 Vol.9 No.2, pp.22-27.
- 堀博 (1996) 『メコン河—開発と環境』 東京：古今書院.
- 松本悟 (2003) 「メコン地域：地域全体の市民社会の声を反映する仕組みを」日本環境会議／『アジア環境白書』編集委員会 (編) 『アジア環境白書 2003/2004』東京：東洋経済新報社, pp.175-200.

英文

- 3S Protection Network (3SPN) (2005). 3S Newsletter, Vol.1 No.1.
- 3SPN (2006). Press Release: Severe Flooding Affecting the Lives of Villagers on the Srepok River, 16 August 2006. Ratanakiri, Cambodia: 3SPN.
- 3SPN (2007). Abandoned Villages along the Sesan River in Ratanakiri Province, Northeastern Cambodia. Ratanakiri, Cambodia: 3SPN.
- 3SPN (in progress). State of the 3S Rivers Report 2006-mid 2007. Ratanakiri, Cambodia: 3SPN.
- Australian Mekong Resource Centre (AMRC) (2003). Hydropower Development in the Se San Watershed. Sydney, Australia: AMRC. Last retrieved on 16 August 2008 from: http://www.mekong.es.usyd.edu.au/case_studies/sesan/index.htm.
- Baird, Ian G. (2005). Major Fish Migration in the Lao-Cambodia Mekong Area. Presentation at the Northeast Cambodia Northeast Fishery Forum, Stung Treng, Cambodia, 22 February 2005.

- Baird, Ian G., *et al.* (2002). *A Community-Based Study of the Downstream Impacts of the Yali Falls Dam along the Se San, Sre Pok and Sekong Rivers in Stung Treng Province, Northeast Cambodia*. Stung Treng, Cambodia: Se San Protection Network (SPN) Project, Partners for Development (PFD), Non-Timber Forest Products Project (NTFP), Se San District Agriculture, Fisheries, and Forestry Office, and Se San District Office.
- Baird, Ian G., and Mean Meach (2005). *Sesan River Fisheries Monitoring in Ratanakiri Province, Northeast Cambodia: Before and After the Construction of the Yali Falls Dam in the Central Highlands of Vietnam*. Ratanakiri, Cambodia: 3SPN.
- Chandara, Lor, and Fergal Quinn (2007). Vietnam Offers To Build Two Hydropower Dams in Ratanakiri. *Cambodia Daily*, 20 July 2007.
- Cambodian and Vietnamese Committees for the Management of the Se San and Srepok Rivers (2008). *Minutes of the Fourth Meeting between Cambodian and Vietnamese Committees for the Management of the Se San and Sre Pok Rivers, 4-5 March*.
- Claasen, A. H. (2004). *Abundance, Distribution, and Reproductive Success of Sandbar Nesting Birds below the Yali Falls Hydropower Dam on the Sesan River, Northeast Cambodia*. Phnom Penh, Cambodia: Worldwide Fund for Nature (WWF), Danish International Development Assistance (DANIDA), Wildlife Conservation Society (WCS), and BirdLife International in Indochina.
- Community Representatives Living along the Sesan River in Ratanakiri Province (2007). *Letter regarding the Meeting to Monitor on the Draft Sesan EIA Report Causing from the Hydropower Projects in Vietnam to Cambodia Part (sic)*, 30 June 2007, Ratanakiri, Cambodia.
- Electricity of Vietnam (EVN) (2003). *Result of Five Prime Ministers Solution in order to Avoid Damage to Downstream by Ialy Reservoir Water Release (sic)*. Hanoi, Vietnam: EVN.
- Fisheries Office, and Non-Timber Forest Products Project (NTFP) (2000). *A Study of Downstream Impacts of the Yali Falls Dam in the Sesan River Basin in Ratanakiri Province, Northeast Cambodia*. Ratanakiri, Cambodia: Fisheries Office.
- Halcrow and Partners (1999). *Sekong-Se San and Nam Theun River Basins Hydropower Development Study, Final Report*. Manila, the Philippines: Asian Development Bank.
- Hirsch, Phillip, and Andrew B. Wyatt (2004). Negotiating Local Livelihoods: Scales of Conflict on the Se San River Basin. *Asia Pacific Viewpoint*, Vol.45 No.1, pp.51-63.
- McKenney, Bruce (2001). (Cited in Wyatt & Baird, 2007) *Economic Valuation of Livelihood Income Losses and Other Tangible Downstream Impacts from the Yali Falls Dam to Se San River Basin in Ratanakiri Province, Cambodia*. Phnom Penh, Cambodia: Oxfam America East Asia Regional Office.
- Mekong River Commission (MRC) (1995). *Agreement on the Cooperation for the Sustainable Development of the Mekong River Basin*. Bangkok, Thailand: MRC.
- MRC (2003). *Procedures for Notification, Prior Consultation and Agreement*. Phnom Penh, Cambodia: MRC.
- MRC (2008a). *About the MRC*. Vientiane, Lao PDR: MRC. Last retrieved on 18 August 2008 from: <http://www.mrcmekong.org>.
- MRC (2008b). *Financial Statements for the Year Ended 31 December 2007*. Vientiane, Lao PDR: MRC. Last retrieved on 20 August 2008 from: http://www.mrcmekong.org/download/finance/Financial_Statement2007.pdf.
- NGO Forum on Cambodia (2005). *Down River: The Consequences of Vietnam's Se San River Dams on Life in Cambodia and their Meaning in International Law*. Phnom Penh, Cambodia: NGO Forum on Cambodia.
- Oxfam America East Asia Regional Office (2005). *Existing or Proposed Hydropower Sites in the Sekong, Sesan, Srepok Basins – Status of Large-Scale Projects*. Phnom Penh, Cambodia: Oxfam America East Asia Regional Office.
- Organisation for Economic Co-operation and Development (OECD) (2008). *OECD.Stat Extracts*. Paris, France: OECD. Last retrieved on 27 August 2008 from: <http://stats.oecd.org/WBOS/Index.aspx?DatasetCode=CRSNEW>.
- PECC-1 and KCC (2008). *Lower Se San 2 Hydropower Project: Public Consultation Meeting for the EIA Study*. Document distributed at the Consultation Meeting on Lower Sesan 2 Project, 9 May 2008, Stung Treng, Cambodia.
- Poulsen, Anders F., *et al.* (2002). *Fish Migrations of the Lower Mekong River Basin: Implications for*

- Development, Planning and Environmental Management. *MRC Technical Paper*, No.8. Phnom Penh, Cambodia: MRC.
- Representatives of the Ethnic Groups Living along the Sesan River of the Four Districts in Ratanakiri (2002). *Joint Statement from Ethnic Minority Groups Living along the Sesan River in Ratanakiri*, 24 November 2002, Ratanakiri, Cambodia.
- Representatives of the Riparian Communities in Cambodia, Laos, and Thailand (2005). *Declaration of the Cambodia Northeast Fishery Forum*, 23 February 2005, Stung Treng, Cambodia.
- Representatives of the Sesan Protection Network in Ratanakiri and Stung Treng Provinces (2005). *Letter to Samdach Hun Sen, Prime Minister of the Kingdom of Cambodia*, 5 May 2005, Ratanakiri, Cambodia.
- Representatives of the Sesan, Srepok and Sekong Protection Network in Ratanakiri and Stung Treng Provinces (2006). *Letter to Samdach Hun Sen, Prime Minister of the Kingdom of Cambodia*, 4 May 2006, Ratanakiri, Cambodia.
- Representatives of the Srepok Community (2007). *Community Statement over Dam Construction on the Srepok River in Vietnam*, 12 January 2007, Phnom Penh, Cambodia.
- Sam, Rith (2007). Villagers Oppose More Dams in Vietnam. Inter Press Service News Agency (IPS), 14 January 2007.
- Sam, Rith, and Cat Barton (2006). Vietnamese Dams Proposed for Cambodian River. *Phnom Penh Post*, Issue 15/19, 21 September – 5 October 2006.
- Scurrah, Natalia (2007). Transboundary Tributaries: More Hydro Dams, Still No Compensation for Affected Communities. *Watershed: People's Forum on Ecology*, Vol.12 No.2, pp.15-19.
- Sesan Protection Network (SPN) (2005). *Press Release: A Heavy Water Release from Vietnam's Yali Falls Dam Floods Communities in Northeastern Cambodia*, 1 September 2005. Ratanakiri, Cambodia: SPN.
- SWECO Grøner in association with Norwegian Institute for Water Research, EVIORO-DEV, and ENS Consult (2006a). *Environmental Impact Assessment on the Cambodian Part of the Srepok River due to Hydropower Development in Vietnam: Final Report*. Hanoi, Vietnam: EVN.
- SWECO Grøner in association with Norwegian Institute for Water Research, EVIORO-DEV, and ENS Consult (2006b). *Environmental Impact Assessment on the Cambodian Part of the Sesan River due to Hydropower Development in Vietnam: Final Report*. Hanoi, Vietnam: EVN.
- SWECO Grøner in association with Norwegian Institute for Water Research, EVIORO-DEV, and ENS Consult (2007). *Rapid Environmental Impact Assessment on the Cambodian Part of the Sesan River Due to Hydropower Development in Vietnam, Final Report*. Hanoi, Vietnam: EVN.
- Swift, Peter (2006). *Livelihoods in the Srepok River Basin in Cambodia: A Baseline Survey*. Phnom Pnh, Cambodia: NGO Forum on Cambodia.
- Tek, Vannara (2008). Interview, 1 June 2008, Stung Treng, Cambodia.
- Towards Ecological Recovery and Regional Alliance (TERRA) (2006). Vietnamese Authorities Meet Cambodians Threatened by Srepok Dam Projects. *Watershed: People's Forum on Ecology*, Vol.12 No.1, p.8.
- TERRA, and International Rivers (IR) (2008). *Existing and Planned Lao Hydropower Projects*. Last retrieved on 15 August 2008 from: <http://internationalrivers.org/files/Lao%20dam%20data%2016May08.pdf>.
- Trandem, Ame (2008a). *List of Dam Projects in 3S Watershed*. Unpublished manuscript.
- Trandem, Ame (2008b). Interview, 30 May 2008, Phnom Penh, Cambodia.
- United Nations Environment Programme (UNEP) (2008). United Nations Environment Programme Dams and Development Project. Nairobi, Kenya: UNEP. Last retrieved on 19 August 2008 from: http://hqweb.unep.org/dams/documents/ell.asp?story_id=15.
- Vietnam News (VNS) (2007a). EVN to Look at Cambodian Power Projects, 16 June 2007.
- VNS (2007b). EVN to Build Two Cambodian Plants, 15 September 2007.
- VNS (2008). EVN Constructs Two Hydropower Plants: Electricity of Viet Nam Plans to Bring Cambodia Power, 18 January 2008.
- Wyatt, Andrew B., and Baird, Ian G. (2007). Transboundary Impact Assessment in the Sesan River Basin: The Case of the Yali Falls Dam. *International Journal of Water Resources Development*, Vol. 23 No. 3, pp.427-441.

年表

○全体 ●セサン川 ■スレポック川 ▲セコン川

1957年

○「メコン河下流域調査調整委員会」（通称「メコン委員会」）が発足。

1970年

○メコン委員会が、「1970年水資源開発プラン」を発表。

1978年

○メコン委員会が、「暫定メコン委員会」として活動を継続。

1990年

■月不詳、ドライホリン・オールドダム完成（現在は操業中止）。

1992年

●ベトナム政府が、ヤリ滝ダムの環境影響評価（EIA）と経済性評価を実施。

1993年

●11月、ヤリ滝ダムの建設が始まる（2001年完成、2000年タービン運転開始、2002年正式操業開始）。

1995年

- 4月、カンボジア、ラオス、タイ、ベトナム政府が、「メコン河流域の持続可能な開発のための協力協定」（「メコン河協定」）に署名。メコン河委員会（MRC）が発足。
- MRCが、第一年年次ワークプランを採択。

1996年

●後半、大規模な洪水がセサン川沿いの村々を襲う。

1998年

●6月、ヤリ滝ダムの貯水池が完成。

1999年

- この年から2001年にかけて、ヤリ滝ダムの放水が、ベトナムとカンボジアで死者をふくむ深刻な被害を引き起こす。
- 4月、ベトナム国家水力発電計画の調査が始まる。
- 7月、アジア開発銀行（ADB）が、セサン3ダムの建設に技術支援の贈与を決定。
▲月不詳、ホワイホダムが操業を開始。

2000年

- 2月、NGOが「セサン・ワーキンググループ」を結成、ラタナキリ州で発生した問題の概要をはじめて記録する。
- 3月、ヤリ滝ダムの貯水池から突然の放水があり、6人が溺死。
- 3月、ラタナキリ州のセサン川流域で大波による死者が出ているなどの報道。MRCが調査団を現地に派遣。
- 4月、セサン3ダムに関するEIA報告書案が完成。
- 4月、ベトナム政府が、ヤリ滝ダムの放水被害について公式に謝罪。
- 5月、ヤリ滝ダムのタービン4基中2基の運転が始まる。
- 10月、ベトナム政府が、セサン3ダムに対するADBからの事業支援は必要ないと発表。
- 10月、「セサン川を管理するカンボジア・ベトナム共同委員会」（セサン共同委員会）が発足。
- 12月、カンボジア国内メコン委員会から成る代表がヤリ滝ダムを訪問し、ベトナム政府関係者と会談。カンボジア・ベトナム両国が、5項目の解決策で合意。

2001年

- 7月、セサン共同委員会の第1回会合が開かれる。
- 12月、セサン保全ネットワーク（SPN）の結成。

2002年

- 1月、ヤリ滝ダム の 操業が正式に始まる。
- 4月、セサン共同委員会の第2回会合が開かれる。
- 6月、セサン3ダム の 建設が始まる（2005年完成、2006年操業開始）。
- 11月、ベトナム工業省の職員が、ダムのために下流カンボジアで被害が出ている事実を認め、2000年の放水による環境社会影響に対し謝罪。
- 11月、「ラタナキリ州セサン川流域に住む諸少数民族による共同声明」の発表。カンボジア政府に送付される。

2003年

- 4月、セサン3Aダム の 建設が始まる（2006年タービン運転開始、2007年完成）。
- 8月、世界銀行カンボジア事務所長がラタナキリ州を訪問。住民・NGOと会合。
- 10月、スウェーデン国際開発局（SIDA）がSPNと会合。
- 11月、セサン共同委員会の第3回会合で、ベトナム首相が、「ヤリ滝ダム の 放水による下流への被害を回避するための首相による解決の結果」（「5つの解決策」）という指示書を発行。住民・NGOが入手したのは、数年後のことだった。
 - ▲ 10月、セピエン・セナムノイダム の 実施可能性調査の覚書が交わされる。
- 11月、プレイクロンダム の 建設が始まる（2008年完成予定）。
- 11月、MRC理事会が、メコン河支流の流域内での利用や流域外への転流に関する合同委員会への通知の様式を承認。
 - 12月、ブオンクオップダム の 建設が始まる（2008年完成・操業開始予定）。

2004年

- MRCの調整によって、カンボジア・ベトナム両政府が共同でカンボジア側のセサン川の水質調査を開始。
 - スレボック川の流れや水位に異常な変化が見えはじめる。
- 1月、カンボジア側のセサン川管理委員会が廃止され、その権能は「カンボジア、ベトナム、ラオス、タイ国境ダムおよび運河の調整に関する常設委員会」に引き継がれる。
 - 11月、ブオントゥアスラダム の 建設についてカンボジア政府がベトナム政府から通知を受け取る（同年末建設開始、2008年完成予定）。
- 11月、セサン4A調整池の建設が始まる（2008年完成予定）。

2005年

- 乾季（1月～4月ごろ）の間、水位がかつてないほど低くなる。
- 1月、セサン4ダム の 建設が始まる（2010年完成予定）。
- 2月、「カンボジア北東部漁業フォーラム」開催。「カンボジア北東部漁業フォーラム宣言」を発して閉幕。
 - 4月、セサン3ダム が 操業を開始。
 - 5月、「セサン保全ネットワークからフン・セン首相に宛てた要望書」の提出。
 - 6月、水質調査が終了。水質調査に関するNGO向け協議会の開催。
 - 8月、激しい洪水が村を襲い、少なくとも住民1名が溺死。
 - 8月、ベトナム政府が、セサン4ダム の EIA報告書案をカンボジア政府に渡す。
 - 8月、洪水が川沿いの村を襲う。
 - 9月、深刻な洪水が川沿いの村を襲う。
- 10月、SPNが発展解消し、「セサン・スレボック・セコン保全ネットワーク」（3SPN）が生まれる。
 - 12月、洪水が川沿いの村を襲う。
 - ▲ 12月、ナムコン3ダム の 実施可能性調査に関する覚書が交わされる。
 - ▲ 月不詳、セコン5ダム の 実施可能性調査に関する覚書が交わされる（2008年調査終了予定、2015年操業予定）。

2006 年

- 水位の異常変動が悪化し、通年で見られるようになる。
 - ▲ 3月、セカマン1 ダムの実施可能性調査が始まる（2008年建設開始予定）。
 - ▲ 3月、セコン4 ダムの実施可能性調査の覚書が交わされる（2008年建設開始予定、2014年操業開始予定）。
 - ▲ 月不詳、セカマン3 ダムの実施可能性調査の覚書が交わされる。
 - ▲ 4月、セカマン3 ダムの建設が始まる（2010年操業開始予定）。
- 5月、「セサン・スレポック・セコン保全ネットワークからフン・セン首相に宛てた要望書」の提出。
 - 後半、ベトナム政府が、カンボジア領での5か所のダム事業をカンボジア政府に提案。
 - 8月、深刻な洪水が川沿いの村を襲う。
 - ▲ 10月、ナムコン1 ダムの建設の覚書が交わされる（2008年建設開始予定、2013年操業開始予定）。
 - 11月、スレポック事後EIA報告書の発行。
 - 12月、セサン事後EIA報告書の発行。
 - 月不詳、セサン3Aダムの1基目のタービンが稼動。

2007 年

- 1月、スレポック事後EIA報告書をめぐる公聴会の開催。同日、「ベトナム領スレポック川におけるダム建設に関するスレポック流域住民による声明」の発表。
- 2月、スレポック3ダムの建設が始まる（2010年操業開始予定）。
- 5月、セサン3Aダム完成。
- 6月、カンボジア水力開発マスタープラン調査が始まる。
- 6月、セサン下流1ダム、下流2ダムについて、EVNが実施可能性調査を行うことに、カンボジア・ベトナム両政府が合意。
- 6月、「ベトナムのセサン川流域水力発電事業によるカンボジア側への環境影響評価報告書案をめぐる会合について（要請書）」の送付。
- 7月、セサン事後EIA報告書の発行、調査結果について公聴会が開かれる。事前の情報公開が不十分、また被害住民の参加が拒まれたため、NGOも出席を拒否。
- 8月、2か所のダム建設に関して、カンボジア・ベトナム両政府が正式に合意。
 - 8月、深刻な洪水が発生。

2008 年

- 1月、セサン下流1ダムの実施可能性調査が始まる。
- 1月、セサン下流2ダムの実施可能性調査が始まる（2009年建設開始予定、2014年操業開始予定）。
 - 2月、スレポック4ダムの建設が始まる（2010年完成予定）。
- 3月、セサン共同委員会の協議事項にスレポック川の管理を追加、「セサン・スレポック川を管理するカンボジア・ベトナム共同委員会」（「セサン・スレポック共同委員会」）に改称、第4回会合をベトナムで開催。
 - 4月、ベトナム紙がドライホリン・ニューダムは操業中と報道。
 - ▲ 4月、ラオス政府がナムコン2ダム事業を承認（建設完成予定2012年）。
- 5月、セサン下流2ダムのEIAをめぐる公聴会の開催。
 - ▲ 5月、ホアイラムバンヤイダムの実施可能性調査に関する覚書が交わされる。
 - 6月、中国企業がスレポック下流3および下流4ダムの実施可能性調査を行うためにカンボジア政府と覚書を交わす。
 - 月不詳、ドックスエン本流ダムの実施可能性調査が始まる。

村びとが発した主な 声明・宣言・要請文

ラタナキリ州セサン川流域に住む諸少数民族による共同声明

2002年11月24日

セサン川はベトナムの中部高原を水源とし、カンボジア国内でラタナキリ・ストゥントレンの2州を還流する。ラタナキリ州では、オーヤダオ、アンドンメヤス、タベン、プエンサイの4郡を流れるが、この4郡には集合村15か所、村落59か所が点在している。これらの村落には、少なくとも3019世帯の家族が住み、2万人の村びとが生活している。生活・文化・言語は各民族によって異なる。

1996年以来、ベトナムのヤリ滝ダムが引き起こした深刻な洪水で、セサン川流域の自然環境および地域社会には甚大な被害が生じている。

主な被害は以下の通りである。

- 住民の安全 村びとが多数洪水でいのちを落とし、さらに多数の村びとが病気で悩まされている。
- 食糧確保 河岸で農業を営むことが困難となったため、食糧不足が年々深刻になっている。
- 水位・水質 水位の異常変動が農漁業に影響し、水質の悪化が皮膚病や住民の不快感につながっている。
- 魚類 川の淵が埋まり、魚の種類や数が減少している。
- 農業・米作・その他の生産物 水位の異常変動と洪水で被害が現れている。
- 住居と農業施設 各地で家屋などが破壊されている。
- 家畜と耕作動物 死亡ないしは行方不明になっている。
- 漁具・舟 流失・破損している。
- 川辺の動物・野鳥 死亡するものがある。
- 動物 畜牛や水牛が死亡し、病気の蔓延で畜牛の数が減少している。
- 漁獲 突発する洪水を恐れて村びとが川中の島

で休むことを避けるため漁業が衰退している。

- 川の深度 浸食と堆砂で川底が浅くなっている。
- 砂金採取 砂金を採る穴が堆砂で埋まり、砂金採取業が衰退している。
- 有用野生植物 根こそぎになり、枯れてしまったものがある。
- 河岸 浸食が進み、倒木を引き起こしている。
- 伝統文化 生活と生計の破壊で村落内・村落間に培われてきた共同体意識がうすれてきている。
- 乾季の菜園 洪水によって失われている。
- 森林 村びとは水田を放棄せざるをえず、食料・収入源を森に求めるため森林が失われつつある。
- 川沿いの生活基盤 道路・橋・学校・行政施設が破損・破壊されている。

われわれの要求

- カンボジア政府は関係機関と協力し、セサン川の水力発電ダム、とりわけセサン3、セサン4ダムの建設中止に向けて尽力すること。
- セサン川を元の自然な流れに戻すこと。
- ダムを建設した者および建設に資金を提供した者は、被害を受けた村びとの全財産を弁償すること。
- カンボジア政府は、ベトナム政府と交渉して解決策を見出すこと。
- メコン河委員会 (MRC) をはじめとする関係者がラタナキリ州を訪れ、セサン川流域住民と協議をまじえながら被害を調査すること。

(Representatives of the Ethnic Groups Living along the Sesan River of the Four Districts in Ratanakiri, 2002)

カンボジア北東部漁業フォーラム宣言 2005年2月23日

2005年2月22、23日の両日、セサン川、スレポック川、セコン川、トンレサップ湖、沿岸部、メコン河上流域など、カンボジア・ラオス・タイ国内各地の河辺・海辺に点在する村落から180名の村びとが、ストゥントレン州で開催されたカンボジア北東部漁業フォーラムに参集した。

2日間の議論を通して、わたしたちは、以下の課題が存在するとの認識に至った。

過去数年間、メコン河およびその支流の水質、とりわけ水質と水位に深刻な異変が生じた。なかでも水力発電ダムは、農業・漁業など川に住む人びとの生計に被害をもたらしている。

メコン河流域の漁獲高および魚種が減少している。

水力発電ダムの建設が深刻な異変をもたらし、メコン河流域の生態系や川に住む人びとの文化・習慣を危機に追い込んでいる。

カンボジアでは、違法漁業の禁止が効果をあげておらず、違法漁具を使った漁法が見逃されたままである。地元住民と違法な漁業を営む者との間で紛争も絶えず、違法漁業の蔓延で氾濫林の破壊が進行している。

メコン河流域では、水質汚濁・汚染が加速している。

メコン河上流域では、航路確保のために早瀬を爆破・除去し、漁業や魚類の個体数、水質に深刻な影響をおよぼしている。早瀬の除去は河岸侵食の原因でもあり、メコン河本流・支流の河岸農業にも被害が出ている。

提言・要求

以上のことから、わたしたちは、メコン河流域国政府およびメコン河流域で活動する国際開発機関に対して、次の提言と要求を示すとともに、わたしたちの立場を明らかにする。

- 各国政府、その他の関係者は、上記の課題

を十分に検討し、解決策を講じるよう尽力すること。

- わたしたちは、メコン河流域各国に住むすべての人びとが参加できるような、政府間での公正な政策と協力を支持する。
- わたしたちは、不公正な解決策や、開発によって社会・経済・環境・文化上の権利を侵害された地元住民との協議を欠いた解決策は拒否する。
- 各国政府は、地元住民間の協力関係を支援・強化し、メコン河流域での市民社会間の連携が実現するよう助力すること。
- 各国政府は、地元住民が持続可能なやり方で、魚類、その他の自然資源を保全・活用する権利を認めること。
- 各国政府、その他の関係者は、先住民族の文化・習慣・アイデンティティ・生活様式の価値を認めること。
- メコン河流域の自然資源は生態系の一部をなし、メコン河流域に住むすべての人びとの財産である。したがって、流域内のいかなる国といえども、国境を越えて生態系に被害をおよぼしうる開発について、単独で決定を下す権限を持つべきではない。
- 各国政府は、メコン河流域の開発計画・政策策定・意思決定の過程に、人びとが参加できるよう努めること。
- 各国政府は、メコン河流域の情報通信システムを構築し、流域に住む人びとが容易に情報にアクセスできるようにすること。
- 各国政府と国際開発機関は、過去に被害をもたらした開発について説明責任を果たし、被害住民に適宜公平な補償を実施すること。
- 各国政府および関係諸機関は、以上の課題に対して真摯に対応すること。

(Representatives of the Riparian Communities in Cambodia, Laos, and Thailand, 2005)

セサン保全ネットワークからフン・セン首相に宛てた要望書 2005年5月5日

フン・セン首相閣下

わたしたちは、ラタナキリ州とストウントレン州を流れるセサン川沿いに住む5万5000名を超える少数民族で、ベトナムのヤリ滝水力発電ダムによる被害を受けています。その被害の実情を記した要望書を閣下に送ります。

1996年から現在に至るまで、わたしたちは次のような被害を体験してきました。

- 数回にわたる洪水
- ダム建設中の川の枯渇
- 不規則な水位の変動
- 水質の悪化
- 魚種および生息地の減少（堆砂による淵の埋没）
- 地元住民の文化・伝統への悪影響
- 社会的基盤構造の破壊
- 河川の生物多様性の喪失
- 川に依存した生活ができなくなった多くの村びとの離村
- 水位の異常変動による農業生産の悪化
- ダム建設中の水田・農地の水没
- 漁業・砂金採取・河岸農業の衰退
- ダム建設中の人間・家畜の死亡
- 河岸の野生植物の減少
- 財産・設備・材料・家屋・家畜などの損失・紛失
- 川に依存する動物種の減少
- 川の自然な姿の喪失

以上の問題に対して、わたしたちは次の解決策を要望します。

- 閣下に、セサン川を元の流れに戻すよう尽力してもらう。
- 政府に、これ以上ダムを建設しないよう尽力してもらう。
- ダムを建設する者だけでなく、わたしたちにもセサン川の恩恵がもたらされるようにしてもらう。
- 政府に、セサン川流域住民の過去・現在・将来の諸問題を解決する、適切な方策を考案してもらう。
- ダムを建設する者に、下流で生活する住民の生命の安全を保障してもらう。
- 開発を左右する決定を下す前に、地元住民が参加できる公聴会の開催を義務付ける。

政府に対して、今回の要請だけでなく、これまでわたしたちが提出したのもふくめて、すべての要請に回答するよう求めます。

上記の件について、閣下が解決策に向けて尽力して下さるものと思っています。

閣下のご多幸とご成功を祈りつつ。

(Representatives of the Sesan Protection Network in Ratanakiri and Stung Treng Provinces, 2005)

セサン・スレポック・セコン保全ネットワークから フン・セン首相に宛てた要望書 2006年5月4日

フン・セン首相閣下

わたしたちは、ラタナキリ・ストウントレン両州を流れるセサン・スレポック・セサン川の流域で生活する村びとで、その大半は先住民族です。わたしたちは、三河川の上流にあたるベトナム・ラオスに、一連の水力発電ダムが建設されることで深刻な被害を受けています。

わたしたちはカンボジア政府の長である閣下に、地元住民の生計への被害を軽減する有効な解決策を講じていただこうと、こうして訴えることにしました。

閣下もご承知のとおり、三河川流域に住む村びとの大半は先住民族で、河川がもたらす自然資源の恵みに頼ったつつまじやかな生活をしています。ところが、ベトナム・ラオス両政府が、1996年以來、上流にヤリ滝ダムをはじめとする多くの水力発電ダムを建設し、これらのダムがわたしたちの生計手段を直撃し、カンボジア政府の貧困削減の努力を無に帰しています。新旧にかかわらずダム建設はいつも、村びとたちをまじえて評価・検討を下すこともなく、公聴会を開催することもなく、被害を受けた住民に補償を支払うこともなく、進められてきました。これまで発生した深刻な問題は、次のとおりです。

- 水流と水位の不規則な変化
- 頻発する洪水
- 水質の悪化
- 河岸の侵食と堆砂による川底の上昇

こうした問題が種々の結果を引き起こし、貧しいわたしたちの日々の生活に、次のような被害をもたらしました。

- 魚類の繁殖・生息環境への悪影響
- 水産資源の減少と魚類・鳥類・野生生物など自然資源の消滅
- 住民の財産・設備・住居・米の貯蔵庫ならびに住民と家畜の生命に対する損失・損害

- 農作物と生活基盤、とりわけ交通輸送手段への被害
- 水質の悪化と病気の蔓延
- 漁業・砂金採取・河岸農業への被害による生計手段の喪失
- 住民の転出・離村
- 文化と伝統への悪影響
- 森林破壊と土地をめぐる紛争

三河川流域に住むわたしたちは協議の結果、この苦難を軽減するために、次の対策が講じられるべきであると考えます。

- 河川の流れを自然な状態に戻す。
- 大規模ダムの新規建設を禁じる。
- 被害住民の権利・利益・生計のための基本的ニーズを尊重する。
- 過去・現在・将来の損失に対し補償を実施する。
- ダムを建設する者が、最終的に発生する被害に対して責務を認め、責任を負う。
- あらゆる利害関係者、とりわけ地元住民との協議をまじえた、参加型の環境社会評価を実施する。

わたしたち三河川流域の住民は、閣下がカンボジアに平和・発展・貧困削減をもたらした賢明な指導者であり、わたしたちが直面している問題・被害・苦難を深刻に受けとめ、適切な改善策を講じてくださるものと確信しています。

最後に、閣下ならびにご家族のご多幸を祈り、わが国を将来に向けて繁栄に導いてくださいますようお願いいたします。

敬具

(Representatives of the Sesan, Srepok, and Sekong Protection Network in Rattanakiri and Stung Treng Provinces, 2006)

ベトナム領スレポック川におけるダム建設に関するスレポック流域住民による声明 2007年1月12日

於プノンペン

わたしたちスレポック川流域に住む1万2000名の村びとは、環境破壊によってすでにさまざまな被害を体験している。その体験から、ベトナム政府によるスレポック川上流の水力発電ダム建設を非常に懸念している。

わたしたちは、スレポック川流域に住む人びとを代表して、スレポック川のカンボジア側における環境影響評価をめぐる、今回の関係者会合に参加できることをうれしく思う。

この機会をかりて、わたしたちの環境や生計手段に被害をもたらしている問題を列挙する。

- 水位が不定期に変動し、淵が埋まり、河岸の浸食が進行している。
- 人間も動物も、水質の悪化で健康を保てなくなっている。
- 予測不可能な洪水で、河岸の田畑や村びとの財産が失われている。
- 水流が予測不可能となったため、村びとたちが河岸の田畑を放棄し、糊口をしのぐために離村している。
- 水産資源が減少し、漁業で生計が立てられなくなっている。

- 諸々の変化が、伝統文化に悪影響をおよぼしている。

上の問題について、わたしたちは次の通り要求する。

- 関係者は、上記の問題の解決をはかること。
- スレポック川における水力発電ダムの建設を中止すること。
- ダムを建設する者は、わたしたちに生命の安全を保障し、過去・現在・将来の損害に対して補償を行うこと。
- 住民参加、グッドガバナンス、明確な社会環境審査過程が確保できないときには、援助国・援助機関は、水力発電ダム事業に資金を提供しないこと。
- 地元住民のための警報システムを設け、水力発電ダムの便益を住民とも共有すること。

上記の問題と要求について、すべての関係者が真剣に検討した上で賛同することを願ってやまない。

(Representatives of the Srepok Community, 2007)

ベトナムのセサン川流域水力発電事業によるカンボジア側への環境影響評価報告書案をめぐる会合について（要請書）

2007年6月30日

於ラタナキリ

ラタナキリ州セサン川流域住民代表

カンボジア国内メコン委員会殿

わたしたちは、カンボジア国内メコン委員会が、セサン川の環境影響評価報告書案を審議する目的で、2007年7月5日、プノンペンで会合を開催すると聞かされています。本件に関して、わたしたちは、次の質問と要請を提出します。

- なぜ、国内メコン委員会は、セサン川流域住民をこの会合に招待していないのか。
- なぜ、報告書案が、セサン川流域住民に送付されていないのか。
- 国内メコン委員会は、本会合を延期するべきである。

- 国内メコン委員会は、セサン川流域住民の代表を会合に招くべきである。
- セサン川流域住民の参加なしには、今回の会合は無意味である。

カンボジア国内メコン委員会が、上述の点を真剣に受けとめてくださるよう願ってやみません。

敬具

(Community Representatives Living along the Sesan River in Ratanakiri Province, 2007)



メコン・ウォッチは、 メコン川流域国の開発を監視し、 その弊害の回避・軽減に努める NGO です。

21世紀に入ってから、援助機関は、開発の最重要目標として「貧困削減」を掲げるようになりました。ところが、開発を進めるなかで生じる環境破壊や強制的な立ち退きなどによって、生活手段や居住場所を奪われる人たちがあとをたちません。開発は、必ずしも人びとを豊かにするわけではなく、むしろ開発によって人びとが貧困化し、自分たちの力で生活を成り立たせることができなくなる例がしばしば見受けられます。

メコン・ウォッチは、メコン河流域国における開発事業や開発政策の影響を監視する活動を行っている環境 NGO です。わたしたちの願いは、メコン河流域の人びとが開発によって被害を受けることなく、河川や森林など豊かな自然資源に根ざした暮らしを続けられることです。そのために、開発事業によって影響を受ける人びととの対話を通じて、人びとが直面している問題を理解し、そうした問題を援助政策決定者・実施者と議論し、政策や計画に反映させる提言活動を行っています。開発が貧困化をまねかないように調査・監視・提言することは、直接貧困を削減することと同じくらい、場合によってはそれ以上に、大切な人道的支援であり、住民のエンパワーメント（意思決定権の強化）であると考えています。

